面ライダー×魔法少女×魔法少女　ディケイド＆リリカルなのは＆まどか☆マギカ クロス大戦

トーマス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー×魔法少女×魔法少女　ディケイド＆リリカルなのは＆まどか☆マギカ　クロス大戦

【Ｎコード】
Ｎ５７０２Ｖ

【作者名】
トーマス

【あらすじ】
幾多の世界を旅を続ける門矢士。彼らが次に向かった世界は魔法文明が発達した『ミッドチルダ』だった。…しかしこの世界にも闇の魔の手が…そして、見滝原と呼ばれる街で魔女と戦う魔法少女達とリイマジネーションのライダー達がその戦いに巻き込まれる事件に…

プロローグ「魔法の世界」（前書き）

初投稿なので誤字や脱字、不満点がありますかよろしくお願いします。

プロローグ「魔法の世界」

プロローグ「魔法の世界」

ある世界の役割を終え、再び光写真館に戻りそしてイスに座る門矢(かどやつかさ)士。そのまま先ほど撮った写真を見ながらも、テーブルの上に置いた。

「これでここの世界の役目も終わった。さて、次の世界に行くか。」
そう言いながら、風景ロールが動きだしそして新たなる世界に移動した。
風景ロールに写し出した絵は、ピンクの丸い魔方陣の上に赤い宝石に金色の三角形。そして一冊の本が写っていた

「何の世界でしょうか?」
と光夏海の問いに士はいつものように答えた。
「さぁな。外に出れば分かるだろ」
「うん、早く行こう!士に夏海ちゃん!」
そう言いつつ、門矢士と光写真館の孫娘の光夏海(ひかりなつみ)と途中で旅の仲間になった小野寺ユウスケは、写真館の後にする。その三人の後ろを笑顔で見送る写真館の店主、光栄次郎(ひかりえいじろう)は手を振っていた。

「それで、士。ここは何の世界なんだ?」
「……」
「もしかして士くん、分からないんですか?」
「いや、ここは…」

士が何かを言おうとした時に、何かが爆発する爆音が聞こえ士とユ

ウスケはそれぞれの専用のバイクであるマシンディケイダーとトライチェイサーを走らせ、その爆発場所に向かった。

ミッドチルダの市街地に謎の未確認機械兵器ガジェットドローン？型が無差別に街を破壊していた。その未確認兵器から市民を避難させながら戦う少女達がいた。

オレンジ色の髪のツインテールの少女、ティアナ・ランスターは一人の少女に叫びながら、こう言った

「ッ！何だってこんな所で、ガジェットが出てくるのよ！？」

「だけどティア、こんな所にレリック反応あったけ？」

「知らないわよ！それで、エリオとキャロは！？」

「今連絡あって、ほとんどが避難終わったから今すぐ来るって！後なのはさん達も！！」

「それまで私たちが何とかするわよ、スバル！」

「ＯＫ！行こう、ティア！」

ボーイッシュな少女・スバル・ナカジマはローラーブーツ型のインテリジェントデバイス・『マッハキャリバー』を走らせ、スバルの右手に装着している籠手型のアームドデバイス『リボルバーナックル』に拳を握り締めながら、ガジェットに叩きつけ、そのスバルの後方にティアナは拳銃型のインテリジェントデバイス『クロスミラージュ』を構えて、魔力弾を発射しスバルの援護しながら、ガジェットを倒していた。

「それで、士くん。ここの世界は何ですか？それに、あの子達は…？」

「ここの世界は『ミッドチルダの世界』魔法文明が発達している世界。それとあいつらは時空管理局だ、まぁ簡単に言えば警察みたい

なもんだ」
「ま、魔法ですか?そんな世界が…」
と驚く夏海にのん気にスバルとティアナの戦いを見つめている士にユウスケは
「それより俺たちも早く助けに行こう、士!彼女たちを助けないと!」
「あいつらなら大丈夫だ。あんな雑魚相手に負ける筈が無い……多分な」
「多分って…」
そんな善戦で戦っていたスバルとティアナであったが、先ほどよりガジェットの数が増え始め、次第に押さえていた
「こいつら急に数が増えて、一体何がどうなってんのよ!」
「何かを待っているようには見えるけど…ティア!あぶない!」
「えっ…きゃぁ!」
一体のガジェットの放ったビームがティアナの足元を爆発させ、その爆風で飛ばされるティアナ。その隙を逃さないかのように、他のガジェットたちがティアナの周りを囲み始めた。しかし、先ほどの攻撃でクロスミラージが手元から離れ、スバルも彼女を助けに行こうとしたがガジェットがそれを邪魔して進めない状態であった。
更に一体のガジェットがティアナに向けて、ビームを発射しようとした瞬間。『このままではやられる!』っと思いながら諦めるかの様に目を閉じた瞬間。ビーム発射する寸前でガジェットが何者かに蹴り飛ばされ爆発。それを恐る恐る見た瞬間。目の前に立つのは、赤い装甲を纏った一人の戦士・仮面ライダークウガが立っていた。
彼は周りのガジェット一体をパンチで殴り飛ばした事で、ガジェッ

ト達はクウガを敵として認識しビームを発射するが、クウガはそれを避け。その隙にガジェットの間合いに入りクウガのマイティフォームの特性である格闘戦を駆使し、パンチとキックでティアナの周りにいたガジェットを全て倒し、クウガはティアナに駆け寄った。

「君、怪我は無い？」
「えっ、は、はい。あなたは？」
「良かった。君はそこで待ってて！士、早く！」

そんなクウガ（ユウスケ）の呼びかけに、出てくる一人の青年が現れた

「ったく。ユウスケ、お前のお人好しは困ったもんだ…まぁいい。さっさと片付けるぞ！」
「片付けるって…一体貴方達が誰だか知りませんか、ここは危険です！早く避難をして下さい！」

そんな彼女の警告を無視て。士はディケイドライバーを取り出し、腰に装着しカードをバックルに入れる

「変身！」
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＤＥＣＡＤＥ！』
オーロラに包まれたかと思うと…マゼンタとブラック、ホワイトを基調（メイン）とした仮面の戦士に変身する
世界を破壊し、全てを繋ぐ…通りすがりの仮面ライダー。

世界の破壊者ディケイド、幾多の世界でその瞳は何を見る

プロローグ「魔法の世界」（後書き）

感想及び意見をお願いします

プロローグ2　「仮面ライダーと魔法少女」（前書き）

士「プロローグ2俺達の活躍をよーく見とけ！」
ユウスケ「つーかーさー！」
士「何だユウスケ、何で怒っているんだ？」
ユウスケ「お前は悪魔だ！俺達の出番を奪う悪魔だ！」（クウガ・アルティメットフォーム（黒目）に変身）
士「よく分からないが、変身！」

なのは「士さんがあのカードで変身して一気に…スバルやユウスケさんの出番は兎も角、私の出番まで奪って……少し頭冷やそうか」

ティアナ「（なのはさんなんか怖い…）」
スバル「（あはは・・・）」

エリオ「とにかく、プロローグ2！」
キャロ「始まります！」
エリオ「……って、僕達の出番ここだけ！？」

プロローグ2　「仮面ライダーと魔法少女」

ミッドチルダに現れた仮面ライダーディケイド。彼は早速、腰に付けているライドブッカーを剣型のソードモードでガジェットたちを斬りに行き、そして1枚のカードを取り出しバックルに入れる

『Ａｔｔａｃｋ　Ｒｉｄｅ　ＳＬＡＳＨ！』
「ハァァァー！」

ディケイドの剣先で2体のガジェットは真っ二つになり爆発。そのままガンモードに変え、他のガジェットたちに撃ち放ち、クウガはパンチで応戦する。それを見ていた2人の少女は突然現れた戦士の戦いに唖然と見ることしか出なかった

「ね、ねぇ…ティア、アレって何なの！？」
「私が知るわけ無いでしょ…あれもバリアジャケット？けど、あんなの見たことないし…」

「大体減ったな。なら一気に早く叩く！」
『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ！』

ディケイドは人類からオルフェノクと呼ばれる怪物から守る戦士・ファイズと呼ばれるライダーに変身し、更に別のカードを入れる
『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ　ＡＸＥＬ！』

「えっ！？姿が2回も変わった！ティア、今の見た見た！？」
「見たに決まってるでしょ…一体何なのよあれ…」

姿を変えて変身するディケイドを見ては騒ぐスバルにちょっと、理

解に苦しむティアナにディケイドは何かを言い忘れたかのようにこう言った

「言い忘れたが、通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ！」

「「か、仮面ライダー！？」」

「お喋りは後だ、１０秒間だけ待っていろ」

そして左腕に付いているファイズアクセルと呼ばれるリストウォッチ型コントロールデバイスにスイッチを押し

『Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ』

電子音とともにＤファイズＡＦは高速の世界に入り、一瞬でガジェット達次々と宙に浮く。

それを見ていたスバルとティアナは突然消えるＤファイズＡＦに、急に宙に浮くガジェットの姿に二人は理解が出来なかった。

そして…ガジェット達を全て宙に浮かせそのまま、ＤファイズＡＦはファイズの紋章か描かれた金色のカードを入れ、ＤファイズＡＦはガジェット達の前に飛び上がり、そして…

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＦＡ、ＦＡ、ＦＡ、ＦＡＩＺ！』

円錐状の赤い光が全てのガジェット達に直撃し、ＤファイズＡＦは飛び蹴りを放す。そして、『３・２・１　Ｔｉｍｅ　Ｏｕｔ』の音声とともにＤファイズＡＦはディケイドの姿に戻り、その後ろではガジェットは全て赤いΦ（〇を貫く？）の文字が浮き爆発した。

「やれやれ、こんなもんか。」とぼやきながら、変身を解除した士は子供の様にカッコイイ物を見て騒ぎティアナの肩を揺らして、士の事を指を指すスバルと未だに唖然としているティアナの所に歩いていった。

「お前ら、怪我は無いか？」
「「は、はい！」」
「そ、それで貴方達は一体…」
「言っただろ、通りすがりの仮面ライダーだって」
「その仮面ライダーってなんですか！私見ててカッコイイ！って思いました！あれもディバイスの一種ですか！」
「あっーうるさい！お前らこそ誰だ。それであの機械共はなんだ？」
「紹介遅れました。私は時空管理局機動六課スターズ３、スバル・ナカジマです！」
「同じく機動六課スターズ４、ティアナ・ランスターです！それで、先ほど暴れていたのは『ガジェット・ドローン』と呼ばれる未確認で」
「なるほど、大体分かった。あの機械共が街中で暴れていたから、お前らが戦っていた。そうだろ？」
「は、はい。そうです」

「士、彼女たちが自己紹介したんだから俺たちも紹介しとこうよ。俺は小野寺ユウスケ、さっきのは仮面ライダークウガ。よろしくね、スバルちゃんにティアナちゃん！」
「俺は門矢士。さっきのは仮面ライダーディケイド。それでコイツは夏みかんだ」
「誰が夏みかんですか！私は光夏海です、よろしくお願いします」
「はい、よろしくお願いします！…ところで士さん達は一体？」
「俺達は色んな世界を旅をしていて、ついさっきこの世界に着いたばかりなんだ」
「色んな世界…って事は士さん達は次元漂流者になるのかな、ティア？」
「うーん。多分そうなるわね…」

「「次元漂流者？」」
と夏海とユウスケが首を傾げる中、次元漂流について説明しようとするティアナであったが、空から巨大な白い竜と一人の女性が降りてきた。
「スバルー！ティアナー！」
「スバルさんー！ティアナさんー！」
「なのはさん！」
「エリオ！キャロ！」

白い服（バリアジャケット）を纏った女性・高町なのは。『エースオブエース』の称号を持つ管理局のエース。スバルとティアナのスターズ分隊の隊長であり、スバルにとっては一番の憧れの人で、そして命の恩人。
二人はなのは達に駆け寄り、先ほどの出来事を説明した。（説明のほとんどがティアナによる）それを聞いて、なのはは士たちの元に駆け寄り、頭下げた

「私の部下を助けてもらってありがとうございます」
「い、いえ俺達は当たり前な事をしただけだから、頭上げてもらえるかな？」
「部下って事は、アンタはあいつらの上司か？」
「はい！時空管理局・機動六課スターズ１高町なのは一等空尉であります！」
「俺は小野寺ユウスケ。よろしく、なのはちゃん」
「光夏海です。よろしくお願いします」
「門矢士。通りすがりの仮面ライダーだ。」
「それでは、士さんと夏海さんにユウスケさん。すみませんが色々事情をお聞きしたいので、私達と一緒に来てもらえませんか？もうそろそろ、迎えのヘリが来ますので…」
「俺は構わんぞ。ユウスケと夏みかんはどうするつもりだ？」
「俺も一緒に同行するよ。士一人だと説明大変だし」

「私も同じです。士くん一人だと問題が起きそうですし。私とユウスケで説明した方が良いですから」
「お・ま・え・らなぁぁぁー！」

そのまま騒ぎ出す士の首筋に夏海は光家秘伝の『笑いのつぼ』を出して士を大笑いにしてまい、それを見ていたなのは達は別の意味で唖然としていた。そして夏海はなのは達にこれまでの旅の経緯を話をする為ヘリに入り。士とユウスケは自身の専用バイクがある為仕方なくヘリを追いかけながらバイクを走らせた

――機動六課・部隊長室。六課の部隊長・八神はやては、部隊長補佐のリインフォース？（ツヴァイ）と共にモニターで知人の男性と話をしていた。

『――すまねぇな。やっと出来上がったばっかりで色々大変だって時に連絡してよ』
「いえ、私はそんなこと気にしません。それで師匠、用件はなんです？」

師匠…ゲンヤ・ナカジマ。彼は陸士１０８部隊部隊長でスバルとその姉、ギンガの父親である。前に起きた空港火災で途中から現場に駆けつけ、はやてに代わって応援部隊の指揮を執っていた事もあって、はやては空港火災の後、一時期ゲンヤの部隊で研修をしていたことがあり、ゲンヤのことを師匠と呼ぶ仲である。

『――実はな、まだ陸上本部の連中しか知られて無いんだか、最近このミッドチルダに妙な物が裏で出回っているんだ』
「妙な物？一体何なんです？」
『――ああ。それが見た目はただのＵＳＢメモリなんだが…』
「ＵＳＢメモリ？それで、何で妙な物なんです？」

「もしかして、強力なコンピューターウイルスか何かですかー？」
『――コンピューターウイルスとかなら可愛いもんだ。だが、そのＵＳＢメモリは人を化け物に変えてしまう物なんだ』
「人を化け物に？一体どういうことです！」
『――落ち着けって。それと、さっきも言ったがこの話はまだ本局には内密にしているんだ』
「どうしてそれを本局には内密しているんです？それに、今の話しが本当だとしても目撃者がいるなら、対策も取れるはずですー」

『――それがよ、最初にその怪物に襲われた被害者は陸上本部の局員なんだ。一人は未だに意識不明の状態で、もう一人は軽症であったが未だに『人が怪物になった…ＵＳＢメモリで怪物に…』ってな、感じで言って未だに病院で怯えている。そこの医者からも何かの幻覚で未だに怯えているだけだ…だから目撃者はいないんだ』

「けどそれなら、ＵＳＢメモリの怪物事件にはならないはずや…」
『――それから…ここ数日、変わった事件が発生しそのほとんどが、そのＵＳＢメモリによる事件なんだ。だが、陸上本部は怪物メモリの対策をしなければ、本局にも内密にしている…』

「そ、そんな…どうして陸上本部は本局にも対策を取らせないんですか！？もし、一般の人に被害が出たら！」
『――俺もお前の気持ちだ。しかし、地上本部の上層部の中にはそんな話を信用して無いからな。特にあいつが…』
「……レジアス中将ですね」

レジアス・ゲイズ中将
首都防衛隊代表で、事実上の地上本部トップ。古くからの武闘派で、地上本部の武装化や独立化を推し薦めようとしている人物。強硬派ながらも地上の正義の象徴として知られており、地上本部には彼に

心酔する人物も多い。ミッド地上を軽視する本局に強い不満を抱いており、本局と連携し強い権力を持つ聖王教会とはやて達の機動六課の事を快く思っていない。

『――念の為お前の所にも伝えといた。お前らのところでは無関係かもしれないが、気をつけろ。』

「――はい。後で隊長達皆には報告します。」

『……それと、俺が言うのもアレだが、娘を頼むぞ』

「大丈夫ですよースバルは私達が責任持って、面倒見ますから心配ないですよー」

『――ああ、頼む。』

…そしてゲンヤとの会話が終わった、はやては暫く考えながら外を見ていた

「（古代遺物（ロスト ロギア）レリック…ガジェット…謎のＵＳＢメモリの怪物…一体このミッドチルダに何かが起きようとしている？……嫌な感じや）」

プロローグ2　「仮面ライダーと魔法少女」（後書き）

取り敢えず、プロローグ2です。士達となのは達の出会いと、ミッドチルダにあのメモリの影。これからどうなるが自分でも分かりません。だって思い付きが多いので…なので、暫くはディケイドと六課絡みで行きます。まどマギ組とリイマジ組は暫く出番はありません（おい）

プロローグ3　「影の暗躍と機動六課と協力」（前書き）

はやて「あらすじ劇場いくでぇ～早速なのはちゃん！」

なのは「ええー！？急に言われても困るよはやてちゃん！」
はやて「3秒以内や！部隊長命令！！」
なのは「えーっと…ミッドチルダに現れたディケイドは」
はやて「はい終了！」
なのは「早っ！？」

はやて「次フェイトちゃん行こうか！」
フェイト「スバルとティアナを助け、ガジェットたちを撃墜するディケイド。そして私達の知らない所で謎のメ」
はやて「長い！」
フェイト「長いって言われても…」

はやて「なんや！ろくに説明出来ないなんて、それでも六課の分隊長か！」
なのは「えーそんな事言われても困るよ～」
フェイト「なら、部隊長であるはやてが見本を…」

はやて「……そんなこんなで、プロローグ3始まるよー」
なのフェイ「投げたー！？

プロローグ3　「影の暗躍と機動六課と協力」

――――士達がガジェットと戦っていた時の事……夏海の祖父・栄次郎は三人の為にいつものように、お菓子を作っていた時の間だった。クッキーの型が出来上がり、それが焼き上がるまで、コーヒーを飲む栄次郎とそのオーブンで焼いているクッキーの焼き加減を見ているキバーラだった

『ねぇー栄ちゃん、もうそろそろ焼き上がるわよ～』
「本当かいキバーラちゃん。じゃあ、出したら少し冷まそうか」
『栄ちゃんって本当にお菓子作り好きねー』
「ああ。こうして作っておけば、いつでも帰って来る夏海達が美味しそうに食べてくれるからね。その顔を見ているだけで私は嬉しいんだ。キバーラちゃんは、私のお菓子は好きかい？」
『私も栄ちゃんのだーい好きに決まっているでしょう。それにしてもさっきから、騒がしいわねぇー』
「そういえばそうだね。きっと、何処かでお祭りでもやっているんだろうねぇ。」
『お祭りねー』

「――――うん。お祭りだよ…これから大きなお祭りが始まるんだよ…」

この写真館には現在、栄次郎とキバーラしか居ない。それなのに、栄次郎の背後に１０歳くらいの女の子が立っていた。キバーラは只ならぬ気にその少女のから離れるが、栄次郎は何処かの迷子だと思い、少女に近寄る。

「お穣ちゃん、迷子かな？しかしなんで、家に…」

「迷子じゃないよ…私、お兄ちゃんにお使い頼まれたんだー」
「お使いかぁーよく来たね。けど、おじいちゃんの家は写真館だから売るものは無いんだよ？」
「知ってるよ。私が用事出来たのは、貴方なんだもん……”死神博士”」
「…えっ？」
『栄ちゃん！その子から離れて！』
「――――もう遅いよ、蝙蝠のお姉ちゃん」

その少女の陰により、栄次郎は吸い込まれるかのように徐々に沈んでゆく…
『栄ちゃん！待ってて、今私が！』
「キ、キバーラちゃん！私の事はいいから、早く士くんや夏海の――――」

少女の影によって完全に消える栄次郎と取り残されたキバーラ。そして、少女はキバーラに言った。

『よくも栄ちゃんを…何処に連れて行ったのよ！』
「教えないよ。教えたら折角のお祭りが台無しだもん。それより、蝙蝠のお姉ちゃん。早く『世界の破壊者』と『究極の闇』に言いに行かないの？死神博士を連れて行かれたって」
『っ！？…貴女…何者？』
「それも内緒。私たちの事を今は何も言うなって、お兄ちゃん達に言われているから。それよりもさー」
『っ！』

歯を噛み締めながら、キバーラは灰色のオーロラを出してその中に入り消えた。誰も居ない写真館で、少女は誰かと話していた

『――もしもしお兄ちゃん！私、お兄ちゃんの言われた通りに、死神博士を確保できたよ！』
『――そうか、よく出来たね…これから帰っておいで、これから皆でパーティが始まるから』
『――ホント！うん！私これから急いで帰るねー！私が居ないからって、皆で勝手にお菓子食べちゃダメだよー！』
『――ああ。ちゃんと皆には言うさ。勝手に食べないって、待っているって』
『――うん！じゃあ帰るねー！』

某所…先ほどの少女と会話が終わり、『フッ…』と笑う青年とその背後には一人の女性が立っていた。つい嬉しそうに、後ろの女性と話していた

「嬉しそうですね。……様。」
「ああ。こんなに嬉しい気分は久しぶりさ。あの『大ショッカーの幹部・死神博士』を我々の手に入った。これで私たちの作戦はこれから始まるんだ！管理局を完全消滅出来るんだからな！」
「――ええ。それと、数日前から販売していたメモリが、予定より５０％売り上げが増えています。このまま生産を続ければ、予定より早くほぼミッドチルダに『ガイアメモリ』が出回りますわ」

「くくっ…そうか。さぁ…世界の破壊者・ディケイド。この事態をどうやって解決する？」

そんなことを知らずに士達は機動六課の部隊長室に呼ばれていた。何故ここにいるかは、簡単。先ほどのスバルとティアナを助けた事と、そして仮面ライダーの事について。

「初めまして、私がこの機動六課の部隊長・八神はやて二等陸佐です」
「私がライトニング隊の分隊長・フェイト・T・ハラオン執務官です」
「先ほど紹介しましたが、スターズ隊の分隊長・高町なのは一等空尉です」

「俺は門矢士だ。」
「光夏海です。初めまして」
「小野寺ユウスケです。よろしくね」

隊長達と自己紹介をして、そしてはやては早速話しの本題を話した

「――それでは早速、話の本題ですが。貴方達を次元漂流者として私達が保護します…が先ほどの貴方達お二人の戦闘はこちらでも見たせてもらいました。…ところで、あの姿は一体何です？私たちのバイアジャケットとは違うし、魔力反応も無し。そもそもガジェット達にはＡＭＦ（アンチマギリンクフィールド）を発生させる機能を持っているから、並みの魔導師では手に余る相手です。」

アンチマギリンクフィールド。
ガジェット・ドローンが持っている機能。その為、効果範囲内の魔力結合を解いて魔法を無効化するＡＡＡランクの高位防御魔法で、フィールド系に分類される。その効果範囲内では攻撃魔法どころか移動系魔法も妨害される為、魔導師にとって厄介な機能である。

「あの姿は仮面ライダー。そして、俺は仮面ライダーディケイド。通りすがりの仮面ライダーだ」

「…その仮面ライダーについてと貴方達の事も教えてくれます？」

士たちの事と仮面ライダーについて聞くはやてに夏海が代わりに答えた。

「…はい。私達の事については、私が話します。信じてもらえるかは分かりませんが…」

夏海は今までの出来事を話した。最初に起きた自分の世界に謎のオーロラが現れて、そこからグロンギ・アンノウン以外の各世界の怪人が現れ、夏海の世界に侵攻して崩壊の危機が起きた事。それを食い止められるのは、ディケイドが９つのそれぞれの仮面ライダーの世界に旅に出てその世界を全て救う事だった。

…９つのライダーの世界の旅が終わっても、次の仮面ライダーの世界への旅に行くが、その世界崩壊で暗躍していたのが、各世界の仮面ライダー達が戦ってきた悪の組織が大同団結組織が集結し生まれた秘密組織・『大ショッカー』の世界征服が起きていた事を…

「――信じてもらえますでしょうか？」

「（私たちの知らない世界…そして仮面ライダーと世界の崩壊。そして、大ショッカーの世界征服。これが本当なら何て話や……）は、はい。それで次は…」

「その前に、次は俺たちからの質問だ。この機動六課について聞かせてもらうぞ。それとあの機械兵器にもだ」

「…そうですね。こちらばかり質問しても、そちらにも私達機動六課を知る権利もあるしな。正式名称「古代遺物管理部　機動六課」ロストロギア「レリック」と呼ばれる古代遺物の回収が表向きの部隊なんです」

「ロストロギア？レリック？？」

頭に？を浮かべるユウスケにフェイトが代わりに教えた

「古代遺物（ロストロギア）。過去に何らかの要因で消失した世界、ないしは滅んだ古代文明で造られた遺産の総称です。多くは現存技術では到達出来ていない超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を崩壊させかねない程危険な物もあり、これらを確保・管理する事が私達、時空管理局の任務の１つなんです。

そして、私たちが回収任務をしているのは、『レリック』と呼ばれる赤い結晶状のロストロギアなんです。ですが複数存在してその使用用途は一切不明で、強大な魔力を秘めたロストロギアで、確認された内の一つは周囲を巻き込んで消滅している危険物なんです」

「…それで、あの襲ってきた機械兵器はなんだ？少なくともお前らと敵対していたが」

「私達はあの謎の機械兵器のことを「ガジェットドローン」と呼んでいます。製作者は不明ですが、あのガジェット達は確実にレリックを狙っているのは確かです」

フェイトの説明に夏海はあることに気付いた

「じゃあ、ガジェット達があの街中に現れたって事はレリックがあったって事ですよね？」

「あっ！そう言われるとそうだよ！何で回収しなかったの？」

「実はそれは……」

「もしかして、レリックをあいつらに奪われたのか？」

「い、いえ。そうじゃないんです……あの街中にはレリック反応はありませんでした。それ以前に今までに無かったことなんです。ガジェットが街中で暴れることが」

「……もしかして何かを誘き出す為に、暴れていたって可能性はどうだ？例えば、俺達を誘き出すとか」
「けど、士。俺達はこの世界に着いたばかりだろ。そんな訳…」
その時に部屋中に謎のオーロラが現れ、そこから現れたのは…
『夏海ちゃぁぁぁぁぁ～ん！ユウスケェェェ～！』
「「「キバーラ！？」」」
そこから現れたのは、写真館で祖父の栄次郎と一緒にお留守番していたはずのキバーラだった。そして、急いで来たのがスピードを落とせずユウスケの顔に当たろうとしたが
「うわぁ！」
っと、ユウスケが思わず避けてしまった為、キバーラは部屋のドアにぶつかるが…
『はやてちゃ～ん！シグナムとヴィータちゃんを連れて来…キャ！』
『きゃふん！』
先ほど留守にしていたシグナムとヴィータが戻ってきて、それをはやての元に連れて来たのだが…運悪くキバーラとリィンフォースは豪快に衝突した。
「「「リィン（フォース）！？」」」
「「キバーラ！？」」
この衝突でリィンフォースは気絶して床に倒れるが、キバーラはフラフラになりながらも、夏海に先ほどの事を伝えた

『た、大変よ夏海ちゃん～え、栄ちゃんが誘拐されたのよ～』
「お爺ちゃんが誘拐された!?一体どういうことですか！」
『貴方達が出て行った後よ、爆発みたいな音をしている時に小さい女の子がやってきて、栄ちゃんが変な影の中に吸い込まれちゃったのよぉ～』
「何だって!?本当かキバーラ！」
「しっかし。何で爺さんなんか連れて行ったんだ?誘拐しても、そいつらには特なことなんて無いはずだ」
『それがあるみたいのよーその女の子、栄ちゃんのこと死神博士って言っていたから』
「「「?」」」
「…大体わかった。あのガジェットは俺たちを誘き出す為の囮で、本命は爺さんだったって事だな」
「…お爺ちゃん」
「なあ、士。この世界の俺たちの役割はこの子達と一緒にレリック探しした方が良いと思う」
「…そうらしいな。おい、はやて。そのレリック探し俺たちも手伝うぞ」
「……」
『はやてちゃん?』

死神博士…（自称）怪人作りの名人。自身の怪人態にして最高傑作でもあるイカデビルへと変身する。大ショッカーの大幹部の一人である

その死神博士の名前に少し疑問浮かべ、六課に協力する士の言葉をはやては聞いてなかった。

「（死神博士?一体何のことや……それに門矢さん達は他に何かを

隠している。レリック…街に出回っている謎のメモリ…きっとあの予言にも関係があるはずや。これは聖王教会のカリムにも連絡せなあかんな。……ああ、もうやることが沢山やー！）」

色々考え込むはやて。協力してくれる士達をそろそろ六課を案内しようと思っていたなのはは、はやてに話を言い出した

「ところで、八神部隊長。そろそろ士さん達を六課を案内させても良いでしょうか？」

「へぇ…そ、そうやな！じゃあ、なのはちゃんに任せてええか？」

「分かりました！それでは皆さんに部屋を案内させてますので、付いて来てください」

「ああ。分かった。」

なのはの案内で部隊長室から出る士たち3人。部隊長室に残るはやてとフェイトに先ほど着たばかりで、話が分かっていないシグナムとヴィータ。

「ハァーこれから大変な事が沢山やな…私この歳で髪の毛が禿げてしまう…」

「…それは無いと思うよ、はやて。…けど、士達の前で『なのはちゃん』はどうかと思いますよ八神部隊長」

「あっちゃー色々考えていたから、つい言っちゃったか…」

「うん。考えるのも良いけど、程ほどにね」

「は～い」

「…ところで主はやて。我々にも話して貰えますでしょうか？」

「はーやーて～無視するなぁ」

「あっ！すっかり忘れてたわ！　ごめんな二人とも…私たちが彼らに聞いた話をしようか」

――しかし、先ほどキバーラと衝突し未だに気を失って床に倒れているリィンフォースの事を皆、忘れていた

プロローグ３　「影の暗躍と機動六課と協力」（後書き）

ちょっと遅くなりましたが、プロローグ３です。色々書いてみましたが、殆ど説明話です。次もプロローグ４ですが、次はあの魔法少女達と他のライダー達の話です。

そろそろ本編の話の準備を考えないと

プロローグ４　「夢の中で逢った、ような…」（前書き）

さやか「プロローグ４！これから、私達のお話だー！」
まどか「あ、あうう…緊張してきたよ…」
ＱＢ『大丈夫かい、まどか？緊張しないようにするなら、僕と契約して魔法少女になってよ！』
ほむら「まどかを契約させようだなんて、この私がゆるざ～ん！」
ＱＢ『ほむら…契約させないようにするのは、僕も困るけど…てつを風に言われると…』
まどか「ほむらちゃん…ちょっと変だよ」
さやか「うん。変だ」

ほむら「ほーむん！！」（号泣）
まどか「ほむらちゃーん！どうして泣くの！？」

マミ「プロローグ４始まるわよ！見ないと…ティロ・フィナーレ！」
さやか「あっ…一番良いところ取った」

プロローグ4　「夢の中で逢った、ような…」

私、鹿目まどかは走っていた。見た事も無い居場所を走っていた…長い通路を走り、そして私は非常口の扉がある場所に辿り着いた。何故私はここに来たのか分からない…何かに引き寄せられるように、階段を歩き…非常口の扉が開けた。

――扉を開けた瞬間。私は目を疑った…何故なら、私の住む見滝原が崩れ崩壊していたからだ…そして、空には見た事も無い空中に浮かぶ巨大な歯車に、ドレスをまとった人形を逆さに吊るしたような姿をしていた怪物

その時、黒髪で私と同い年の女の子が、たった一人で空に浮いている謎の怪物と戦っていた…その怪物は崩れたビルを使ってその女の子に投げつけるかのように攻撃し、その子は避けるが、次に炎が襲う。彼女は必死で防御している姿を見て私は思わず声を出してしまった

「酷い…！」

私の言葉にネコのようで狐に近い生き物は言った。

『――彼女には荷が重すぎたんだ。けど、彼女も覚悟の上だ。』

そして、彼女は怪物の攻撃に大きく飛ばされた。私はその生き物に言った

「そんな！あんまりだよ…こんなのってないよ…！」

このままじゃああの子が可哀想…だから私は必死で言った。その時、一瞬あの子が私の事を見て、何かを必死で叫んだ。まるで、私にお願いするように…しかしその生き物は私に言った

『諦めたらそれまでだ。』

一体何をすれば良いのか、分からない私…だが、それは私に言い続けた

『でも、君なら運命を変えられる。避けようのない滅びも嘆きも、全て君が覆してしまえばいい。その為の力が君に備わっているんだから』

その言葉には私はつい『ホントなの…?』っと…まるでこの生き物に何かを誘われるように…。

「私なんかでも本当に何が出来るの?こんな結末を変えられるの?」

そして、生き物は自信満々で答えた。私の答えを待っていたように…

『もちろんだよ。だから…僕と契約して『魔法少女』になってよ!』

そして…私は――――――――――――

「……夢オチ?」

…私は肝心な所で起きてしまった。これから魔法少女になって見滝原を救う…

――なんて中学生にもなって魔法少女になる夢を見るなんて。もし、さやかちゃんが知ったら大笑いしてバカにされるんだろうな…

しかし…あの夢は本当にあった出来事のように思えた。

「行ってきまーす！」

私、鹿目まどかは市立見滝原中学校の二年生です。大好きな家族がいて、親友がいて、時には笑ったり泣いたりする時もある。平凡で普通な中学生です。

「さやかちゃん！仁美ちゃん！遅れてごめん！」
「遅いぞーまどか！」
「まどかさんおはようございます」

学校のクラスメイトで私の友達の『美樹さやか』ちゃんと『志筑仁美』ちゃん。私達三人でこうして学校に行く仲良しです

「あれ、リボン変えたんだ？」
「う、うん。派手じゃないよね？」
「とても素敵ですわよ」
「ほほぅ～イメチェンして仁美みたいにモテようってのか、こいつめぇ～」
「ち、違うよ！さやかちゃん！」
「そんな子は私が嫁にもらってやる！」
「ええ！？」

――――ですが、この日から私の日常は非日常になるとは、この時の私は分かりませんでした……

市立見滝原中学校

「皆さん。今日は先生から大切なお話があります。心から聞くように」

HRで先生のお話…私やさやかちゃん。クラスの皆には何故か分かってしまった…

「いいですか女子の皆さん！卵の焼き加減にケチをつけるような男とは交際しないように！！そして男子はくれぐれもそういう大人にならないように！！！…先生が言いたいのは…それだけです…」

「あちゃー今回の相手もダメだったのか…しかもガチ泣きだよ」

「…だね」

先生の大事なお話。…先生が付き合っていた相手に振られた話です…

「あーあと、今日は転校生紹介しまーす」

「「「「（いやいや、そっちが先だろ！？何言ってんだ、先生！！）」」」」↑クラス一同の心のツッコミ

「――暁美さん。入ってきてー」

「――えっ」

あの夢に出てきた女の子。見間違えるはずがない…けど、何故かあの子を見ていると妙に懐かしく、嬉しい気持ちになってきた…。

「――暁美ほむらです。よろしくお願いします」

――放課後

私はさやかちゃんと仁美ちゃんと一緒に三人でショッピングセンターのファーストフードのお店で、寄り道した時だった。転校生のほむらちゃんの事で私はつい、あの夢の事言ってしまった。その結果が…

「あっはっははははははー！ちょ…ま、まどか！なにそれマジで！？」

予想通りの大笑いです…むしろ、馬鹿笑いです。それをさやかちゃんに言った私もバカです……

「言うんじゃなかった…」

「笑い過ぎですわ、さやかさん」

「やー悪い悪い…まどかの前に突如現れた文武両道才色兼備ミステリアス転校生・暁美ほむら！実は夢の中で一度会っていた…ってか！？しかも向こうも面識あるかのよう素振りだったと！」

「…うん」

「二人はアレだ前世か何かで結ばれた仲だったんだ…これぞ宇宙の神秘！！」

「そんなこと無いからね！何言ってるのさやかちゃんー！？」

まどか達が楽しく会話している時、外ではバイオリンケースを持った一人の少年が何かを待っていた。その時、人目に見つからないようにそれは少年の傍に近づいた

『ワタルワタル！俺だ！』

「どうでした、キバット？この街の様子は…」

『あーダメだ。なるべく人目に見つからない様に周って見たが、フ

ァンガイアの気配が全く無いぜ。』
「そうでしたか…やはりここは僕たちの世界じゃないって事は確かですね」
『ああ。けどよ、この辺に妙な気を感じるぜ』
「ええ、それは僕も感じました。ファンガイアでもない違う気を…」
『なぁーもしかして、これも『大ショッカー』か『スーパーショッカー』の仕業か?急にあのオーロラが現れたせいで、俺達。こんな見知らぬ世界に飛ばされてよ…』
「さぁ、それは僕も分かりませんよ。…ですが、この嫌な気はどうも見過ごす訳には行きませんから、それを探しましょう!」
『そーだな!もしかしたら、なにかの切っ掛けがあるかもしれないしな!』
「そういうことです、行きますよキバット」
『おう!キバって行こうぜ!』

暗く何もない場所……そこで、白い何かが逃げ回っていた。その後から紫の魔法弾に襲われながら、それは必死で逃げていた

(――――た、たすけて)

私はさやかちゃんの付き添いでCDショップで音楽を聴いていた時だった…私の頭に何かが聞こえた

(――――た、たすけて)
(――――た、助けてまどか)
「…えっ?」

私は突然の出来事に戸惑った…その声は私に助けを求めるように言った

（――僕を助けて）

私はさやかちゃんに何も言わないまま、その声の元を探す為に何処かに行ってしまった

『改装中につき関係者以外立入禁止』の看板があったが、私はそれを無視してその扉を開けた…何もない暗い部屋。私に助けを求める声が次第に、近づいていた…

（――助けて）

そんな時だった、私の目の前に白い何かが落ちてきた。それはあの夢に出てきた、猫のようで狐のような生き物…しかし、酷い傷を負っていた。だから、私はそれを抱えた。

「――あなたなの？」

『た、たすけて…』

その時私がこの生き物を抱えた時、私の前に現れたのは…

「ほ、ほむら…ちゃん？」

プロローグ４　「夢の中で逢った、ような…」（後書き）

プロローグ４・まどか☆マギカの第１話から始めました。アニメ基準でやってますが若干漫画版の台詞も入ってるから、そのせいで一番長くなりそうなので分けました（えっー）

プロローグ5　「コウモリとマスケット銃」（前書き）

さやか「あらすじいくよー！」
ワタル・マミ・キバット「「「おー！」」」

マミ「鹿目さんが夢の中で見たのは、崩壊した見滝原！そこで魔女と戦う魔法少女・暁美ほむら！」
ワタル「そして、まどかは契約・契約・契約ってうるさい白い饅頭と出会い！」
キバット『あーそんなこんなで、色々あって世界は救われましたー』
三人「「「以上！」」」

さやか「早いわぁぁぁーーーー！！なにこのあらすじ！？これまどかの夢のあらすじでしょ！前回のあらすじを言いなさい！！」
キバット『だってよ～俺達、前回ではあんまり出番無いしー』
ワタル「そうですよ、さやか。出番が無いって言えば…」
マミ「私なんて…全く出番が無いのよ……それをどうやれと…？」
さやか「……ホント、無理言ってごめんなさい」

杏子「プロローグ5始まるよー！」
ほむら「ほむっ！」

プロローグ5　「コウモリとマスケット銃」

私の前に現れたのは転校生の『暁美ほむら』ちゃんだった…

「ほ、ほむら…ちゃん？」

「――――そいつから離れて」

「だ、だってこの子怪我を…」

『ひ、ひぃ…！』

「――――相変わらず汚い真似をするのね…」

「ほむらちゃんがやったの？ダメだよこんな酷い事！」

「…あなたには関係ないわ。それとそいつに関わると私からの忠告を無視する事になるわよ」

「――――えっ？」

ほむらちゃんからの忠告。そう、私はほむらちゃんに忠告されていた…

まだ、学校の時だった。休み時間でクラスの女の子達がほむらちゃんに質問タイムしていた時、具合が悪くなったほむらちゃんをクラスの保険係である私が、保健室に案内している時だった。

「…ねぇ何で私が保険係って分かったの？」

「……早乙女先生から聞いたの」

「あっ…そうなんだ…えっとさ、保健室は」

「…こっちよね？」

「う、うん（何で暁美さん知っているんだろ？）

「……」

…そう。今日来た転校生の暁美さんが何故か保健室の場所を知っていた。私はそれを聞こうと思ったが暁美さんの冷たい眼差しが怖く

聞けなかった…

「あの…あ、暁美さん？」
「…ほむらでいいわ」
「ほむら…ちゃん？」
「何かしら？」
「いえ…その…えっと…変わった名前だよね？」
「……」
「いや、そうじゃなくって…ええっと…変な意味ではなく…カッコイイなーなんて」
「……ッ」
「え、えっと…あのね。私とほむらちゃんって前にどこかで会った…かな？」
「……」
「あ…なんちゃって…そんな分けないよね？（どうしよう…余計に変な事言っちゃった！）」

そんな時ほむらちゃんは私に言った。

「――鹿目まどか。貴女は人生で尊いと思う？家族や友達を大切に思っている？」
「えっと…その…私は大切…だよ？家族も友達の皆も大好きで、とても大事な人達だよ」
「…本当に？」
「本当だよ！嘘なわけがないよ…」
「…そう。もしそれが本当なら、今とは違う自分になろうだ何て絶対に思わない事よ…」

『――さもなければ全てを失う事になる。忠告よ』

そう…あの時私はほむらちゃんに忠告された。そして、ほむらちゃんは私に近づいてくる…私はほむらちゃんが怖くって逃げることが出来なかった。
私とほむらちゃんの前に白い煙が入ってきた

「まどかぁー！こっち！！」

さやかちゃんが消火器を使って私を助けてくれて、私はさやかちゃんの元に駆け寄った。そのまま使い切った消火器をさやかちゃんは

「おりゃー！」

近くにいるかもしれないほむらちゃんに投げ飛ばし…私達はその場を離れるように、逃げた

「何よアイツ！今度はコスプレで通り魔かよ！…ていうかそれ何？ぬいぐるみじゃないよね、生き物？」
「分からない…分かんないけど、この子助けないと！」

その時、逃げている時私達は変な世界に迷い込んだ…非常口が無くなりさっきとは違う異質な世界…

「なによ、何処よ…ここ？」
「変だよ…ここ、どんどん道が変わっていく？」
「ああもう、どうなってんのさ！」

私は気付いた…この異質な世界には何かがいる
綿のように白く、黒い髭を生やした化け物…それが複数。怖くって何も動けない…さやかちゃんも同じ。だから私達は抱き合うように身を寄せ合っていた

「冗談だよね…？私、悪い夢でも見てるんだよね？ねぇ！まどか！？」

私も怖い夢なら早く目覚めたかった…こんなに怖い夢を見たのは久しぶりだった…だから！

――その時、真上から鎖が落下して円を書くように、私達を守り。そして、赤い光が光って化け物たちが消滅した。私達は驚いた。その背後から知らない人の声が聞こえた。

「危ない所だったわね。でも、もう大丈夫。」

私達と同じ制服で年上の女の人がやってきた

「あら、キュゥべえを助けてくれたのね。ありがとう、その子私の大切なお友達なの」

「私…呼ばれたんです。頭の中に、直接この子の声が」

「――なるほどね…その制服、貴女達も見滝原の生徒みたいね。二年生？」

「あ、貴女は？」

「そうそう…自己紹介しないとね。でも、その前に」

「ちょっと一仕事、片付けちゃって良いかしら？」

その人は突然光に包まれ、私達が気付いたら制服とは違う服を纏っていた。あの化け物達はその人を襲おうとしたが…

「ハァ！」

その人の周りには複数の銃が並び、化け物に向けて一斉発射。

大量の爆撃で周りが炎と煙まみれにそれを見ていた、私達は思わず

「「す、凄い…」」

そして…周りが元通りになった時、その人の背後に変なオーロラが現れてそこから、一体の化け物が襲ってきた。その人も気付いたが、さっきの銃を出すヒマを与えず大きく飛ばされてしまった

「――――くっ…魔女の結界が解けたのに、あれは使い魔じゃない！？」

目の前には灰色の像の怪物…エレファントオルフェノク。オルフェノクは元々５５５（ファイズ）の世界の怪人で、仮面ライダーの世界ではないこの世界に入るはずが無い存在だった。
エレファントオルフェノクはゆっくりと歩き出し、その少女もこの怪物は今までとは違う相手と分かったが、先ほどの攻撃が効いたのか立ち上がれない状態。まどかもさやかもただ、見ているだけだった。

『ワータール！こっちだ！』
「嫌な予感が当たりましたね」
『…って、あの灰色の怪人って『ファイズの世界』のオルフェノクって奴だよな？』
「確かそうです。ですが…」

そんな時、年下の男の子と1匹のコウモリが現れた。まるであの怪物を知っているように

「そこの君！ここは危険だから逃げて！！貴女達も！」

必死で逃げるように言うが、まどか達は目の前の怪物に恐怖で動けない。そして後から現れた少年は

「それは僕たちのセリフです！貴女は早く彼女たちを連れて逃げて下さい！」

「悪いけど…動こうにも今の攻撃ですぐには動けないのよ」

『しゃーない！俺たちであいつらを守ろうぜ、ワタル！』

「そのつもりです。行きますよ、キバット！」

『キバっていくぜー！』

「変身！！」

空中に居たキバットを捕まえ、自分の左手に噛み付かせて魔皇力を活性化させる。

そして発生したベルトにキバットを装着し、現れたのは…

ファンガイアの血を引く戦士、仮面ライダーキバ

「「「えっ？」」」

「――――行きますよ！」

キバ・キバフォームは素手での格闘が得意とした基本フォーム。その為、パンチとキックを連続でエレファントオルフェノクを押していくが、その重さゆえに動きは遅いが硬い装甲であまり効き目が効かず逆に体当たりでキバに浴びせた

「うわぁ！？」

『大丈夫かワタル！？』

「だ、大丈夫です！…ですかあの装甲は厄介ですね」

『あんな硬い奴にはドッガで決めようぜ！』
「ええ！」
『ドッガハンマー！！』

ドッガフエッスルを吹き、キバの胴体と両腕が頑丈な紫の鎧に包まれ、魔鉄槌（ドッガハンマー）を構える。スピードは無くなった代わりにキバの４フォームの中で防御力と腕力ではトップクラスを誇る戦士にフォームチェンジした。

先ほどとは違い、パンチ１つでエレファントオルフェノクにダメージを与え、次にドッガハンマーを横に振るい、大きく弾き飛ばした。

「――――凄い！」
「ねぇ、あれ何なの！？凄い凄い！！」
「……カッコイイ」

『おいおい、ワタルー俺たち凄くってカッコイイだってよ～もうちょっとサービスしようぜ』
「ヒーローショーじゃないんですよ。それに相手もかなりダメージを負いましたから、一気にいきますよ！」
『よーしっ！ドッガバイト！』

キバットのドッガバイトのコールと共に、ドッガハンマーに噛みつくことで発動する必殺技。ドッガハンマーの掌にある「トゥルーアイ」（通称：真実の眼）でエレファントオルフェノクを拘束し、再び握られたハンマーを天に掲げ、落雷エネルギーを得てその状態からハンマーを横に振り、エレファントオルフェノクの目前に拳のオーラが出現。オーラの拳に掴まれたエレファントオルフェノクは、そのまま激しい衝撃とともに吹き飛ばされ、爆発した

あの後立ち上がった少女は、まどかの抱えていた生き物の傷を治し、それぞれお互いの自己紹介をしていた

「私は巴マミ。貴女達と同じ見滝原中の3年生よ。それでこっちが」
『僕の名前はキュゥべえ。あの時はありがとう、まどか！さやか！』
「喋った！？それと、何で私の名前知ってるのよ！？」
「この子は私の大事な友達なの。助けてくれてありがとう」
「い、いえ…私はただ、この子の声を聞いただけで…あっ。私、鹿目まどかです！よろしくお願いします！！」
「私は美樹さやかです！その場の成り行きで助けました！」
「それと…君は？」
「僕はワタル。それとこっちは」
『俺様はキバットバット三世。よろしくなー人間の姉ちゃんたち』
「何で、コウモリが喋っているのよ！？」
『俺様はコウモリじゃなくって、キバット族の名門・キバットバット家の三代目で…』

「キバットのことは気にしないでください。それとマミ、先ほどの姿は何です？」
「私はキュゥべえと契約した、魔法少女よ。それとワタル君もあの姿は何なの？あんなの今まで見た事ない姿だったけど」
「――あれは仮面ライダーキバ。ファンガイアの王の証です」
「「仮面ライダー？」」
『仮面ライダーキバ…聞いた事もない名前だね。それとファンガイアってなんだい？』
「――それは…」

キュゥべえの問いにワタルは少し考えた…つい、ファンガイアの名

前を言ってしまった事。このまま彼女たちに自身の事を言ってもいいのかと…そのワタルの顔を見たマミは、話を逸らすために、キュウべえに聞いた。

「――ねぇ、キュゥべえ。ひょっとして、鹿目さんと美樹さんも…？」

「「？」」

『うん。そうだよ！まどかとさやか君たちにお願いがあるんだ』

「えっ私も？」

「お願い…？」

『あのね僕と契約して――『魔法少女になってほしいんだ』――』

プロローグ5　「コウモリとマスケット銃」（後書き）

ホント、長く書きました…この調子でやっていけるか分かりませんが、頑張ります

プロローグ6　「出会いは街角で」（前書き）

ほむら「……ごめんなさいは？」
さやか「……」
ほむら「…ごめんなさいは？」
さやか「べーっ！」
ほむら「……ほむっ（怒）」

マミ「あの二人何かあったの？」
まどか「え…っと、さやかちゃんが私を助ける時に消火器を使ったんですよ…」
マミ「そういえば、そんな話があったわね」
まどか「それで…その使い切った消火器を投げたら…」
キバット『あー分かった。その消火器が実は、ほむらの顔に当たったってオチか？』
まどか「うん。それでほむらちゃんが謝らせようとしてるんですが…」
マミ「美樹さんが素直に謝らないから、あんな感じなのね」
ワタル「あっ。それなら…コレ使います？一発で相手を謝らせることが出来ますよ」つ　爪剥がし機

まどマミキバ「「「ギャァァァーーー！！！」」」
ワタル「…って冗談ですよ。本気でやったら僕も泣きますよ。…あれ？爪剥がし機は何処に行ったんだ？」

『キャァァァァーーーーーーー！！！ごめんなさぁーーーーーい！！』

三人と一匹「「「「知らない間に本気で使ってるぅぅぅー！？」」」」

」

カズマ「と、とりあえずプロローグ６！始まるよ！…誰が救急車呼んでー！！」

杏子「さやかぁぁぁぁーーーーー！！」（泣）

プロローグ6　「出会いは街角で」

ある街の一角。一人の青年は突っ立ったまま動かない。
右を見ても、左を見ても、見知らぬ土地。
彼、剣立（けんだて）カズマは呟いた
「……ここ何処？」
彼は『ブレイドの世界』で「ＢＯＡＲＤ」の社員として仮面ライダー剣（ブレイド）として不死の生命体・アンデッドと戦う仮面ライダーの一人。
その後色々あって、現在は「ＢＯＡＲＤ」の社長になった彼は、仕事の半分が終わって少し休憩を取る形でソファーに横になっていた時だった。彼の真上に謎のオーロラが現れ、そのまま彼を見知らぬ土地に飛ばされたのだ。
「（えーっと！確か仕事がやっと半分終わって、少し休憩しようとソファーで少し寝ようと思って…それであのオーロラが）」
突然の出来事の為、カズマは気持ちを落ち着かせるようと思ったが、逆に混乱を始めてしまった。
「（――って、何で俺外にいるんだ！？しかもご丁寧にブルースペイダーが置いてあるし！）あぁもう！本当にここ何処だぁぁー！！」
つい人前で叫んでしまったカズマは周りから変な目で見られてしまい、彼は渋々その場を離れた。

「ハァーこれからどうしよう…何とかお金もあるけど、いつまで持つか分からないし…って、この世界でも通じるかな…俺のお金」

そんな時だった、彼の前で赤い髪のポニーテールの一人の少女が男性に捕まっている所をカズマはそこに出くわした

「くっ！放しやがれー！ああくそ！！」
「暴れるな！いい加減に盗んだ物を返せ！」
「誰が返すかよ！バーカ！！」

それを見ていたカズマはつい思わず、その男性に事情を聞いてしまった。この少女を助けようと

「ちょっと、おじさん！一体どうしたって言うんです！？この子が何を…」
「コイツは俺の店でお菓子や食べ物を万引きしたんだよ！…それで兄ちゃん、コイツの知り合いか？」
「知り合いって分けでもないんですが…じゃあ！この子が盗んだ分、俺が払いますからこの子を放してください！」
「……払うんなら、別にいいぞ。合計１５００円だ」
「――――はい」
「おう、丁度だな。そのガキに二度としないように言っとけ」
「はい！（良かった…この世界でも俺の世界のお金が通じた）」
「……」

お店の男性がいなくなってから、カズマにその少女に言った

「今日は俺が助けたけど、今度から万引きはしちゃ駄目だよ？」
「…なんで助けたんだよ。あのまま無視しれば良いだろ」

「何で…って言われても君、困っていたし。それに君、万引きしたら家族の人に迷惑するよ」
「……いねーよ。家族なんてとっくに」
その少女の言葉にカズマは何も言えなくなった。そしてカズマは謝った。
「ごめん。言っちゃいけないこと言って…本当にごめん！」
「……別にとっくの昔だしね。それより兄ちゃんは――」
その少女が何かを言おうとした時、突然何かを感じたかのように走り出した
「っ！悪いけど兄ちゃん、ちょっと用事が出来た！またね！」
「あっ！ちょっと、君！えっと待って！！」
少女の後を追いかけるカズマであったが、人目のつかない路地裏まで走っていた。
そして、彼は気付いた。先ほどまでの場所とは違う場所にいた。まるで極彩色のぐるぐる渦巻く不思議な国に迷いこんだような世界だった
「な、なんだ…ここは？」
「あーあ。兄ちゃん、後悔するよあたしを追いかけた事。…って、まさか早速現れるとはねー」
「えっ？」
カズマと少女の前には線画調の白っぽい人影とその背後には凱旋門の姿をした魔女・『芸術家の魔女』の姿が現れた

「何だあれは……？」
「あれの人影は魔女の使い魔。そんでもって、あの凱旋門みたいなのが魔女のようだね。」
「魔女？使い魔？？君は、一体？」
「ん？あたし？あたしは魔法少女、魔女を狩る者たちさ。それで兄ちゃん。あんたはそこで待ってな。…でないと死ぬよ」

少女…杏子は赤い衣装に変身し、手に持っている槍を構え魔女の使い魔をスピードで翻弄し、次々と倒していった

「す、凄い――――けど！」

カズマは思った、このまま彼女一人戦わせていいのかと…だから彼は一枚のカードとバックルを手に取り出し、彼女の前に走り出した。

「君！」
「ちょ！兄ちゃん！何で、来るんだよー！ここは」
「俺も一緒に戦う！」
「戦うって、あんたバカか！？第一…って、あぶない！」

一体の使い魔がカズマの前に現れ、襲おうとした瞬間。カズマはカードをバックルに入れた

「――――変身！」
『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

と音声と共にカブトムシの絵が入った光のゲートが使い魔を弾き飛ばし、カズマはその中に入った。そこから現れたのは、青いボディに赤い複眼の銀色の鎧を纏った。
『仮面ライダー剣（ブレイド）』だった

「な、何だあれ!?さっきの兄ちゃんか?」
「ああ!それで、あの魔女って奴を倒せば良いんだよね?」
「あ、うん。そうだけど。…それより何だよ、その姿は!あたし聞いてないぞ!」
「えっと…今は後で!行くよ!」
「ああもう!絶対に後で言ってもらうよ、兄ちゃん!」

ブレイドは醒剣ブレイラウザーで使い魔を1体ずつ斬り、その隣で杏子も槍で次々斬り倒していった。そして使い魔を倒し、ついには魔女の前に辿り着いた

「何だこの魔女。凱旋門のような姿って思ったけど、何も攻撃も出来ないってか」
「なら、一気に片付けよう!」
「なら遅れるなよ、兄ちゃん!」
「ああ!君もね!」

ブレイドはスペードの2＋6のカードをブレイラウザーにスラッシュさせ、

ブレイドは電気を帯びたブレイラウザーを『ライトニングスラッシュ』の構えを杏子も槍を構えて、二人で美術家の魔女に斬り倒した。そして、崩れ起きる美術家の魔女から黒い宝石『グリーフシード』を落とし、杏子はそれを手に入れた。

先ほどの空間から路地裏に戻っていった。それと同時に、二人は変身を解いてお互い事情を話していた

「――なるほどね。今の魔女の結界で、その魔女は絶望や呪いから生まれた存在で、禍の種を世界にばら蒔き、人々を襲う。標的となった人間には「魔女の口づけ」という印が現れ、彼らは原因不明の自殺や殺人を引き起こす。か…」

「ふーん。不死の生命体・アンデッドと戦う仮面ライダーの一人。それで、しかも兄ちゃん以外にも仮面ライダーがいるのか…」

「それで君はそんな奴らから守る、魔法少女か。なんだか、俺たち仮面ライダーと同じなんだね」

「う、うん。…そんな感じ。名前言い忘れていたね。――あたし、杏子。佐倉杏子だ、よろしくね。」

「俺は剣立（けんだて）カズマ。あの姿は仮面ライダー剣（ブレイド）よろしくね、杏子ちゃん」

「ああ。よろしく、カズマ兄ちゃん。あっそうだ、これ食うかい？」

「――うまい棒（チーズ味）？」

それぞれの世界での出会いは偶然か必然か…世界は大きく動きだそうとしていた。

それは背中合わせの世界がクロスする時、世界は変わろうしていた。

プロローグ6　「出会いは街角で」（後書き）

これで長いプロローグは終わりです。次は本編ですが…各キャラを上手くいくが分かりませんが、絡めて話を進められるように死ぬ気で頑張ります！

第1話　「事件は風と共に現れる」（前書き）

士「長いプロローグが終わって、ついに本編に突入！」
ユウスケ「ホントホント。長かったよね、本編が始まるのに」
夏海「ええ。でもこれからが本当の戦いの始まりです」
なのは「うん！私も全力全開でいきますー」

一同『いや、あんたは少し自重してね！』

なのは「なんでー！？」
士「お前が全力全壊で暴れたら、この物語が全て終わってしまうんだよ！」
はやて「そうや！本当に自重してなのはちゃん！」
まどか「私からもお願いします、なのはさん！」

なのは「うう…ただ、私の決め台詞を言っただけなのに…」
ＱＢ『君も大変だね、高町なのは。どうだい？僕と契約して魔王になってよ』

一同『あっＱＢが汚い花火になった』

ほむら「墓穴掘った報いよ。…それで、巴マミ。なぜ目をキラキラしているの？」
マミ「高町さんの砲撃…強くってカッコイイ…嫌い（ｒｙ」
杏子「アンタは黙れ！」
スバル「なのはさんに憧れる…もしかして、ライバル登場！？」
ティア・エリオ・キャロ「「「それは無い」」」

ギンガ「…本編始めても良いんでしょうか？」

フェイト「うん。みんな忘れていると思うから、始めていいよ」
さやか「…と言うわけで、本編始まるよ～」
ギンガ「先に言われた…」（涙目）

第1話　「事件は風と共に現れる」

俺の名前は左翔太郎。風都を愛し、おやっさんのようにハードボイルドな探偵になるのが俺の目標さ。そして、俺は相棒のフィリップと一緒に風都を泣かせるドーパントから守る、二人で一人の仮面ライダーW（ダブル）として日々戦い続ける。

そんなある日、俺たちはドーパント事件をまた一件片付け、探偵所に戻ろうとした時、灰色のオーロラが現れて俺とフィリップは見知らぬ街に飛ばされてしまった…

「って……ここは何処だぁぁーーー！？」

「耳元で煩いよ、翔太郎。」

風都とは違う街に現れた俺は思わず叫んでしまった。いかんいかん…俺はハードボイルドな男として…冷静に…

「翔太郎、この世界が分かったよ。ここは魔法が発達した世界『ミッドチルダ』の世界だ」

「――――魔法だぁー！？じゃあ、ここは魔法使いの世界って事か！？」

訂正…暫く冷静になるのは難しい。俺はフィリップが地球（ほし）の本棚（ほんだな）で他に調べた事を理解し、これからの事を考えた

「それで翔太郎。これからどうするんだい？」

「まぁな…ここは『時空管理局』って所で情報を聞くしかないだろ。」

「それしかない様だね。けど、僕たちの話を素直に信じて貰えるだ

ろうか…？」
「…ハァ。そうだよな…それにこの世界に住んでいる連中が、異世界の俺たちの話を信じて貰える訳ないし。…逆に不審者で捕まる可能性があるしな」

～～～

誰にも見られる事もない街の路地裏で、一人の女性が通信で男性と話をしていた

「――2日前にこの路地裏で怪物メモリが売られていた情報がありましたし、私はこの辺をもうちょっと調べます。」
『――ああ、分かった。それで良いのか？何人か連れて行かなくって』
「いえ、連れて行くと逆に相手が逃げられますし、私一人の方が怪しまれずに調べられそうですからね。それに…これが何処からの密輸品か調べるのも、私たちの部隊の役目ですからね」
『――まあね一応、私服での捜査だから怪しまれずに出来るが…もし仮に見つけても確保は慎重に。その販売している相手が怪物メモリ使ったら、即逃げるように』
「大丈夫ですよ！この前、リィン曹長からこの前の密輸物のルート捜査への協力の礼として貰った『ブリッツキャリバー』がありますから、安心してください！」
『――あのな…それでお前に何かあったら、ナカジマ三等陸佐に怒られるのは俺なんだよ…』
「アハハハ…これでも私はそう簡単に病院送りにはなりませんよ！……多分」
『オイ』
「それでは捜査続けますので、通信切りますね。カルタス二等陸尉」
『――ああ、分かったよ。本当に無茶しないように頼むよ、ギン

ガ』

上司であるラッド・カルタスと通信を切り、調査再開するギンガ・ナカジマ。
この先にある出会いがあるとは、この時は何も知らない

〜〜〜

翔太郎とフィリップがミッドチルダに着いたばかりの数分前…そこでも一人の男性が、立ち往生していた

「ったく…まだグロンギやアンノウンの事件があるって時に…ここは何処だ？」

彼…芦河（あしかわ）ショウイチは警視庁未確認対策班所属の警察官で、グロンギやアンノウンと戦う仮面ライダーアギトである。一部のグロンギの事件が終わり、その報告書を提出する為戻ろうとした時にオーロラに巻き込まれ、このような状態であった

「――俺の世界とは違う様だが…一体何かどうなっているんだ？…しかも悪い予感がする」

アギトの力と同時に手に入った超能力。前まではこの力のせいで、アンノウンに襲われる日々であったが、士とユウスケによって不完全であるエクシードギルスからアギトに進化し、その為超能力の力もコントロール出来る様になり、何かの予感を感じる事が出来る様になった。

「まぁ……この先行けば、悪い予感と良い予感が当たるな。行く当てが無いし、行ってみる価値がありそうだな」

ショウイチは自分の予感を信じて、街の路地裏の中に入っていった。
この予感が当たると知らずに…

～～～

捜査の途中でやっとメモリを複数販売している男を見つけたギンガ。
もう1度メモリの特徴を調べた

「…化石のような有機的なフォルムで、中心にはイニシャルが象って描かれている……当たりね」

そして周りに誰もいないと見たギンガは、メモリを販売している男に声を掛けた

「――失礼。」
「ん？何だお姉ちゃん…」
「貴方がこのメモリを売っている方ですよね？」
「…おう。姉ちゃんも買うかい？結構高いぜ…」
「――いえ。貴方にはこれから、管理局にご同行してもらいますよ」
「まさか貴様！？」
「時空管理局・陸士１０８部隊所属ギンガ・ナカジマ捜査官！貴方を重要参考人として、逮捕します！」

突然の管理局員の登場で慌てて逃げる男にギンガは、ブリッツキャリバーを起動させ、逃げる男をローラで追いかけ、そのまま蹴り飛ばした

「がぁ！」

「安心してください。これでも手加減を…」
「ば、バカか……手加減をしたのがてめぇの命取りになるぜ！」

＜アイスエイジ！＞

男は首筋にメモリを挿入し、アイスエイジドーパントに変身した。
その異常な姿にギンガは驚きを隠せなかった

「う、うそ…こんな事が…」
「何驚いているんだよー！」

アイスエイジドーパントは地面を凍結させ、アイススケートの要領で高速移動しながらギンガを殴り、そのまま壁に叩きつけた

「くっ……は、速い…」
「まだまだこれからだぜー！！」

そのままギンガの身体を凍結し、動けなくなってしまった

「――そんな動けない！？」
「次は、二度と動けないようにボロボロにしてやる」

予想以上のドーパントに何も出来ずにこのままやられる……そして諦めるように目を閉じた時、何かが風と共に現れた

「――まったく。色々歩いていたら、異世界にもドーパントがいるとは見ても思わなかったぜ。なぁ相棒？」
「――しかも僕たちが戦ったアイスエイジとは…この世界は実に興味深い。今からもう1度詮索を…」
「――するなぁ！いいから変身するぞ！」

「――後で詮索してる時に邪魔しないでよ。」
「――分かったよ。いくぜ…フィリップ」
「――ああ、いくよ。翔太郎」

知らない二人組の青年が私の前に立ち、あのドーパントと戦おうとしていた。それを見た私は思わず逃げるように問いかけるが、二人は…形は少し違うがあのメモリを構えメモリのスイッチを押した

＜サイクロン！＞
＜ジョーカー！＞

「「変身！！」」

＜サイクロン！ジョーカー！＞

右側の青年が倒れ、左側の青年は緑と黒の謎の半分このドーパントに変身した

「なぁ…貴様らもドーパントか！？」
「――いいや、俺達は」
「――僕達は」
「「仮面ライダーW（ダブル）。二人で一人の仮面ライダーだ！さぁ、お前の罪を数えろ！！」」
「か、仮面ライダー……」

そのままダブルはサイクロンの素早さでドーパントの懐に入り、ジョーカーの特徴である格闘戦で連続パンチを入れ、最後にはキックで蹴り飛ばした。

「がぁ！き、聞いてねえぞ…こんな奴がいるって話…」

「悪いな。俺たちダブルがこの世界に来た事を後悔するんだな。」

＜ヒート！＞

＜ヒート！ジョーカー！＞

「今度は緑から赤に！？」

「てめぇ…どれだけ持っている…」

「…今さら数えられるかよ。おりゃー！！」

熱きの記憶・ヒートの熱によるパンチがアイスエイジを殴り飛ばし、このまま決めようとした時、アイスエイジは慌てて、動けないギンガを盾にした

「貴様、こいつがどうなってもいいのか！少しでも動けば、こいつを全身氷付けにして、身体を砕くぞ！」

「てめぇ！彼女から離れろ！」

「言ったはずだ。一歩でも動くなって…それと離れて欲しければ、貴様のメモリをこっちに渡して貰おう…」

「…ッ！」

「（落ち着きたまえ、翔太郎。ここはルナに変えてルナジョーカーで、彼女から突き放そう）」

「（――ああ、分かった！だから…」

「あー止めておけ、こういう奴は解放しないのが相場だ」

「誰だー！？何処に…」

「お前の後ろだ」

一人の中年男性がアイスエイジドーパントの背中を思い切り蹴り飛ばして、ギンガから突き放した。

「あ、貴方は…？」
「通りすがりの警察官兼、仮面ライダーだ」
「「仮面ライダーだって！？」」
「ん…そういえばお前ら、確かスーパーショッカーの戦いでディケイドと一緒にいたライダーか」
「…？」
「そっか。こっちの姿じゃ、分からないな。……変身！」

オルタリングが現れ、そのまま光と共に現れたのは金の龍。仮面ライダーアギト。

「これなら分かるか？」
「あっー！あの時のディケイド以外にも出てきた仮面ライダー！」
「なるほど…あの時の仮面ライダーの一人か。それで、どうして貴方がここに？」
「それが話せば、長い様で…短いような……やっぱり長い話で、短い話で…」
「「どっちだよ（ですか？）！？」」

ダブルとギンガは思わずツッコミを入れ、半分こライダーと氷付けの捜査官と金色の龍の漫才に、ほぼ忘れ去られそうなドーパントはそのまま逃げずに3人にツッコミを入れた

「お前ら俺を無視するんじゃねー！！」

アイスエイジの冷気攻撃が二人のライダーを襲うが、それを避け、ダブルは『T』の青いメモリに変えた。

＜トリガー！＞

＜ヒート！トリガー！＞

銃撃手の記憶・トリガーにハーフチェンジしたダブル・ヒートトリガーはそのままトリガーマグナムでアイスエイジに高熱の弾丸を撃ち込み、相手は更に吹き飛ばされた

「がぁ！？く、くそ…ここは一旦引いて…」

「そうはさせるかよ！」

「翔太郎、ここはマキシマムドライブだ！」

「そのつもりだ！」

ダブルはトリガーマグナムのマキシマムスロットにトリガーメモリーを挿入し、銃身を変形させた。

マキシマムモードにすることでメモリのエネルギーを2倍に増幅した必殺技を発動した

＜トリガー！マキシマムドライブ！！＞

「「トリガーエクスプロージョン！！」」

高温の炎を火炎放射器のように噴出し、アイスエイジは耐えることも出来ずに爆発した。

使用者の男はその場で倒れ、メモリは男から輩出され壊れた。そして変身を解いたショウイチはその男に手錠をかけた

「まさか、滅多に使わない手錠が役に立つとはな…まぁ、グロンギやアンノウンには使えないからな…」

ショウイチは独り言を言いながら、ダブルはヒートジョーカーに戻り氷付けで動けないギンガの氷を溶かしていた。

そして４人はお互い話しあった結果、陸士１０８部隊に同行することになった

～～～

？？？

「――やあ、Ｄｒ．　スカリエッティ。そちらはどうだい？」

「――ああ、君か。私の方は予定通りさ」

「――それは何よりで…それでＤｒ．から借りたガジェットのお陰で、こっちのターゲットを確保。そのお陰でこっちも予定より早くなりそうだよ。あの博士が予想以上でね」

「――私としてはアレを、まだ正式に人前には出したくは無いんだけどね。…それで、君のターゲットは何者なんだい？」

「――ある組織の怪人作りの名人…死神博士。…まぁ、今は怪人よりこちらのアレを復元と再生に専念させてもらっている。」

「――（怪人？あのメモリの事か）しかし、まさか消滅したと思っていたアレが残骸として発見されるとは、私も思わなかったよ。」

「――俺もアレを手に入るとは思わなかったさ。…だが、これが完全復活したらこれで管理局ところが、ミッドチルダ全てが消滅さ。」

「――なら私の方も早く『聖王の器』と『レリック』を探して、『聖王のゆりかご』を起動させないとね…」

「――ならどっちが早く目的達成するか競争だね」

「――フッ、それも面白そうだな。…それと１つ聞きたいが、ガジェットを倒した連中は何者なんだい？見た事無いが」

「――あれは仮面ライダーといってね。マゼンタ色は『世界の破壊者・ディケイド』それと赤いのは『究極の闇・クウガ』どちらも危険な存在であり、俺にとっては利用価値がある連中さ」

「――なるほど。いい情報を感謝する（破壊者に究極の闇…か。

奴にとっては利用価値があっても、私には厄介…というわけか）」

～～～

陸士１０８部隊で部隊長であるゲンヤにギンガと翔太郎とフィリップ、ショウイチはこれまでのことを話していた

「なるほどなぁ…似てるようで似てない、それぞれの世界。それでお前さんたちは、そこで怪人と戦う仮面ライダーってわけか」

「ええ。それにミッドチルダに最近出回っているあのメモリ…『ガイアメモリ』は俺たちの世界の物なんだ」

「それで聞きたいのですが…えっと左さん？」

「翔太郎でいいぜ、ギンガ」

「あ、はい。その翔太郎さん。そのドーパントって一体何です？メモリ１本でアレほどの超常的な能力。私たちの世界では常識では考えられない物です！」

「それは俺も聞きたい。すまんがそれを教えてくれないだろうか？」

「ああ、分かった。ドーパントは…」

ドーパント

ドーパントのモチーフや能力は非常に幅広く「生物」の他にも「人工物」や「無機物」のような無生物、「感情」「現象」「概念」といった抽象的なもの、さらには特定の「文明」や「人物」」までの様々な記憶を取り込んだガイアメモリを使って変身する怪人のこと。

装着者が自身の肉体にガイアメモリ内のあらゆる「地球の記憶」を挿入し、身体能力の向上などと共に固有の特殊能力を持つ場合が多く、「単純な戦闘能力は低くとも、優れた特殊能力を持っている」ドーパントや戦闘力が高いドーパントは、メモリの持つパワーに振り回されることで精神を侵食されてしまい、最終的に理性を失い暴

走してしまうことが多い。一方、特殊能力に特化したドーパントはパワーの低さ故にメモリに精神を侵されることは余りないが、その超常的な力の誘惑に負けて心が歪み、どんどん深みにはまり犯罪を重ねてしまう。
場合によっては暴走などの起因により、凶暴な巨大形態に変異することもある。

「…って、感じだ。」
「メモリ1本で人から怪人になるか…俺の世界よりある意味タチが悪いな」
「そんな…じゃあ！使用者は使い続ければ、一体どうなるんです！？」
「力を手に入れる代わりに使用者の肉体への悪影響や依存性や使用者の人格の凶暴化に陥ってしまう。だから、下手な麻薬よりも危険な代物なんだ。」
「そ、そんな……なら、この事を本部に早く対策するように連絡を！このままだと、ミッドチルダが」
「落ち着けギンガ。お前も知っているようにこの件は、陸上本部の方は全くって言うほど、対策はゼロ。しかも本局には内密だ。俺達がこの話を報告しても…」
「『分かりました対策します』って言うほど利口じゃないだろう。その陸上のトップが実際に目の前でドーパントを見ない限りは無理だな」

ゲンヤの話にショウイチも納得。それでも、目の前で起きたドーパントの危険性を上司であり親のゲンヤに必死で言い続けるギンガ。
だが、ゲンヤはある一言を言った

「…それで一応聞くがギンガ。俺たちの１０８部隊の本業は？」
「えっ？密輸捜査ですが……」

「――なら、俺達はこのミッドチルダにガイアメモリを密輸させている連中、及びそれを製作している組織を捜査して確保する。…それでも文句はあるか、ナカジマ陸曹？」
「お父さん…いえ、その線で行きます！ナカジマ三等陸佐」
「ああ、それで頼む。…それで、あんた達にも折ってお願いがある」
頭を下げようするゲンヤに翔太郎とフィリップにショウイチは

「…悪いがゲンヤさん。この事件、俺達仮面ライダーWも協力させてくれ…例え、異世界でもこの街を泣かせる訳にはいかねぇ…」
「そもそも、ガイアメモリは僕達の世界の物だ。僕たちが見過ごす訳には行かないから、協力させてもらうよ」
「何か役に立つか分からないが、俺も警察官の一人として、俺もあんた達に協力させてくれ。俺もこいつらと同じ、仮面ライダーとして見過ごす訳にはいかないからな」

「……スマン。君達の協力に感謝する」
「ありがとうございます！翔太郎さん、フィリップさんに芦河さん！」
「…ショウイチでいい。」

第1話　「事件は風と共に現れる」（後書き）

やっと本編第1話です。オリジナル話なので本当に色々、頭を絞りました。

何故この組み合わせかというと
翔太郎とフィリップ＝探偵
ショウイチ＝警察官
ギンガ＝密輸の捜査官

探偵と警察のコンビでやってみました。
フィリップが本棚で調べ、翔太郎とショウイチとギンガが駆け込み回って密輸者をボコボコにしていく話が出るかもしれません。

因みに翔太郎がいない間、誰がフィリップの面倒みるかというと…
ラッド・カルタスが面倒を見ます

第2話　「現われた影と別れ」（前書き）

はやて「ヒマや…退屈や…」
シグナム「あの主はやて、何か本でも持ってきましょうか？」
はやて「そーやな…ヒマな時は…」

シグナム「主？」
マミ「えっ？」
なのは「は、はやてちゃん？」
ティアナ「嫌な予感……」

はやて「こんなヒマな日は乳揉みやぁぁぁーーーーー！！」

なのシグ「やっぱりぃぃぃぃーーーーー！！？」
ティアマミ「えええええぇぇぇぇーーーー！！？」

さやか「ずるいです！マミさんのおっぱいは、私が揉む予定なんですよー！」
スバル「部隊長でもティアのおっぱいは渡しませんよ！！」
４人「なんか増えたーーーーーー！！？」

ショウイチ「お前ら真面目にやれぇぇぇぇぇぇーーーーーー！！」

ユウスケ「ショウイチさんー！落ち着いてーーー！！」
士「面倒だから本編２話始まるぞ！」

第2話　「現われた影と別れ」

機動六課の訓練場

「今日の午前の訓練はここまで。これからお昼休みにしよう」
「「「「ありがとうございました！」」」」
「午後はデスクワークだからな」
「「「「はい！」」」」

士たちが機動六課に民間協力してから3日。なのはとヴィータの訓練を終えたフォワード組とボロボロになったユウスケ。それを横から笑っている士と満足顔のシグナムと申し訳ない様な顔のフェイト

「ユウスケ、今日もあいつにボロボロにされたな」
「軽い手合わせって言ったのに…今日もシグナムさんが途中で本気でやるから…」
「小野寺、私はあれでも軽く手合わせをしたつもりだ。何言い訳をしているんだ？」
「いや、だってシグナムさん本気だったよね！？」
「本気じゃない。」
「士も見てたよね！？本気で俺を斬ろうとするシグナムさんの姿！」
「見てない。」
「うそだぁぁぁぁーー！！」
「「煩いぞユウスケ（小野寺）！！」」
『ごめんね、ユウスケ。シグナムも負けず嫌いだから…』

その泣き叫ぶユウスケを士が軽くイジメ、途中から本気でやっていたシグナム。
その後ろで謝るフェイトにそれを見ていた『あの人達は何をしてい

るんだろう…？』と思うフォワード組だった。

～～～

部隊長室。

聖王教会のカリムから連絡をもらった、はやては何かのあったと思いすぐに受け取った

『――こんにちは、はやて。急に連絡してごめんなさい』

「カリム、急にどうしたん？」

『――ちょっと予想外な出来事があったの』

「…一体何があったん？」

『――それが…予言が突然変わったのよ』

「一体どういうことや！？急に予言が変わったって！！」

『――事の発端は三日前…はやてから、例の『仮面ライダー』と『怪物メモリ』の話をもらった時よ。それからよ…急に予言が変わったの』

「……それで何て書かれたん？」

『――『世界の破壊者現われる時…次元世界の壁が破壊され…全ての世界が崩れ去る』…今の所はこれしか解らないわ。』

「世界の破壊者…妙に何かが引っ掛かるな」

『――ええ。私の方でも無限書庫に世界の破壊者について、色々調べてもらっているわ』

「そっか…うん、もし私たちの方でも何かあったら連絡するよ」

『――お願いね、はやて…今回の事件、一筋縄では終わらなさそうな予感だわ』

「安心してや、カリム！私やなのはちゃんにフェイトちゃん…ううん、私達の機動六課が絶対に阻止するから安心してや！」

『――うん。はやても無茶し過ぎないようにね』

「うん、分かった」

～～～

機動六課の食堂にフォワード組とリィンが士とユウスケと夏海と食事をしていた時
そのスバルが士やユウスケ以外の仮面ライダーについて教えて欲しいと頼まれ、それを教えるのが面倒だと士は言おうと思ったが、スバル以外にもエリオとキャロとリィンが目をキラキラさせていた為、渋々カードを出して教えた。

「へぇー仮面ライダーって色々いるんだー」
「僕はこの『カブト』と『ブレイド』がいいですね」
「私は『龍騎』と『アギト』が良いです！」
「ねぇーティアは？」
「あのね…私はアンタと違うのよ。リィン曹長も何か言って…」

「リィンは『キバ』と『ファイズ』が良いですー！」

頼りにしていた筈のリィンフォースが逆にスバルたちと一緒に楽しんでいた為、落ち込むティアナ。
その時レッドアラームが鳴り響き、一瞬で周りに緊張感が張り詰める中、なのはやフェイトが駆けつけ、フォワード４人に指示を出していた。

「士さんとユウスケさん！すみません、私たちと一緒に来てもらっていいでしょうか」
「どうやら、レリックのお出ましか」
「良いよ、なのはちゃん！」

「それじゃ、夏みかんお前はここで待っていろ。」
「士くんもユウスケも気をつけて下さいね」
「ああ。行くぞお前ら」
「ちょっと士さん！勝手に行かれると困りますー！」
「それより士―！お前場所も知らないで勝手に行くなぁー！！」
「……本当に大丈夫でしょうか…」

～～～

レリック反応した場所に辿り着いた場所は…崩れ落ちた研究所だった。
ディケイドはなのは達スターズ隊、クウガはフェイトのライトニング隊でそれぞれ分かれて調べることになった

「こちらスターズ1。ロングアーチ聞こえる？…」
「どうしたなのは？シャーリー達から何か連絡あったか？」
「ううん…連絡がつかない…」

ロングアーチ…部隊長の八神はやてが後方支援と指揮する事を『ロングアーチ』と呼ばれ、シャリオ（シャーリー）・アルト・ルキノの3人が通信士を勤める。
その3人から誰も連絡がつかないことに、変に思うなのは。そして、士はなのはに聞いた

「なら、別の所を探しているフェイト達に連絡したら、どうだ？」
「うん、ちょっと待ってて……えっ！？どういうこと…？」
「どうした？」

「ダメ。フェイトちゃんからも全く連絡がつかない！」
「あ、あの…なのはさん」
「何、ティアナ？」
「さっきから気になっていたんですが…変だと思いません？」
「どういうこと？」
「レリックが反応したのなら、ガジェットが現れてもおかしくないと思います。でも…」

ティアナの疑問にディケイドとヴィータは気付いた

「――確かにな…あまりにも静かだな」
「――お前ら、ちゃんと構えろ！何か来る！！」

「――流石、エース部隊ね。すぐに気付いちゃうなんて、お姉ちゃんビックリしちゃうわ」

スターズとディケイドの前に現れたのは、なのはと同い年くらいの銀髪の女性が現れた

～～～

丁度同じ頃…ライトニング隊もこの事に気付き、周りを見回した時。さっきまで居なかった場所から黒髪の少女が――そう、あの栄次郎を連れ去った少女の姿が現れた

「――やっと来たんだーお姉ちゃん達と仮面ライダークウガ」
「「「！？」」」
「お、女の子…？」
「気を抜くな、小野寺…あの者は只者じゃないのは確かだ」
「――エリオとキャロも気をつけて…」

見た目はただの少女から、異常じゃない殺気に息を呑むライトニング隊とクウガ。
そして、少女は言った
「――ねぇ、お姉ちゃんたちこれからダンスを始めよう。真っ赤に血が染まる楽しいダンスを」
～～～
一方、スターズとディケイドも銀髪の女性に構えるが、女性は陽気に自己紹介をしていた
「初めまして私、『マトイ・メイ』ね。宜しくね、お嬢ちゃんたちにディケイド…いえ。世界の破壊者様って言えば良いかしら?」
「世界の破壊者…?」
「てめぇ…誰のこと言ってやがる!」
世界の破壊者に反応するなのはとヴィータ。しかし、ディケイドは反応して答えた
「――お前、なぜ俺のことを知っている?」
『えっ!?』
「あらん～お嬢ちゃんたち全員知らないのぉ～?彼は幾多の世界を旅をして、そして破壊する者…『世界の破壊者・ディケイド』よ」
「士さん…今の冗談ですよね…?」
今の話にスバルは聞いた…他の3人も同じことを言おうとしていたらしく、その目は真剣な目だった

「――ああ、俺は世界の破壊者だ。あいつの言ったこと合っている。…もう一度聞くが、何故俺のことを知っている？」
「それは、ひ・み・つ♪」
「…なら、聞き出すまでのようだな！」

ディケイドはライドブッカーのソードモードで斬りかかるが、マトイはそれを避けながらディケイドの身体に蹴りを入れた

「くっ！？」
「あらあら～今の準備運動のつもりだったのよ～」

ディケイドとマトイの戦いを見ていた、なのははスターズに叫んだ

「みんな！私たち、スターズ隊は士さんを……いえ、ディケイドを援護するよ！」
「その方が良いな！お前らも気抜くな！」
「「はいっ！」」

～～～～

ライトニング隊も苦戦をしていた。相手が女の子とはいえ、尋常じゃない力でクウガを押して行き、フェイト・シグナムもクウガを援護するように、バルディッシュを『ハーケンフォーム』にレヴァンティンは刀身に魔力を込めて炎を纏わせたシュベルトフォルムで斬りかかるが…

「お姉ちゃんたち邪魔だよ！私はクウガと遊んでいるんだから！！」

少女の足元の影から黒い骸骨が現れ、その手に持っていたロングソードで、二人の攻撃を止めた

「えっ！？」

「なんだと！？」

『ガガガガガガガガーーーーーーー！！！』

「それと君たちはこれで遊んであげるよー！」

その少女から更に黒いガジェット？型が現れて、ベルト状のアームを伸ばしエリオとキャロを襲った

「ガジェット！？」

「何であの子から一体どうやって！？」

骸骨と戦いながら、少女の能力を見極めていたシグナムは少女の言った

「――――お前の能力は自身の影を人や物を具現化させて操る…違うか？」

「へぇー私の影と戦いながら、能力を見極めるなんて凄いんだね。――――でも」

そして、また影から違うものが現れた。その現れた影の姿を見たクウガは驚いた

「グロンギにイマジン！？」

クウガの世界の怪人の一体のズ・ゴオマ・グと電王の世界のバットイマジン。
それぞれ同じように全身黒く魂が無い操り人形のようにクウガを襲い始め、その目の前の出来事に一瞬、油断をしていた為、相手の攻撃に大きく吹き飛ばされるクウガ

「うわぁ!?」
「ユウスケ!」
「小野寺!!」
「――――他人の心配より、自分の心配もしたらお姉ちゃん?」

フェイトとシグナムは先ほどまで戦っていた骸骨の姿が消えていたことに気付き始めた瞬間、徐々に身体が沈み始めていた

「こ、これは!?」
「くっ!影に飲み込まれているだと!?」
「うん。さっきお姉ちゃんが言ったことは当たっているよ。私自身の影を使って人や物を具現化させて操る。でも、それに捕まったら最後……これから消えてもらうから…」

少女は笑うように言い出し、フェイトとシグナムは必死に抵抗するが、その力に引っ張られる様に更に沈む。それを見たエリオとキャロはガジェットの攻撃から振り切り、二人の手を捕まえて、必死で引っ張った。

「エリオにキャロ!?」
「馬鹿者!私達の事はいいからお前達は早く逃げろ!!命令だ!」
「イヤです!私たち命令違反かもしれません!でも!」
「僕達はフェイトさん達を置いて逃げたくないんです!!」

『きゅる〜！』

エリオ、キャロとフリードは二人を引っ張る姿にシグナムは聞こえないように言った

「――この大馬鹿者…」

「――二人とも…」

「――いい話の所悪いけど、みんな…この世界から消えてもらうよ。」

少女は一気に影を広め、エリオとキャロとフリードもその影に飲み込まれた。

グロンギとイマジンと戦うクウガも同じだ。

「うわぁ！こ、これは…もしかして、キバーラが言っていた栄次郎さんを連れ去った影ってこれのことか！」

「うん。あのお爺ちゃんは私達にとって大事な人だからね。これからも使わせて貰うよ。だから…」

『ばいばい…』

少女を残して――ライトニング隊とクウガは少女の影によってこの世界から消えた。

〜〜〜〜

一方、ティアナは牽制するようにクロスファイアシュートを撃ち、その隙にスバルはリボルバーシュートで攻めるがそれを避けられてしまう。
しかし、更にディケイドはキバにカメンライドで攻め、なのははアクセルシューターで援護し続けた。それでもマトイは避け続けるが…

「あらん～もうお仕舞い？」

「まだぁぁぁぁーーー！！」

その上からヴィータは一瞬の隙でラケーテンハンマーを一気に撃ち抜き、マトイはシールドで防御したがその攻撃の破壊力の為、壁に激突した

「…ッ！今のはこれの為だったのね…服がボロボロだわ」
「…まぁな。俺たちのコンビネーション舐めるなよ！」
「（私達は分かっていたけど…士さんは分かってなかったよね）」
「（むしろ、あいつの場合ただの偶然だろ。）」
「（アレ、偶然だったよね…ティア）」
「（偶然でしょ…多分）」

そんな本音を隠しながら5人は一気に決めようとしたが、マトイにある通信が入り会話していた

「…もう～『シャドウ』ちゃん仕事速すぎよ～まぁ、ご苦労様」
「「「？」」」
「悪いけど…今日はここまで。お姉ちゃんのお仕事はお終い…じゃあね～」

マトイは手を振りながらその場から消えた。

その後スターズ隊は回り散策をしたが、レリックらしき物は無かった。――しかし…

フェイト達ライトニング隊とクウガの姿が消えていた事に…

その研究所跡地から出たなのは達は、はやてにこの事を話していた

『――なんやって!?フェイトちゃん達が消えたってどういうことや!』

「……分からない。」

『…けど、その襲った相手も気になるな――それと…』

「分かっている。士さんには帰ったら詳しく話すって言ってくれた。」

『――後私からも話したい事がある。フェイトちゃん達の事もあるしな』

「うん」

～～～～

見滝原

魔女の使い魔を倒したマミとワタル。それと魔女退治にしばらく付き合う、まどかとさやかの姿があった

「いやぁ～流石マミさん！カッコイイなぁ～」

「ワタルくんもお疲れ様！」

「見せ物じゃないのよ、美樹さん」

「そうですよさやか。貴女は危機感を持ってください」

「ぶっー！私たちより年下の癖に、いつも呼び捨てで！ちゃんと、『さやかさん』とか『さやかお嬢様』って言えー！」
『ねーちゃん、お嬢様はねーよ。本気でマジで！』
「かぁー！本当にアンタ達は口の聞き方がなってない！ここは私が…」

「それで、マミ。ここ最近使い魔しか倒していないから、ソウルジェムは大丈夫なんですか？」
「大丈夫！このくらい平気よ」
『魔力が消耗する度にソウルジェムが濁って、その濁りを吸収するアイテムが魔女が落とす『グリーフシード』。それを使って濁ったソウルジェムに吸収されて、魔力が元通り…本当に面倒だなーこの仕組み』
「本当ですね。それに使ったグリーフシードはそこの白饅頭のゴミ箱が回収ですからね」
『酷いこと言うね君は。僕から見えば、君がどうしてキバに変身出来るか、教えて欲しいものだね。』

キュゥべえの問いに聞き流そうとするワタル。そして、まどかはある質問をワタルに聞いた

「ところで、ワタルくん。キバットを使えば私やさやかちゃんもキバに変身できるの？」
『あーやめた方がいいぜ』
「えっ、なんで？」
『俺が噛むことで体内に『魔皇力』って力が入り込むんだ』
「「ま、魔皇力？」」
『で、それに適合出来ればキバに変身出来るけどよ…』
「適合出来なかったら？」
『瞬時に装着者は死を招く。それでも使ってみたいなら、いいぜ』

「「や、やっぱり遠慮します！！」」

『死』という言葉に必死で遠慮するように手を振るまどかとさやか。
その話を聞いてマミもワタルとキバットに聞いた

「…それで、私からも1つ聞いても良いかしら？」
『なんだよ、巨乳のねーちゃん。その胸に抱きしめてくれる気に…』
「……」
『わっー！！今の冗談だって！！だから、銃を構えるなー！』
「最低ですキバット」
『そーいうなって、ワタル～あの二人より出ているあの果実を見てたら、そう思うのが
男児たるもので…』
「このスケベコウモリ！アンタ、マミさんの事そういう目で見てたのね！！」
「最低だよ…キバット」
『人を変な目で見るなよ～！なら、お前の胸で抱きしめてくれるのか？』
「――成敗！」
『ぎゃぁー！！』

スケベコウモリ（キバット）のセクハラ発言に怒るさやかと呆れるまどか。
そんな3人を置いて、ワタルとマミは歩きながら話をしていた

「それで、マミ。僕に何の話です？」
「前から思っていたけど…君がキバに変身出来るのって、『ファンガイア』って事に関係あるの？」
「……はい」
「…そう。私や鹿目さんに美樹さんは、そのファンガイアは知らな

い。でもね、貴方がどんな経緯でキバに変身したのか…今は聞かない事にするわ」
「――――マミ…」

マミの優しさになんて顔をしればいいのか分からないワタル。

「この女の敵いいいいーーーーーー！！」
『ぎゃぁぁぁぁ～～～～～！！も、もう勘弁してくれー！！』
「もうやめてあげてよー！！」

マミの魔力で強化されているバットで思い切り叩くさやかに、そのバットで叩かれ続けられるキバット。その殴られ続けられている為、顔が歪み始めるキバットを見て泣き叫ぶまどか。

「…帰りましょうか、ワタルくん」
「…そうですね」

……その三人に呆れて置いて帰るワタルとマミであった。――――がしかし…

先ほどの戦いで、シャドウと呼ばれる少女の影に飲み込まれて消えた、フェイト達ライトニング隊の４人とユウスケが近くに倒れていたことを誰も知らなかった。

第2話　「現われた影と別れ」（後書き）

次回でフェイトたちとユウスケがまどか達と出会います。

と…その前にマミさんのおっぱいを狙うキバットですが、目の前であんな大きいおっぱいがあったら、誰だって抱きしめられたいですよ！

しかもワタルはマミと同居してます。同じお風呂使ってます。同じ部屋で寝てます

でも、ワタルは全く無反応です（笑）

また時間が掛かりますがよろしくお願いします

第3話　「もう何も怖くない」（前書き）

新番組「魔法少女・マミ☆マギカ」

それは新たなる魔法少女物語！
ベテラン魔法少女、マミの日常を描いた
笑い無しの涙ありののハートフルファンタジー！

マミ「悪い魔女共！かかってきなさい！」

エリオ「何ですかコレ？」
士「なるほど大体わかった。」
キャロ「どういうことです？」

まどさや「「短い間本当にありがとうございましーた」」
QB『君の出番はもう終わりだよマミ。今までありがとう」
マミ「Ｎｏぉぉぉぉぉぉぉーーーーーーー！！」

士「今日でマミの出番は終わりだ」
一同『嘘だぁぁぁぁーーー！？』

第3話　「もう何も怖くない」

病院
マミとワタル、まどかと魔女退治に行く前の話…
美樹さやかはある病院の一室の前で立っていた。さやかは入る前に息を整えてその一室に入った。少年はさやかが来たことに気付き、さやかに声をかけていた

「やぁー」

さやかはその少年の顔を見てつい微笑んでしまった

「――――はい、これ」

さやかは鞄の中からヴァイオリニストのＣＤを取り出して少年に渡した。
そのＣＤを見て、少年『上条恭介』は将来有望とその資質を認められるヴァイオリニストだったが、事故で指が動かなくなって演奏できなくなり、病院でリハビリを受けている。さやかが探して持って来たＣＤに嬉しそうにさやかにお礼を言った

「いつも本当にありがとう。さやかはレアなＣＤを見つける天才だね」
「あはは、そんな…運が良いだけだよ。…きっと」

恭介はこのヴァイオリニストの事を嬉しそうにさやかに教えて、ＣＤプレイヤーにＣＤをセットして、片方のイヤホンをさやかに渡した。

「この人の演奏は本当に凄いんだ。さやかも聞いてみる？」
「ふぇ…い、良いのかな…？」
「うん。本当はスピーカーで聞かせたいんだけど、病院だしね。」

その一言にさやかは頬を染めながらイヤホンを貰って聞こうとした時、恭介がさやかに近寄ってきた。さやかは更に頬を染めていた。さやかは彼…上条恭介とは昔からの幼馴染であり、さやかは恭介に恋愛感情を寄せていた。だから彼が近寄った時にさやかは、この隠し消えない気持ちが顔に出ていた。

――――子供の頃に初めて恭介の演奏を聞いて以来、さやかは恭介に一途な恋心が芽生えていた。
その為、入院生活をしている恭介をさやかは何度も病院に通っていた

「……ッ」
「……」

窓の方を見て、さやかに気付かれないように泣いていた。その彼を見てさやかは何も出来ない自分を悔やんでいた…

～～～
それから魔女退治が終わり、セクハラコウモリ（キバット）の制裁を終えて帰って行った後、少し離れていた場所に、あの戦いで死んだと思っていたユウスケ達の姿があった。

（みんな…ごめん。何も出来ずに皆を救えなくって…）

そんな時ユウスケの耳元で何かが聞こえる声が聞こえた

「――さん！――スケさん！！」
「ダメ――――です――――起きてくれません…」
「――――なら私が起こしてやるか――――」
「――――！！それダメですーーー！！」

そのうるさい声に思わず目を開けようとした時だった。レヴァティンを構えて斬ろうとするシグナムと、それを必死で止めようとしているフェイトの姿だった。それを見たユウスケは思わず叫んだ

「うわぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！」
「遅いぞ、小野寺。やっと起きたか。それと煩いぞ」
「ちょっとぉぉぉー！？シグナムさん！俺を殺そうとしましたよね！？」
「いや、起こそうとしただけだ。だから、煩い」
「うそつけぇぇぇぇぇーーーーー！！」
「まぁいい。意識はハッキリあるようだな」
「よくなぁぁーい！！…ってあれ？俺、確かあの女の子と戦っていて…それで、影に飲み込まれた筈だよな…」

あの戦いを振り返って思い出す、ユウスケにエリオとキャロもそれについて揃えた

「そうなんです。僕たちもあの子の影に飲み込まれて、やれたと思っていたんです。」
「それで気付いたらここに居たんです」
「…それで、ここ何処？」
「分からん。六課に通信や念話しても通じない。…考えられることは」
「――――ミッドじゃない異世界」

ミッドじゃない異世界に全員黙り込んだ。しかし、ユウスケはフェイト達に言った。

「――なら、ここがどんな世界か調べようよ。もしかしたら、何か分かるかもしれないし。」

この言葉に全員納得し、その場を離れた。

――が、ユウスケ達いなくなった後、一人の青年が現れた

「やれやれ…彼女が飛ばした世界がここに来るとはね。小野寺くんとミッドの魔道師くん達はどうやって、この世界の魔法少女と一緒に乗り切れるかな…」

青年、海東大樹。世界を駆け巡る怪盗であり、仮面ライダーディエンド。彼は各世界に来ては、お宝のためなら士やユウスケと敵対していたが、最終的は士やユウスケと共に、大ショッカー・スーパーショッカーと戦った仲間であるが…

『――聞こえるかい、大樹?』

「…ああ、聞こえているさ。それで僕に何の用だい?」

『――すまないが、この世界である物を見つけてもらいたい』

「――それで、何がターゲットなんだい?」

『――魔女の卵・グリーフシード。それとこの世界の魔法少女のデータも欲しい。』

「卵のほうは良いけど、僕にデータ採集は難しい話さ」

『――そういうと思って、『ジョーカー』を送っておいた。彼となら問題ないだろう』

「――彼か」

『――ああ。ではいい結果を頼む』、
海東は男との会話が終わり、1人で呟いた
「やれやれ…誰かに命令されるのは、僕は嫌なんだけど、今はしょうがないかな…」

～～～～
翌日、街の本屋でこの街について調べていたユウスケ・エリオ・シグナム。
なお、フェイトとキャロは図書館で調べる為、別行動をしていた
「う～～～ん。見滝原か…聞いた事ない名前だな…」
「ああ。私達が暮らしていた地球にはない名前だ。やはり…」
「別の地球って事ですね。」
「…うん。やっぱり、ライダーや魔道師がいない世界って事だよな」
「そう考えるのか、妥当だな」
「ですね」

頭を悩ませている3人は、合流場所の近くの公園に向かった。
その時に、ユウスケは灰色のブレザーを着た高校生にぶつかった
「あった!?」
「いっっ…」
「ユウスケさん大丈夫ですか?」
「小野寺…お前ちゃんと前を見て歩け」
「は、はーい…」

相手の高校生はユウスケに謝ろうとした時、ユウスケは相手の顔を見て驚いた

「タ、タクミくん!?」
「え!?あ、あの…僕あなたと何処かで会いましたっけ…?」
「あっ。そうか、俺は士や由里ちゃんの写真で知っているから、君と実際に会うのは初めてか」

ユウスケの話にタクミは驚き、ユウスケに問いかけた

「由里ちゃんと士さんの事知っているんですか!?」
「あ、うん。俺、士と一緒に旅をしている仲間。俺は小野寺ユウスケ。」
「ってことは…士さんもここに?」
「いやぁ…それが」

ユウスケとタクミの話が長くなると思った、シグナムは間に入り話を中断させた。

「小野寺、すまないが立ち話より歩きながらの方が良いんじゃないか?そろそろ、テスタロッサたちの待ち合わせ時間になるからな」
「ああそうだ!それで、タクミくん一緒に来てくれないかな?今向かう所で仲間がいるから、そこでまとめて、一緒に話さない?」
「あっ、はい!」

〜〜〜

放課後の帰りに、さやかの付き添いでまどかとワタルは病院の待合室で待っていた。
待っている間、ワタルはまどかにさやかが、会いに行った相手のこ

とを聞いてみた

「それで、その上条恭介って誰です？」

「私たちのクラスメイトで、さやかちゃんの幼馴染。元々は将来有望なヴァイオリニストだったの…」

「だった？」

『どーいうことだよ？』

「それがね…ある日。上条君、交通事後に遭って…そのせいで、二度とバイオリンを弾く事が出来なくなって、それで今も病院生活なの」

「そうなんですか…それで、さやかは彼の所に通っているんですね」

『くっ～良い話じゃねーか。あの姉ちゃんもああ見えても、良い所があったんだなぁ～』

『それでまどか。さやかは何故、その上条恭介の所に行くんだい』

まどかの会話に一匹は？マークを浮かべるように聞いた。その流れで大体わかったワタルとキバットは未だに解っていない、キュゥべえに言った。

「あなた、今の話でも分からなかったんですか？」

『おめぇ、アレだよ。さやかはその野郎に惚れているんだよ。幼馴染に恋する乙女ってか、良いねぇー俺も昔は憧れていたな～今じゃ、そんなのはゲームかアニメの話だけどな…』

『僕には恋自体が分からないからね。それと、君はメタな発言は自重しようか』

「「そこは同意」」

キュゥべえの発言にまどかとワタルは同意されてしまうキバット。

そんな時、さやかが戻ってきた

「あれ、さやかちゃん早いね？」
「うーん。それがさ…どうもあいつ都合が悪いみたい。わざわざ来てやったのに失礼しちゃうわ」
『オイオイ～愛しの彼に会えなかったからって、怒るなよ～…って、イタタタター！？顔が裂けるぅ～～～！』
「あん？誰が愛しの彼だって…！？」
「ちょっと、さやかちゃん落ち着いて！ここ病院だから！これ以上引っ張るとキバットが裂けちゃうよぉー！！」
「あなたも落ち着いて下さい、まどか」

周りに迷惑をかけて、謝りながら病院を出て行ったとき。まどかは病院の脇の自転車置き場である物を見つけた

「ねぇ…さやかちゃんにワタルくん。これって…」
『グリーフシードだ。もう孵化しかかっている』

足元にいたキュゥべえは驚くように言い出した。

「ど、どうしよう！？早く逃げないと！」
『この辺はもうこいつの魔力に侵食されはじめている。もうすぐ結界が出来上がる』
「そんな…あの迷路が…」

誰かの悪い夢の世界に迷い込んでしまった、壊れた世界…あの怖さを思い出すように、まどかはさやか達に逃げるように言おうとした時、さやかは

「――ッまどか！アンタは早くマミさんの所に行って、呼んで来て！」
「でも、さやかちゃんは！？」

「私は一緒に残る！」
『中の魔女が出てくるまで時間があるけど、結界が閉じたら君は外に出られなくる。マミの助けが間に合うかどうか――』
「なら僕とキバットも残りますから、まどかは早くマミにこの事を！」
『マミのねーちゃんが間に合わなくっても、キバに変身しちゃえば何とかなるしな！』
『…わかった。僕も一緒に残ろう。結界の迷路に閉じ込められても、マミとならテレパシーで僕達の位置を伝えられるからね』
「じゃ私今すぐマミさんを呼んで来るね！！」

まどかはその場から走りながら居なくなり、さやかとワタル達は魔女の結界に消えていった

魔女の結界に残ったワタルとキバットは先頭で歩き、その後ろからさやかとキュゥべえ。

『怖いかいさやか。』
「そ、そりゃあまあ…当然でしょ…それにアンタ達は怖くないの？」
「僕達はこういうのには慣れていますし。今更怖がる理由がありませんよ」
『そうそう。現に俺なんて、あの魔女の使い魔に似たようなもんだしな～』
「それもそっか…ハァーそう思うと、あんたって凄いよね。最初に現れた、オルフェ何とかに立ち向かって変身して戦うし。もし私の近くにあんな化け物が居たら、怖くって近寄れないよ」

さやかの一言にワタルは何も言わずに黙って先に行こうする。それを見てさやかは止めた

「ちょっと！勝手に行かないの！」
「……」
「どうしたのよ？急に黙って？」
「…いえ。何でもありません……」

そうして、二人と2匹は魔女が居る場所に向かっていった

～～～～～

待ち合わせの場所に集合した、ユウスケ達とフェイト達に途中で出会ったタクミにお互い話していた

「じゃあ、タクミ君はオルフェノクの退治の後にここに飛ばされていたってこと？」
「はい。昨日の夜、スマートブレインハイスクールに現れたオルフェノクを退治の帰りに突然、灰色のオーロラが現れたんです。」
「昨日か…じゃあ、俺達と同じ来たばかりか…」
「それで、みなさんはどうしてここに？」
「それは私が説明します」

フェイトはタクミに自分たちの世界のこと、ユウスケと士が機動六課に民間協力してくれた事。そして、自分たちがロストロギア・レリックの捜査中に謎の少女と戦い、その時に影に飲み込まれてこの世界に来たことを話した

「じゃあ、あなた達は魔法使い…？」
「魔法使いって言うより、魔道師って呼び方の方が良いかな」
「私は魔道師より騎士だな。」
「僕も一応騎士ですし…」
「色々あるんですね…」

「うん。俺も覚えるのに苦労したよ」

「マミさんこっちです！」
「ええ！わかっているわ！」

フェイト、ユウスケの前を二人の女の子が走り去る。その時のピンク髪の少女の会話で、ユウスケが反応した

「さやかちゃんと一緒に居るワタルくんとキバットが居るけど…私、さやかちゃんが」
「あの子が居るなら、心配はないけど、急ぐわよー！」
「はい！」

そのまま急ぐように病院の方に行く二人に、ユウスケは追いかけようとした。

「どうした、小野寺？」
「…すみません！俺、あの子達を追います。」
「どうしたんですか？急に」
「さっきの女の子、俺の知り合いの名前を言ったんだ！もしかしたら、何か知っているかもしれない！」

先に走りだして居なくなるユウスケに、フェイトとシグナムはユウスケに怒るように呟いた

「あの馬鹿者。勝手に走り出して…少しは私達に頼む事はしないのか…」
「本当です。勝手に行かれると困りますから私たちも後を追いかけましょう！」

「そうだな。お前たちも行くぞ」
「「はい！」」
「タクミも一緒に行く？」
「僕も一緒に行きます！――――それに、この先嫌な感じです」

～～～～
マミとまどかは、病院に到着して魔女の結界に入っていった。その時にもう一人、結界に入った人影に気づくことは無かった。
結果内に入った二人の前に知った顔が待っていた

「ほ、ほむらちゃん…？」

すでに結果内に入っていた暁美ほむらが待ち構えていた。その冷たい目線で、まどかとマミを睨みつけた。マミは表情を変える事無く、ほむらに言った

「――――言ったはずよね。２度と見たくないって」
「今回の獲物は私が狩る。あなた達は退きなさい」
「そうもいかないわ。美樹さんやキュゥべえ、ワタルくんを迎えに行かないと」
「その３人の安全は保障するわ」
「…それを信用すると思って？」
「……」

二人に何か重たい空気が流れ始めた。その時、マミの手は地面につけた時。
無数の光のリボンがほむらの身体に絡み付きほむらは苦しそうな表情でもがき始めた

「馬鹿ッ…こんなことやっている場合じゃ！」
「安心して、終わったらちゃんと解放してあげるわ」
「今回の魔女は…今までとは違う！」

「…行くわよ鹿目さん」
「え、あ、はい！」
「ッ…待って！」

ほむらを後に先に進む、マミとまどかは歩きながら無言だった。けど、マミはまどかに呟いた

「私はあなた達が思っているほど、完璧じゃないわ。」

今まで見てきたマミとは違う表情でまどかに言った

「無理してカッコつけてるだけで…怖くって、辛くても、誰にも相談出来ない…一人ぼっちで泣いてばかり…。――――いいものじゃないわよ…魔法少女なんて」

その表情は今にも泣き崩れそうな表情だった。それを見てまどかは

「あの、マミさん…私、願い事を私なりに考えてみたんです」
「――――えっ？」
「マミさんから考えてみれば、甘いって怒られるかもしれません。…私って昔から、得意な学科とか、人に自慢できるような才能もありません…でも、マミさんやワタル君に出会ってから、誰かを助ける為に戦ってるの、見せてもらって…同じことが私にも出来るかもしれないって言われて……何よりも嬉しかったのは、そのことで…」

そして、息をもう一度吸い込んで、口にした

「――私、魔法少女になれたらなら、それで願い事を叶っちゃうんです。」

「――大変だよ?怪我もするし、恋したり遊んだりしてる暇もなくなっちゃうよ?」

「それでも私は、そんなマミさんに憧れているんです。それに今は私やワタル君も居ますから、もう一人ぼっちなんかじゃないです」

「――まいったなぁ……やっぱり私は駄目な子だ」

「マミさん?」

「本当に、これから…私と一緒に戦ってくれるの?側にいてくれるの?」

「――はい。私なんかで良かったら」

マミの瞳には涙がいっぱい溜まっていた。そして、まどかの気持ちにマミは顔をくしゃくしゃにして指先で涙を払い、照れる様に微笑んだ

「ありがとう…鹿目さん。」

その時、キュゥべえから孵化すると聞いて、一気に急ぐマミとまどか。マミはまどかに気づかれないように、心の底から嬉しそうに言った

身体が軽い――こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて。

もう、何も怖くない。――私、もう一人ぼっちじゃないもの

～～～

二人の少女を追いかけて、気づいたら謎の世界に着いていた。ユウスケは周りを気にしながら歩いていた時、光るリボンに絡み付く黒髪の少女を見つけた

「君どうしたの!?」
「アナタは……もしかして、この世界に迷い込んでしまったの」
「えーっと、そんな感じ。ちょっと待ってて!今すぐこれを引き切るから」
「無理だわ。ただの人に簡単に切れるわけ…」
「――――変身!」

ユウスケはアークルを出し、クウガに変身した。それを見たほむらは驚きの顔でユウスケに聞いた

「アナタ…もしかして、仮面ライダー…?」
「君、仮面ライダーのこと知ってるの!?」
「ええ…この先に、男の子もコウモリの姿の仮面ライダーに変身していたわ」
「やっぱり、ワタルのことか…なら、尚更退き帰る訳にはいかない!」

力を込めるように、リボンを千切るがなかなか千切れない。その時…

「――――紫電一閃――――――!!」

騎士甲冑を纏い、レヴァティンで光のリボンを斬るシグナムと後から遅れるように、フェイト・エリオ・キャロにファイズギアボックスを持っているタクミの姿が現れた。
リボンから解放されたほむらは、更にフェイトたちを見て驚いた。

「あなた達は…一体？」
「士みたいに言えば、通りすがりの魔道師って言えばいいかな」
「魔道師……？」

ほむらは思わず、フェイトたちに見惚れてしまう。…が、思い出すようにユウスケに言った

「あなたも仮面ライダーなら、急いた方がいいわ。この先にいる魔女が今まで以上の奴だから、この先に行った他の子が危ないわ」
「魔女？」
「詳しい話は置いといて、急いだ方が良いな…急に魔力が高まっている。」
「ええ…私とエリオが先に先行するから、シグナムはキャロと一緒に後から来て」
「わかった。」
「なら俺とタクミくんはキャロちゃんと一緒に後から行くよ。君も来てくれる？」
「……ええ。分かったわ」

～～～～

魔女がいる場所に辿り着きそして、さやかとワタルとマミとまどかは合流できた

「お待たせ！」
「ふぅ…何とか間に合った」
『来るよ！』

空間の中心に長い椅子とテーブルがあり、その椅子に座る今まで見てきた魔女とは違う、ぬいぐるみが座っていた。ワタルはあれが魔

女と気づき、変身しようとした時だった。

「せっかくのところ悪いけど、一気に決めさせてもらうわ！」

マミが椅子の脚をマスケット銃の持ち手の部分で叩き壊し、椅子から落ちてくる魔女を野球のバッターのように打ち飛ばした。それを見たワタルは思わず叫んだ

「待って下さい！相手の出方が分からないのに、勝手に…」

「大丈夫！ここは私だけで、十分よ！」

マミはワタルの忠告を無視して、マスケット銃を撃ち放し、その足元に倒れる魔女の頭に一発撃つ。魔女はそのまま光のリボンによって身動き取れないまま、宙に上がり、マミは巨大なマスケット銃を構えた。

「ティロ・フィナーーーーーレ！！

銃弾は魔女の身体を貫き、リボンが魔女を絡まった時、魔女の口の中から
黒く長い怪物が現れ、一気にマミの所に近寄り大きな口を開けた

「――――――――えっ？」

マミは一瞬の出来ことに何も出来なかった。怪物はそのまま口を閉じようとした時

「危ないいいいいいーーーーーーー！！」

マミを横切るように光る何かが、マミを捕まえた。
早すぎて何処からが聞こえた声にまどかとさやかとワタルは、周りを見渡すが、気づいた時には先ほどまでいたマミの姿がなかった。

しかし、そこからかなり離れていた場所に見知らぬ少年がマミを抱えていた。少年はマミに気遣うように言った

「――大丈夫ですか？」
「――き、君は…？」
「安心して下さい。僕たちは味方です」
「――えっ？」

黒い怪物の横から女性が金色の魔方陣とともに無数のプラズマランサーを飛ばして、怪物を大きく飛ばした。その時に別のほうから、巨大な竜が現れて流石に驚いたまどか達にワタルは今のうちにと、キバに変身した。キバに変身した後、竜から見たことある人物が降りてきた

「クウガ！？…って事はまさか！」
「お待たせワタル！」
「その声ユウスケ！？どうして貴方が」
「それは後！先にあれを倒そう！」

その時、もう一人同じように降りてきた…黒地に赤のフォトンストリーム。
それは……仮面ライダーファイズの姿だった。

第3話　「もう何も怖くない」（後書き）

もう何も怖くない！

やっとこの回を書けました。前からマミを助けるキャラ候補は、フェイト・エリオ・タクミっと考えていましたが、最終的に、ラッキースケベなエリオに決まりましたw次回、シャルロッテ戦ですが…ライトニング隊・クウガ・キバ・ファイズ・ほむら対シャルロッテ…コレ、イジメ？

第４話　「もう本当に何も怖くない」（前書き）

シャルロッテ『もぐもぐ…』
士（返事が無い。ただのマミられたようだ）

一同『ぎゃぁぁぁぁーーーーーー！！」

ユウスケ「一体どうしてこんな事に！？」
ほむら「この前の後書きで、作者がうっかり『シャルロッテ』のことを『シャルロット』って書いたから、その腹いせにマミったようね」
杏子「つーか、シャルロットってＩなＳに出てくるキャラクターの名前だろ」
フェイト「最近見始めた影響もあるらしいから…」

シグナム「無駄話はその辺で…久しぶりにあらすじ行くぞ」
さやか「１つ！突然私達の世界に現われた、フェイトさんとユウスケさん達！」
マミ「もう何も怖くない！」
エリオ「えっと…２つ？お菓子の魔女シャルロッテに襲われそうになったマミを僕が助けた！」
キャロ「３つ！結界の中央に集まった私達はお菓子の魔女と対峙します！」

シャルロッテ『腹減った～他食べさせろ～』
一同「こっちに来るなぁぁぁぁーーー！！」

第４話　「もう本当に何も怖くない」

突然現れた他の仮面ライダーと魔法少女（？）達にまどかは混乱していた…が、さやかだけは

「私こんなの聞いてないーーー！！？」

某所長の様に叫んでいた。
そんなこと気にしないで、フェイトたちはお菓子の魔女・シャルロッテと戦っていた。
フェイトは高速移動で魔女を翻弄し、その隙にシグナムは紫電一閃でお菓子の魔女の身体を斬るが、脱皮するようにフェイト達を襲った

「再生能力…いや、脱皮？」
「…だが、必ず穴がある。…小野寺、エリオ、キャロ！お前たちも行けるな」
「「はい！」」
「よっし！」

そんな中、クウガは先ほどマミが破壊した椅子の脚を手に掴み、青のクウガ。ドラゴンフォームに超変身し、ドラゴンロットを構えてお菓子の魔女にスピードで牽制する。
キャロはフリードリヒに乗ったまま、クウガとエリオに補助魔法・アクセラレーションで移動系魔法の効果を飛躍的にアップした為、クウガは更にスピードが速くなり、ドラゴンロッドで相手の横顔を薙ぎ払い…
先ほど助けて抱えていたマミを降ろし、エリオはスタールメッサーでクウガが薙ぎ払った反対側をストラーダの穂先の部分を帯状（魔

力刃）に変化させて、魔女を切り裂。更に突然、魔女の口から爆発とともに煙が出た。
その魔女の横にいた人物にまどかは驚いた

「ほ、ほむらちゃん!?」
「怪我は無いようね…まどか。…と、ついでに美樹さやか」
「人をおまけ扱いするな!それよりアンタ、今まで何処にいたのよ!?」
「――――あそこにいる彼女に聞きなさい」

ほむらの目線には、未だに動けないマミを見ていた。油断して何も出来ずに死ぬところだった。ワタルが忠告していたのにそれを無視して、舞い上がっていた自分が恥ずかしく、涙が止まらなかった

「わ、私…私は…うっ…」

こんな筈じゃなかった。この戦いが終わって、これからまどかが魔法少女になって一緒に戦ってくれる…なのに、自分が死んだら意味が無い……
今は怖くって、ただ泣くことしか出来なかった。それを見ていたキバは思わず彼女のそばに行こうとしたが、お菓子の魔女がキバに襲い掛かり、それを避けながらキバはバッシャーフォームにフォームチェンジしてバッシャーマグナムを構えた。
ファイズはファイズフォンを横方向に折り曲げることでフォンブラスターに変え、『１０６』と『ＥＮＴＥＲ』のボタンを押してトリガーを引き、光弾を3連射するバーストモードを撃ち、ほむらも手に持っていた拳銃を三人で一斉に撃つが、お菓子の魔女はそれを気にせず、そのまま体当たりをするようにファイズとキバに吹き飛ばした。

「「うわぁぁぁーーー！！」」
「ワタル！タクミくん！」
「だ、大丈夫です…それより、彼女は？」
「私なら平気よ」

吹き飛ばされたファイズとキバの元に駆け寄るクウガ。一緒に吹き飛ばされたほむらを心配するファイズだったが、その背後にほむらは傷ひとつ無く現れた。

「君、無事だったんだ」
「あのくらい、避けて当然よ」
「（当然なんだ…）」

心配するファイズにほむらは平然と言い切り、心の中で突っ込むワタル。
そんな中、未だにお菓子の魔女は脱皮をしながら襲い、それに苦戦する一同であったが

「これでも中々効きませんね…」
「うーん。えっと、ほむらちゃんだっけ？何かいい案ないかな？」
「……方法はあるわ。」
「「どんな方法！？」」

ほむらに何かいい案を聞いてみたタクミだったが、方法があると言われて驚くワタルとタクミ。

「今までの攻撃は外側での攻撃だったから、脱皮して今も平気だった。」
「なら、相手の内側を攻めれば…勝機はある！」
「それなら、私とシグナムが囮になるから、ユウスケとタクミとエ

リオ。頼める？」
「もちろん！」
「僕も構いません！」
「はい！」

クウガはドラゴンＦからマイティＦに戻り、マイティキックを…
ファイズはミッションメモリーを挿入したファイズポインターを右足の脹脛に装着し、ファイズフォンの「ＥＮＴＥＲ」を押すことにより「Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ」の音声が発せられると共に、フォトンストリームを経由してフォトンブラッドが注入され、クリムゾンスマッシュの構えを…
エリオは『スタールメッサー』と『スピーア・アングリフ』を合わせた『メッサーアングリフ』をそれぞれ決めるため、相手の口が大きく開くのを待っていた。

フェイトとシグナム、ほむらとキバはその間、牽制して３人のために隙を作り…
そして、相手が口を大きく開けてほむらを襲おうとした時、３人は魔女の口の中に入った。
クウガは足に炎が宿り、跳び蹴りを放す必殺キック『マイティキック』が――
ファイズは足にセットしたファイズポインターから円錐状の赤い光を放って目標である口にポイントし、跳び蹴りを放す『クリムゾンスマッシュ』が――
エリオは『スタールメッサー』と『スピーア・アングリフ』を合わせた、ストラーダのヘッドブースターを展開させた『メッサーアングリフ』が魔女の口に突進して貫き、その状態のまま更に斬撃が――

――３人の必殺技が炸裂し、お菓子の魔女・『シャルロッテ』を

貫き、爆発した。

爆発と共に、結界は崩れ…元の病院の自転車置き場に戻った。しかし、まどかとさやかは未だに呆気を取られていた。

「えーっと、あなた達大丈夫…？」

「気が動転しているんだ、今は落ち着かせたほうが良い。」

心配するフェイトに、シグナムは平然としていた。その離れていた場所で、未だに座り込んでいるマミにワタルはいつもと違う威厳のある顔でマミを見ていた。

「ワタルくん…」

「マミ。何です…あの戦いは」

「私は…」

「今までの貴女はあんな戦いはしないはずです。……一体何があったんです」

今までとは違うワタルの顔にマミは少し怯えるように、まどかとの会話のことを話した。

それを聞いたワタルは

「――それで…嬉しくって、僕からの忠告を無視して死に掛けた。」

「……ええ。私は今まで一人ぼっちで戦って…誰からも助けてくれない…一人ぼっちで私の辛さがあなたには解らないかも知れないわ！」

泣き崩れるマミにワタルは、ある話をした

「――その気持ち解ります…誰にも理解されない、誰も助けてくれない…ただ一人ぼっち。」
「…えっ？」
「これはある少年の話です。その少年は人間と怪物が一緒に共存するある世界の王子でした…しかし、その王子は人間でありながら怪物でもある。王子は人間の母と怪物の父の間に生まれた混血児でした。しかし、その王子は王でありながら王位を受け継ぐ事に避けた態度を取っていました。」
「……どうしてそんなことを…？」

ワタルが話す少年の話に、マミはその話を真剣に聞き…思わずワタルに聞いた

「――簡単ですよ。その怪物達は人間の生命エネルギー『ライフエナジー』欲しさに人間たちを襲う者もいます。……その王子も同じように人間のライフエナジーを欲する怪物としての本能を抑え切れないため、親しくなった人間のライフエナジーを吸ってしまうことを恐れていました。
そのため王位を継ぐことに消極的で、他人との交流を避けた態度を取っていました。その為、部下の怪物達から反感を抱く者がいました。その王子は頼れる友もいない…誰もこの苦しみを理解してくれない…誰も助けてくれない。王子は孤独で一人ぼっちでした…」

「……」

「でも…ある時、一体の怪物が王子の王位を剥奪して奪い、本当に一人ぼっちになった王子でしたが、王子の前に二人の人間の旅人が現れたんです。二人の旅人は王子の為に戦い、その戦いでその二人の人間と王子の間に友情が生まれました。」

「……それで王子はどうしたの？」
「それから王子は人間と怪物の共存の為、王になることに決意を固めて王位を継ぐことになりました」
「――――ワタルくん…」

――――マミは王子が誰のことが解かった…自分だけが辛く悲しい思いをしているんじゃない。目の前の少年も辛く悲しい思いをしていたんだと……。

「それに今のあなたは一人ぼっちではありません。僕もいますし、まどかやさやかもいます。…もしかしたら、あの人達も僕たちの事情を話せば協力してくれるかもしれません。…そうですよね、ユウスケ？」
「――――うん。これから皆で話し合おうと思って来たんだけど、君も一緒に来てくれるかな？」

ワタルのすぐ傍にユウスケがやってきて、ユウスケはマミにも声をかけた。
それに答えるように涙を払いながら立ち上がり、ワタルと一緒にユウスケに駆け寄った。

～～～～～～
そして、これまでのことを話し合う為、一同はマミの部屋に来ていた。
元々一人暮らしのマミの部屋であったが、一致に人数が増えてしまったがそれでもなんとか落ち着いて、自己紹介も含めて話し合っていた。

「――これが私たちの世界『ミッドチルダ』についてなんだけど…分かってくれたかな？」
「えっと…はい」
「大体分かったわ。」
「いや分からない！大体アンタ、今の説明でよく分かったわね！つーか、なんでアンタもいるのよ！？」
「まどかがどうしても一緒に来て欲しいって、言うから来ただけよ」
「まーどーか！」
「ええー！だ、だって…ほむらちゃんも知った方が良いかなって…」

半分理解出来てないマミ、大体分かったほむらに、全く分からないさやかとまどかを措いて、ワタルはフェイトとシグナム、ユウスケに聞いた。

「それで皆さんはこれからどうします？」
「私達は元の世界に早く戻りたいけど…」
「戻れる手段が無いのであれば」
「暫くこの世界で俺達もマミちゃん達と一緒に魔女退治付き合うよ！」
「えっ！？」

ユウスケの発言に驚くマミ。それはユウスケだけではなく、フェイト・シグナム・エリオ・キャロも同じ様に真剣に見ていた。突然の出来事にマミは一時我を忘れていた

「で、ですが…皆さんはこの世界の人ではありませんし…そ、その…」
「目の前であのような魔女を見てしまったんだ。このまま見逃す訳にはいかないからな」

「僕も同じです！」
「私も一緒に戦います！」

シグナム・エリオ・キャロの申し出にマミの目からは大粒の涙が溜まっていた

「冗談じゃないですよね…？」
「冗談じゃないよ、私達は困っている人を見過ごす訳にはいかない。だから、私達も手伝わせてくれるかな？」
「俺もさっき言ったことは嘘じゃない。それに俺はこの世界中の人々の笑顔を守りたい。君の笑顔も含めてね」
「それにマミ。さっきも言いましたが、僕もあなたの魔女退治はこれまで通り付き合います。」

3人の顔を見て、マミはもう我慢できずに……

「――――う……うわぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！」

もう人前では泣いつもりだった…絶対に泣いつもりだったのに、この人達によってそれが崩れた。まどかとさやかの前では先輩っぽく振る舞い、カッコつけていたのにそれを気にせず、泣き崩れた。今まで我慢していた分の涙が零れ落ち、顔がぐしゃぐしゃになるマミをフェイトは優しく抱きしめた。

「怖かったんだね…辛かったんだね」
「は…い！怖かった！誰も解ってくれない…助けてくれない…なのに私…私は！」
「うん。分かる……辛い気持ちは私も分かる。……ううん。私達みんな、あなたの気持ちは分かるから…安心して。」
「は……い」

――もう何も怖くない…この人達となら これからも本当に何も怖くないんだ…

マミはその後、泣き疲れたかのように寝てしまい…残されたメンバーで話し合っていた。
因みにほむらはこれ以上付き合う必要はないと言って先に帰り。さやかとまどかも帰る事になり、二人を家まで送るユウスケとタクミ。その帰り道でさやかはユウスケ達にどうして仮面ライダーになって戦うのかを聞いていた

「ユウスケさんとタクミさんって、どうして仮面ライダーになって戦うんです？」
「うーん。俺の場合はある人に『自分を認めてもらいたい』って願いで、グロンギと戦ったんだ。」
「えっ？世界を守りたいとかじゃなくってですか？」
「うん。最初は世界を守りたいって願いより、その人に認めてもらいたい。俺を振り向いてもらいたい…その気持ちだけで戦っていた。言ってみれば、初恋相手を守りたいって感じかな」
「その人も幸せだね～こんな人に守られるなんて、羨ましい～！」
「その人とはどうしたんです？もしかして…」
「ううん。結局、何も言えなかった。」
「そんなー！もしかして、その人には好きな人がいたとか！」

恋話で盛り上がる二人に、ユウスケは少し表情が暗くなるが口を開いた

「そうじゃないんだ。もうこの世にはいないんだ…その人は」

「「えっ？」」
「グロンギっていう俺の世界にいた怪人の王が発した黒い霧によって、次々と人が死んで、グロンギに変貌させられて蘇った。その人…あねさんも黒い霧を吸ったんだ」

ユウスケの話にまどかとさやかとタクミは何も言えなかった。タクミは人から怪人になる話は他人事ではない為、何も言えない……まどかとさやかは何も知らなかったとは言え、酷いこと言った為ユウスケに謝った

「「ごめんなさい！！」」
「えっ！？急にどうしたの？」
「だ、だって…何も知らなかったとは言え…私たち、ユウスケさんの気持ちを考えないで、勝手なことを言って…」
「本当にごめんなさい！」
「いや、その…俺の方こそごめん！こんなこと言って」
「だ、だってぇ～～～！」
「…それにまだ続きがあるんだ」
「「続き？」」
「うん。あねさんと最後に交わした約束『世界中の人々を笑顔にする』…それが今、俺が戦う理由さ……って、さやかちゃん何で泣いているの！？」
「だ、だってぇぇぇーー！目が辛いぃ～！」
「まどかちゃんも大丈夫？目が真っ赤だよ？」
「ううう…良い話で目が辛いよ……」
「うう……それで、タクミさんはどんな理由なんです」
「えっ、僕も？」
「はい！目が真っ赤になっても聞きたいです！」
「僕はユウスケさんほどではないけど…夢を守るためかな」
「夢ですか…？」

目が真っ赤になるまどかとさやかにタクミは語った。自分がファイズとして戦う理由

「僕はクラスメイトの女の子の夢を守りたくって、ファイズになったんだ…」

「自分の夢じゃなくって、友達ですか？」

「うん。由里ちゃんって子なんだけど、由里ちゃんの夢が自分で取った写真を写真集にして出すのが夢なんだ。僕はそれを叶えたくって、人を襲うオルフェノクから学園を守るファイズになったんだ…」

「じゃあ、タクミさんの夢は何です？まさか、由里って人の夢を叶えるのが夢じゃないですよね？」

「うん。その通り…僕の夢は由里ちゃんの夢を叶えたいんだ。それが僕の夢だからね」

「――――夢…」

さやかの脳内に浮かんだのは幼馴染の少年の姿…彼の夢は事後によって無くなった…なら、私がキュゥべえと願い事を叶えて契約しれば…

「叶うのかな…あいつの夢」

「えっ？」

「ううん！何でもない！あっ、あたしこの辺だから、また！」

さやかはこの辺で別れようとしたが、タクミが最後まで送ると言って、ユウスケとまどかと別れた。

その後、まどかを送るユウスケだったが、丁度、家の前でまどかの母・詢子に出会い。…それから

「いやぁ～まさかまどかが男と歩くとは！ユウスケぇ～もっと飲め

って！」
「い、いや…あの俺はもう…」
「あん？私のお酒が飲めないと…」
「いえ…頂きます」
「おっ！良い飲みっぷりだね～！」
「ハ、ハァ…」

詢子に気に入られたユウスケは、無理矢理お酒を飲まされてしまった。
それを見ていた、まどかとその父・知久は

「「ユウスケ（さん）（くん）本当にゴメンなさい…」」

心の中で謝っていた……っと言う

～～～～～

お菓子の魔女を倒してから、数時間後…見滝原付近――ブルースペイダーを押しながら歩くカズマとその横を歩きながら、クレープを食べている杏子はカズマに聞いた

「ねぇー兄ちゃん。本当にマミのやつに会うの？」
「うん。もしかしたら、俺たちに協力してくれると思うんだ。」
「ふーん。――俺たちね…って、待てい！俺たちってことは、あたしも含んでるの！？」
「えっ？何か問題でもあった？」
「大ありだよーーー！！あたしはただ、兄ちゃんがどうしても他

の魔法少女に会ってみたいって言うから、マミの縄張りの所まで道先案内してやっただけなのにぃー！」
「俺…そのお礼でクレープ買ってあげたのに……一番高いやつ」
「……」

このクレープ一つ【一番高いやつ】でここまで案内された…それなら、クレープじゃないやつにするべきだったと思う杏子であった…

「もしかして…杏子ちゃん。そのマミちゃんと仲悪い？」
「仲悪いって程じゃないけど…あたしとあいつのやり方が違うんだよな…」
「どういうこと？」
「あいつは魔女と使い魔も両方倒すんだよ」
「それで？」
「それにあたしは元々……」

杏子はそれを言おうとした時、杏子のソウルジェムが反応した。近くに魔女がいると分かり、二人はその場所に走り出した。

二人が魔女の結界に辿り着き、入ろうした時だった。突然結界がなくなり、その場に現れた二人組みの一人にカズマは声を上げた

「あぁぁぁぁぁーーーー！！お前、あの時チーズと一緒にいた青いの！」
「やぁ久しぶりだね、ブレイドくん。僕は青いのじゃなくって、シアン。そして、ディエンドだ。覚えておきたまえ」
「それより何でここにいるんだよ！もしかしてチーズも…」
「士は今、別の世界にいるけど彼はチーズじゃない！」

カズマとディエンドの会話に思わず、間に入ろうとした杏子だった

が、その前にディエンドの隣にいた大柄な男性が間に入った。

「…それで、ディエンド。この者もライダーか？」

「そうさ。彼は仮面ライダー剣（ブレイド）」

「…そうか」

「あ、あんたは…？」

「今は名乗らん。」

腕を組みながら話す男に、杏子が男に聞いた。

「あたしはあんたの名前なんてどうでもいいけど、あんた達が持っているグリーフシードはどうするつもりなんだい？」

「これは我が主に頼まれて手に入れた物だ。しかし……」

「？」

「……役者が揃わなければ、意味が無い」

そう言って、男は手に持っていたグリーフシードを杏子に投げ渡して、それを取る杏子。

それを見たディエンドは呆れるように言った。

「やれやれ、良いのかい？せっかく倒して手に入れたのに、彼女に渡して」

「今だけだ。この者達も今後の役者だ。次に会う時に手に入れば良い」

「しょうがない。あっ、そうそう…ブレイドくん。これから会うかもしれないが、君の探している子の所に君の知っているライダーがいるよ。」

そう言って、ディエンドと男は消え去り、その残された二人はお互い見るように話した

「なぁ、兄ちゃん…もしかして、あたし達…厄介事に巻き込まれた？」

「――――多分。」

第４話　「もう本当に何も怖くない」（後書き）

長く書いて、ほぼ駄文だコレー！？

はい。書いた自分が言うのもアレですが、本当に駄文かもしれません。

それでも、自分の書きたいこと書きました。そろそろ、士となのは組の話を書こうと思います。

第5話　「模擬戦と大苦戦」（前書き）

マミ「もう何も怖くない！」

ワタル「凄い勢いですね…」
まどか「一人で大量にケーキを作るなんて…」
キバット『分けがわからねーよ』
ＱＢ『それ僕の台詞』

シグナム「…で、誰が食べるんだ。この２００個以上のケーキを」
タクミ「流石に無理ですよ…これ」
さやか「それを頑張って食べて倒れた、ユウスケさんとカズマさんに杏子に敬礼！」

三人「「「お、お腹が痛い・・・・・」」」

第5話　「模擬戦と大苦戦」

機動六課、部隊長室

「あかん……最近色々あり過ぎて、頭が追いつかんわ…」
「はやてちゃん大丈夫ですか？」
「あははは…大丈夫よ、リィン…このくらいで倒れたら、部隊長失格や」
「あぅ～そう言って最近寝てないじゃないですかー！少しは仮眠でも良いから、寝て下さいですぅ～！」
「うーん……」
「はやてちゃーん！」
「ふぁーい…ちょっと、顔洗ってくるわ」

リィンフォース？に耳元で叫ばれながら、渋々部隊長室から出て行くはやて。
ここ最近寝ていないのは、行方不明になったライトニング隊とユウスケの行方を調べていたからだ……。

「（フェイトちゃん…シグナム…生きているのなら、必ず私達が見つけてあげるからな！）」

大切な友達と家族が必ず生きていると、信じるはやてであったが……
角を曲がった時、灰色のオーロラが現れ、はやてを知らない場所に移動させた

「……って、ここ何処や？」

周りを見ても、数々の星が回っていた。はやてはそれを見てあることに気づいた

「なんや…これ、全部――地球？」

なのはとはやての故郷の地球と同じ星が、複数存在していた。はやてはそれを見ながら、歩き回った時一人の青年が現れた。

「――初めまして、八神はやて。」

「あなたは…誰です？」

「僕の名前は紅渡。この星たちを見て如何でしたか？」

「（紅渡…聞いた事も無い名前や）…綺麗な青い星でとても良かったよ……って、言いたいけど…どれ見ても全部、地球…どういう事や？」

「――はい。この星全部が地球です。それぞれの独自で生まれた世界…あなたの世界の地球も同じです。」

「…それで、私をここに呼んだ理由はなんです？まさかお茶を誘う為に呼んだ…ってオチは嫌や」

シュベルトクロイツと夜天の書を起動させ、騎士甲冑を纏うはやて。紅渡は落ち着いた表情で、はやてに言った…

「あなたは確か…ディケイドの事は知っていますね？」

「士さんと夏海さんから聞いたよ……世界の破壊者・ディケイドのことも」

「……では、なぜ彼を倒そうとしないのです？あなた達は世界を守る組織……なら、それを破壊するディケイドは敵です」

「確かに……世界を破壊するのなら、私たち、時空管理局の敵です。……でも」

「…でも？」

「士さんとユウスケさんは私の部下の危機を助けてくれた恩人…助けてもらった上に、私たちに民間協力してもらっている人を世界の破壊者って、理由で倒そうと襲ったら、ただの恩知らずや！」
「恩知らずですか……もし、彼がこれから破壊者として、全てを破壊したらどうします？それでも、彼とは戦わないと言うのですか？」
「その時は…機動六課が彼を全力で止めます！」
「……」

嘘も迷いも無く、真剣な眼差しで見つめるはやて。紅渡は八神はやてを見て安心する表情で言った

「あなたの覚悟…確かに受け取りました。ここはあなたを信じましょう…」
「……」
「それと、言い忘れましたが…メモリの話は知っていますね？」
「ええ…知り合いの人から聞きました」
「『ガイアメモリ』これは元々、『ダブルの世界』に出回っている物です」
「ダブル…？ガイアメモリ？それで…どうして、この世界に？」
「ある組織の男がガイアメモリを手に入れ、そのデータを元に製作しました。その中には、大ショッカー関係の記憶も含まれています」
「っ！？それで、その組織はなんです！？」
「それは答えません……ですが、近い内に分かります。…それと、あなたの大事な人達はある世界で無事に生きています」

それを言い残し、紅渡は消えた。はやては止める間も無く、元の場所に戻された。

「今のは…夢？」

両手にはシュベルトクロイツと夜天の書を握り締め、騎士甲冑を纏ったまま…今のは夢ではなく、現実に起きた出来事だった。フェイト達がこの何処かの世界で、無事にいることが分かり、嬉しい気持ちになっていたが……

「あっー！はやてちゃん、こんな所で何をしているんです！！しかも夜天の書を出して！」

「リ、リィン！？実は…」

「言い訳は後にしてくださいですぅー！はやてちゃんは早く仮眠でもいいから、休んで下さい～～～！！」

「うぇ～ん！リィンが鬼や～～～！！」

家族の中で一番の末っ子のリィンフォース？に説教されて、正座で泣く（おかん）はやて。この場に誰かが通っても、絶対に見なかったフリで素通りするだろう……

～～～～

機動六課・訓練所

バイアジャケットを纏ったスバルとティアナ。その前にはディケイドドライバーを構える士とその隣には、なのはが立っていた。

「早速いくぞ…変身！」

「「はい！」」

『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＤＥＣＡＤＥ！』

仮面ライダーディケイドに変身する士に、なのははディケイドにお

願いするように言った。とんでもない事を…

「それでは、士さん。手加減無しでやっちゃってください！」

「……良いのか？」

「はい！これも訓練なので手加減無しで、お願いします！」

「なのはさん…お願いですから、笑顔で言わないでください…」

「諦めなさいスバル…あの笑顔のなのはさんは誰にも止められないわ…」

笑顔で言うなのはに、その笑顔が若干怯えるスバルにほぼ諦めているティアナ。

その離れている場所で見ていたヴィータは

「こりゃ……後でシャマルに連絡しておくか…」

完全にスバルとティアナは医務室送りと確信していた

模擬戦を始めるディケイド。近接戦闘が得意とするスバルはリボルバーナックルで攻めるが、ディケイドはそれを避けながらスバルのお腹を殴った。

「うっ！？」

「おい！これでお仕舞いか？」

「全っ然！」

「なら、こっちも本当に手加減無しだ！」

「はい！」

スバルがディケイドと戦っている間に、少し離れた場所でティアナは色々考えていた。

ディケイドのカードは9人のライダーに変身することが出来る。その姿によって、色々な能力があり、自分たちの常識では考えられない力がある。だから、ティアナは考えた……

「一か八か……この手でいってみるかな」

ティアナはクロスミラージュを構え、ディケイドを狙った…。

「どうしたスバル！この程度か！？」

「そういう、士さんは変えないんですか、違う姿に」

「なら…お言葉通り、そうさせてもらうぜ！」

『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＡＧＩＴＯ！』

人間が神に近い存在…仮面ライダーアギトに変えるディケイド。それを見たスバルは

「えっ、クウガ！？」

「クウガじゃない、アギトだ！だが…お前にはこれが一番だな！」

大地の力を身体に宿したアギトの基本形態・グランドフォームは専用武器を使用せず自らの肉体のみで戦う。パンチ・キックを基本としたスピーディな戦いをスバルもそれに応戦するように戦う

「このライダーも強い…けど！」

「どうした！お前の実力はここまでか！」

「まだまだーー！！リボルバーシュートーーーー！！」

拳を繰り出すと同時に、リボルバーナックルのナックルスピナーを回転させて発生させた衝撃波を発射し、Ｄアギトはその攻撃を食ら

い、吹き飛ばされた。

「くっ…今のは効いたぜ、スバル」
「私もここからが本番です！」
「舐めた口を言うな！」

何処か楽しむスバルにDアギトも仮面の下では、同じ気分だった。
お互い、攻防を繰り広げる中、Dアギトの背後から強い衝撃を受けた。それを見たスバルは声を上げた

「ティア！？」
「やっぱり…あの姿は射撃能力が無い。スバル！このまま私が撃ち続けるから、あんたは一気に決めなさい！」
「うん！」

スバルは一時的にウイングロードで上に上がり、その隙にティアナは連続で撃ち続けた。
しかし、ティアナはここでミスをしていた。煙いと共に現れたのは、右腕に炎の力が宿したアギト…アギト・フレイムフォームにフォームチェンジしていた。
それを見た二人は驚きを隠せなかった

「何よ、あの姿は…」
「おい。攻撃してこないのか？」

士の一言にティアナはアギト・フレイムフォームに向けて、魔法弾を撃った……が
右手に持っていたフレイムセイバーを振るい、ティアナの魔法弾を斬った。それから、ティアナの撃ってくる魔法弾を全て落とした。

「アレって……アリ？」

ウイングロードで上に上がっていたスバルが一人で呟いている時、ティアナは焦っていた…見た目と違って、あの姿はパワーだけではなく超越感覚も優れている。動きを見切りながら、巧みな剣術で戦う。言ってしまえば、シグナムと戦っているのと同じだ。

「そんじゃ…一気に決めるか」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＡＧＩＴＯ　ＳＴＯＲＭ！』

フレイムフォームから、風の力を宿したアギトの俊敏形態。左腕が特に強化され、風を操る能力が備わっている姿。アギト・ストームフォームにフォームチェンジにした。

Ｄアギト・ストームはストームハルバードと呼ばれる薙刀を構え…その優れた敏捷性とストームハルバードの長い射程で一気にティアナの首筋にストームハルバートを押さえた。

「これで、俺の勝ちだな」

「うぅ…負けました…」

ティアナの敗北でスバル一人戦うが……

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＡＧＩＴＯ！』

『ストームハルバード』の両端の刃を展開後、超高速回転で突風を巻き起こし敵を斬りつける『ハルバードスピン』でスバルを斬りつけた。多少、手加減をしていた為、バイアジャケットがボロボロになった程度で済んだ

その結果
ディケイドの勝ちということで、スバルとティアナはなのはとヴィータに敗因の原因を聞かされていた

「言いたい事はいっぱいあるけど…先にヴィータ副隊長から」
「お前ら、あいつのカメンライドとフォームチェンジの勉強不足だな。最もあいつがそこまで教えてくれるか、分からないけどな」
「あ、あははは…」
「それと、ティアナは攻撃を撃ち続けたのも、問題があるかな。相手が近接戦闘しか使えないからって、油断しすぎだよ。」
「はい…」
「次は士さんからしっかり聞くんだよ。もしかしたら、今後の作戦にもなるから」
「「はい！」」
「それと夏プリンー。士の奴、後どのくらいで笑いが止まるんだー？」
「あと1時間は笑ったままですね…って、誰が夏プリンですか！」
「ギガうまだろ？」
「美味しくありません！」

「あ、あはははははは～～～～！！な、つはははははは～～～～！！」
年頃の女の子の服（バイアジャケット）を斬り破った士を『少しやり過ぎです！』と言われ、夏海に笑いのツボを押されて笑い続ける士の姿があった。

〜〜〜〜
見滝原。今日も魔女退治を続けるマミ達とライトニング隊・仮面ライダーたちだったが…魔女の結界とは別の結界で戦っていた。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

と共に一斉にエネルギー弾が発射され、ファイズ・エリオ・キバはその攻撃を当たってしまい倒れてしまった。その攻撃する相手にクウガは叫んだ

「一体どういうことだ！お前がどうしてこんな事を！？」
「悪いね、小野寺君…僕にも色々事情があるんだ」

シアンと黒と白をメインとした、仮面ライダーディエンド。今まで共に戦った仲間が、敵として現れた。しかもこの世界にはいない、ガジェット・ドローン？と？に謎の男と現れた。

「戦いに集中しろ、小野寺！あいつは敵だ！」
「シグナムさん危ない！」

シグナムの背後を襲う仮面ライダーサソードにマミが援護射撃で、助けるが…
その隙に仮面ライダーデルタの攻撃にマミは襲われてしまった

「きゃぁぁぁぁー！？」

「マミ!?プラズマランサーーーー!!」

空からプラズマランサーでマミを助けようとしたが、ガジェットドローンのＡＭＦによって妨害されてしまい、更にフェイトの後ろにあった最上階ビルの鏡から、仮面ライダーリュウガのドラグセイバーによって、フェイトは叩き落されてしまった

「っ…このままだと、マズイ」

ガジェットのＡＭＦによって、上手く魔力制御が出来ない上に、ディエンドが召喚した仮面ライダー達の攻撃によって苦戦していた。

クウガはディエンドと、ファイズ・エリオ・キバはディエンドの攻撃によって、ダメージを受けるが何とかガジェットたちと戦い。シグナムはサソードとマミはデルダ、フェイトはリュウガと戦い、キャロはまどかとさやかを守っていた。

「……」

しかも未だに動かない大柄な男がいる。この場は分が悪い為、撤退したいが相手が出した結界魔法によって出れない状態であった。

第5話　「模擬戦と大苦戦」（後書き）

久しぶりになのは組と士の話です。って、まさかの紅渡登場です！
最初は鳴滝を出す予定でしたが、予定変更で渡を出しました。…もしかしたら、剣崎が出るかも…

そして、今回は逆リンチにあうフェイト達ですｗ

第6話　「腕組みとゼロからのやり直し」（前書き）

はやて「うぇ～ん！うぇ～ん！」

シャマル「リィンちゃんダメじゃない！はやてちゃんを泣かせて！」
ザフィーラ「お前の気持ちは分かるが、いくら何でもやり過ぎだ」
リィン「あぅ～ごめんなさいですぅ…」

士「それで、はやてはアレからどんだけ説教聞かされたんだ？」
ヴィータ「3時間も説教されたらしいぞ」
ティアナ「長っ！？」

スバル「それでは本編…」
渡「…始まるよ」

夏みかん「今の私のセリフです！」

第6話　「腕組みとゼロからのやり直し」

ディエンドたちと戦う前の話

次の日の見滝原中学校・お昼休み時間、暁美ほむらはある考え事をしていた。

「（昨日は一緒に戦ったけど、あの魔法少女に仮面ライダー……今までこんな出来事なんて無かったわ…それに異世界『ミッドチルダ』…この“時間軸”は一体……）」

難しい顔をしているほむらにまどかが声をかけてきた。お弁当箱を持っている所を見ると、これから昼食を食べるところだった。そんな中、まどかはほむらに言った

「あの、ほむらちゃん…」

「何かしら？」

「まだお昼ご飯食べてなかったよね？もし良かったら…私達とお昼一緒に食べないかな？」

「……」

「――私と一緒に食べるの嫌かな…？」

「……待ってて。これから準備するから」

「う、うん！」

まどかの誘いに乗るほむら。むしろ、まどかは嬉しそうに喜んだ。しかし、ほむらは小さく呟いた。

「――そんな可愛い顔でお願いされたら…聞くしかないじゃない」

……っと。その屋上にはさやかとマミが先に待っていて、まどかの姿に大きく手を振るが…

「まーどーかー！こっち……って、オイ！？」
「何かしら？」
「何であんたまで来てるのよ！」
「あら、私がここに来て何か悪いかしら？」
「悪いも何も私はまどかとマミさんと一緒にお昼食べるのよ！どうしてアンタまで！？」
「まどかに誘われたから来ただけよ。それにあなたがいるって知っていたら、行かないわ」
「ムッキー！本当にムカつくわね、アンタは！」
「それは私のセリフだわ。少しでもいいから黙るって言葉を覚えなさい」
「うがぁぁぁぁ～～～！！やっぱ、腹立つ！あんたの性格を修正してやるわ！」
「やれるものなら、やってみなさい」
「この…魔法少女で強いからって、いい気に乗ってるんじゃないわよ！この…貧乳！」

さやかの発言に周りが一時的に止まった。まどかも今のでオドオドしながら、さやかを止めようとするが……

「……誰が貧乳ですって？」
「ははーん。もしかして、本当の事言われて怒っているんだ～やーい、やーい！貧乳の転校生～悔しかったら、マミさんみたいにボインボインになってみなさい！」

ほむらを挑発するように自らの胸を押さえるて、笑うさやかにほむらはついにキレた。

今までにないくらいに怒った顔で、さやかに言った

「…美樹さやか。その命、神に返しなさい！」

魔法少女の姿である黒とグレーの衣装に変身したほむらは、左腕に装備されている円形の盾から手榴弾を取り出した。それを見て流石に青ざめるさやかに向けて…

……投げた

「ちょぉぉぉぉぉーーー！アンタ本気で投げる奴が何処にいるのよぉぉぉーーーー！！」

「黙りなさい…私の気にしていることを言った罰よ！もう一度言うわ。その命、神に返しなさい」

「ほむらちゃぁぁぁぁん！もうやめてぇぇぇーー！！それとマミさんも助けて～～～！」

「――フェイトさんが作ってくれた卵焼き…美味しいわ」

「って、一人で先に食べないでくださーーーーい！」

幸い、屋上にはこの四人以外誰もいなかったから良かったものの…他の生徒が居たら大惨事であっただろう。（ちなみに魔法少女でもないのに、ほむらの爆弾攻撃を走りながら、無傷で避け続けたさやかも十分凄い）

～～～

暫くマミの部屋で同居しているフェイト達。そのベランダでフェイトとシグナムはある話をしていた。

「この世界の魔法…魔女、そして…魔法少女。それに関係するキュゥべえ…」
「魔法の使者…って言っていましたが、それも本当なのか気になりますね」
「願いを一つ叶える…あの年頃の子供には夢のような話だ。だが…」
「その代わりに魔女と戦う魔法少女になってくれ……夢のようで現実の話…」
「いつ死ぬかもしれない恐怖…誰にも言えない孤独で辛い話だ」
「……」

フェイトは考えていた…もし、自分が魔法とは無縁でごく普通に生まれた人間で、魔法少女になってくれって言われたら……自分もなっていたかもしれない。
自分の叶えたい夢を叶えて貰った代わりに…その代償として、魔女と戦う。終わりの見えない戦いに…

「どうやら…この世界、一筋縄では行けそうにないな」
「ええ…」

二人は夕日になる空を見ている時に玄関から声が聞こえた。買い物から帰ってきた、エリオ・キャロ・ワタル・タクミに下校途中で一緒に帰ってきたマミ。それを玄関の前にやってきたフェイトは5人に笑顔をで言った。

「おかえりなさい」

〜〜〜〜

とある食堂の厨房では、一人の青年と少女が一緒に皿洗いをしていた。
少女はブツブツ言いながら、隣の青年に言った
「…で、何であたしまで皿洗いしなくっちゃいけないのさ」
「だって、俺の持ち金のほとんどは杏子ちゃんの食費代で消えちゃったからさ」
「だからって！あたしまでアルバイトすることないじゃん！」
「コラァー！その新入り喋ってないで手を動かせー！」
「「はーい！！」」
二人がアルバイトをしていたのは、杏子の食費で消えてしまったお金を稼ぐ為に働いていた。カズマは慣れているかのように早く皿を洗い続けていたが…。
カズマの隣で皿が割れた音が聞こえた。
「――杏子ちゃん。皿割ったのこれで何枚目？」
「う、うっさい！」
「また皿割ったのかぁぁぁーーー！！」
「「す、すみませーん！！」」
「あーもうお前ら時間だろ。後は俺らがやるから、お前たちは早く帰りな」
「すみません、チーズ…」
「誰がチーズだ！？」
アルバイドが終わり、公園のベンチで座る杏子に自動販売機でジュ

ースを買ってきたカズマが、戻ってきてそれを杏子に渡した

「はい。とりあえずオレンジジュースでいいかな？」

「何でもいいよ…本当にカズマ兄ちゃんって、仮面ライダーの癖に皿洗いも上手いだな」

「そうでもないよ。俺だって最初はロクに皿を洗えなかったさ。」

「どーしてさ？」

「俺の会社はランクとして２　－　Ａの１３種類のカテゴリーが割り当てられていてね。俺はスペードのＡで、ブレイドとして戦っていた。それでさ、俺は浮かれていたんだ…給料も結構良いし、そのせいでプライドが高かったんだ。」

「兄ちゃんの何処にプライドが高いんだよ？」

「前の話だよ。けどさ、アンデッドの封印よりも人の命を守ることを優先した為、戦闘中に命令違反したから、降格されたんだ」

「なんだよそれ！？人の命を守っただけで、命令違反っておかしいじゃん！」

「俺も最初は納得出来ないまま、社員食堂で働かされたけどさ…そこで出会ったんだ…俺を変えてくれた奴に」

「変えてくれた奴？」

「うん。門矢士…世界の旅人、仮面ライダーディケイド。」

「門矢士…ディケイド？」

「俺も杏子ちゃんみたいに皿を割っちゃうし、色々失敗続きでさ…最終的には、このブレイバックルを敵に奪われちゃったから、解雇されるし」

「それで、兄ちゃんはどうして変わったんだ？さっきから失敗談ばっかりだし」

「このカード見えば分かるよ」

カズマが取り出したのは、カズマの写真がついたカード。それを見て杏子は笑いながら、スペードの０について聞いた。

「変な写真だね、それにスペードの0って…何？」
「スペードの0…つまり、ゼロからやり直せ…チ…士が俺に渡したカード。だから、俺はゼロからやり直してもう一度、社員食堂でアルバイドから働いてみたんだ。そうしたら、他の皆と働くのが楽しかった…今まであった物を失ったけど、代わりに新しく手に入ったものがあるんだ」
「――ゼロからやり直すか…」

そんなカズマのゼロからやり直す…杏子は昔の事を思い出した。あの償い消えない過ちと今までしてきた罪。しかし、カズマと一緒に魔女退治をしていく度に、昔自分が憧れていたものを思い出した…
『自分の力で誰かを幸せにする！』…そんな夢を見て戦っていた事に…

「なら――もう一度、やり直せるかな…あたし」
「えっ、何か言った？」
「何でもないよ！…って、兄ちゃん。さっきから何か変じゃないか？」
「変って何が？」
「さっきから静かだ……車の音も人がさっきから通らない！」
「言われてみれば……」

周りを見ても、誰も通らない。車の音も何もかも聞こえない…
そして、二人がいる場所からそう離れていない場所から、爆発の音が聞こえた…
街中で爆発。それを見た二人は走った…

その爆発した場所に着いた二人の前に目に入ったのは、仮面ライダーと魔法少女、謎のロボット…そして、この前出会ったディエンドと謎の男の姿。

「これは一体…？」
「知らないよ！こんなの…って、マミ！？」
「えっ？どの子」
「あの黄色いのが、兄ちゃんが会いたがっていた奴さ。後の連中は知らないけど」
「あの子がマミちゃん……」

黄色い衣装で戦う少女、マミ。しかし戦っている相手は仮面ライダー…お互い銃で戦うが、単発で撃つマミに対して仮面ライダーは連射で撃つ…相手のライダーの攻撃で、マミは脇を傷つき倒れてしまう。
それ以外も金髪の女性は空からマミを助けようとするが、ビルの鏡から襲ってくる黒い龍のライダーに妨害されてしまい動けない。ピンク色の女性もサソリのライダーと戦い、引けない状態に…

「くっ……それに」

カズマは彼女たちも気になるが、問題は…ディエンドと戦うクウガ。ロボットと戦うファイズに槍の武器を構えて戦う少年に…キバ。
カズマはキバを見て、あの時の事を思い出してしまった…自分の世界の守るために戦ってしまった仮面ライダーキバ。最終的には彼と和解することなく、自分の世界であるブレイドの世界が消滅した為、ちゃんとした話し合いをしないで別れてしまった。それから世界が再生され、スーパーショッカーとの戦いでは一緒に戦ったが、そこ

でも話し合えずにいた。
カズマは迷っていた。今更キバになんて顔で会うか…しかし、このまま彼らを見過ごす訳にはいかない。だから、カズマは……

「変身！」
『Ｔｕｒｎ　Ｕｐ』

ブレイドに変身して、そのまま迷わずに走った。
それを見た杏子はカズマの行動に呆れながら、言った

「ったく！後で何が奢ってもらうからね！」

杏子は赤い衣装に変身して一緒に走っていた。

～～～～
事の発端は、３０分前だった。魔女退治を始める一同…まどかとさやかももう暫く、マミと一緒に魔女退治に付き合いたいと願いで来ていた。しかし……

「あーもう！本当にズルイ！」
「何かだ？」
「どうしたのさやか？」
「だってさっきから、歩いている度にフェイトさんやシグナムさんに男性が寄って来て声を掛けて来るし！」

さやかが怒っているのは、魔女退治に探し回っている時にフェイトとシグナムに男性から色々声を掛けられていた。それもその筈、二

人はハッキリ言って美人。アイドル並みの顔立ちにスタイル…キバット曰く…『スイカとメロンのボン・キュ・ボン！』である。このままだと、魔女退治が出来ないと思ったキャロはある秘策を考えた…

「ねぇ…タクミ。歩き辛くないかな…？」
「い、いえ…だ、大丈夫です…」

タクミの腕を掴むフェイト。タクミは隣にいる女性に思わずドキドキしてしまうが…もし、ここに恋人の由里が居たら…普通の人間なのに笑顔で『デルタドライバー』を使い、仮面ライダーデルタに変身して襲ってくるかもしれないと…半分怯えていた。

「まったく…何故、私が小野寺と腕を組まなければいけないのだ…」
「――その前に…シグナムさん」
「な、なんだ！？」
「そんなに近寄ると…当たってます」
「何かだ？」
「――胸が」
「……う、うるさい馬鹿者！…さっさと歩くぞ！！」
「ちょっとーー！無理に引っ張らないで～～～！」

「…で、これの何処がいい秘策なのよ」
「仲良く腕を組んで歩けば、カップルに見えるって言ってましたから」
「そりゃ…ユウスケさんとシグナムさんはちゃんとしていれば、カップルに見えなくも無いけどさ…」
「フェイトさんとタクミさんの場合、カップルって言うより…姉弟って感じだよね」

「全くですね」

真顔で言うキャロに呆れるさやか、まどかの姉弟の言葉に納得するエリオ…しかし、もう一組みも腕を組んで歩いていた

「…で、マミ。どうして僕達も腕を組むんです？」

「駄目かしら？」

「別にどっちでもいいんですか…肩に当たってますよ、胸」

「……当てているのよ」

「あのですね…マミ、冗談とお遊びはそこまでにして下さいね。」

「あ、うん…ごめんなさい」

何の反応しないまま、ワタルはマミに言うが、未だにワタルの腕から離れないで歩くマミ……それを見ていた、さやかとキバットは流石にキレた

『ワタルなんて、もげろもげろもげろもげろもえろもげろもげろ…』

「爆発爆発リア充なんて爆発爆発リア充は全員爆発爆発しなさい…ダイ○マン」

二人を見ていた、まどかとエリオとキャロはガチで怯えていた。しかし…エリオは分かってなかった、エリオの両腕を掴むキャロとまどかの胸が腕に当たっていた事に…

そんな中…マミのソウルジェムが反応したと思ったら、突然。違う結界が発動した。

そして、気付いたら自分たち以外の人たちが一瞬で消えていた

「これは！？」

「エリアタイプの結界魔法だな…しかも古代ベルカ式だ」

エリオが驚き、シグナムは冷静に周りを見ていた。息を呑む一同にフェイトはこの結界に見覚えがあるように呟いた

「シグナム…この結界に見覚えがあります」

「ああ、私もだ。お前たちも構えろ…」

レヴァンティンを起動させ、騎士甲冑を纏うシグナムに、フェイト・エリオ・キャロもそれぞれ自分のデバイスを起動させ、バイアジャケットを纏った。

「ワタル、タクミ君…俺たちも変身しよう。」

「ええ…分かってます」

「もの凄く嫌な予感がしますからね。マミも変身した方がいいですよ」

タクミはファイズギアを取り出し、ファイズフォンの変身コードを押して、ＥＮＴＥＲを押す。ワタルもキバットを捕まえ、ユウスケも体内にあるアークルを呼び出し構えた

≪Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ≫

『キバっていくぜ！』

「「「変身！！！」」」

≪Ｃｏｍｐｌｅｔｅ≫

ユウスケ達、３人の同時変身にフェイト達の先ほどとは違う真剣な顔に、まどかとさやかも息を呑んだ

そして、結界の中にオーロラが現れた。そこから現れた人物に、ユウスケとタクミにワタルは声を上げた

「海東!?」
「あの時の泥棒!」
「アスムの師匠さん!?」
「やぁ、小野寺くんにキバの王子とファイズくん」
「お前どうしてここにいるんだ?」
「簡単さ…これを手に入れる為だ」

海東が持っていたのはグリーフシード。それを見たマミ達も思わず声が出た

「どうして貴方が、それを持っているんですか!」
「そうだよ!それにアンタは何者!?」
「僕かい?僕は…通りすがりの仮面ライダーさ。……変身!」

『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＤＩＥＮＤ』

シアンと黒と白をメインとした、仮面ライダーディエンド。ユウスケたち3人は兎も角、まどか達は驚きが隠せなかった。

「嘘…仮面ライダー…?」
「じゃあ…私たちの味方ってことだよね」
「う、うん…」
「さて…お目当ても手に入ったけど…彼女のデータが欲しいんだよね?」

「ああ…主の頼みだ。この世界の魔導師とお前たちのデータ…しか

し弱ければ、貴様たちの命は貰う」
「そういう事さ…小野寺君にミッドチルダの魔導師達とこの世界の魔法少女くん」

『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＤＥＬＴＡ！』
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＳＡＳＷＯＲＤ！』
『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＲＹＵＧＡ！』

ディエンドは3枚のカードをディエンドドライバーと呼ばれる銃に、カードを装填してトリガーを引いた。そして、引いたことに描かれたライダーを実体のある幻として召喚した。

龍騎の世界のライダー。仮面ライダー龍騎とは対照的に漆黒の龍、仮面ライダーリュウガ。
ファイズの世界のライダー。ギリシャ文字のΔ（デルタ）を模したデザインを持つ仮面ライダーデルタ。
カブトの世界のライダー。サソリがモチーフの専用武器・サソードヤイバーを用いた剣術を得意とする仮面ライダーサソード。

「剣には剣。銃には銃。黒には黒…ってところかな」

ディエンドが呼び出した仮面ライダーにフェイトやまどか達も驚きを隠せなかった。

「嘘でしょ！なんで仮面ライダーが出てくるの！？」
「――ユウスケ、彼は敵なの？」
「一応は味方なんだけど…」
「あの者が相手でも、五人…一気に行くぞ！」

一気に行こうとするシグナムに、腕を組む大柄の男は笑うように言った。

「フン…確かに実力はお前たちに分がある。しかし、こちらは数だ」

そして男の発言と共にオーロラから現れたのは、この世界にはいない物だった。
それを見たライトニング隊とクウガは驚いた。

「ガジェット!?」
「これがどうしてここに…?」
「素直に返答して欲しいものだな」
「……」

フェイトは色々考えていた…この男もあの時現れた少女と同じなら、探している男と関係していると…

「――行け、ガジェット達」

第6話　「腕組みとゼロからのやり直し」（後書き）

今回の話はちょっと変則的に書きました。今回は戦う前の話で、前回の最後に書いたのはディエンドと戦っている最中であり、この回のカズ杏もその一部の話です。

次回で、ブレイド・杏子・ほむら集合で、ミッドに大移動です。

それと、アクセス数が２０，０００突破で、ユニークも３，０００人突破しました！
読んでくださる人達に感謝です！まだ未熟者ですが、これからもよろしくお願いします

第7話　「次元震」（前書き）

キバット「もげろもげろもげろ…」
さやか「私だって…恭介と腕組したことないのに…爆発しろ…このリア充ども」

フェイト「一体どうしたのかな、あの二人？」
シグナム「知らん」

ほむら「（まどかと腕組したい…）」
杏子「（あんな童貞野郎より、あたしと腕組してよ…さやかー）」
QB「（そんなことより、僕と契約してよ！）」

ワタル「妙に邪な考えを持つ人達がいますね」
カズマ「ワタル！あっちは見ちゃダメ！」
海東「さて、続きを始めるよ君達！」

第7話　「次元震」

結界内で戦う仮面ライダーとライトニング隊とマミ。
ガジェットのＡＭＦによって魔力が上手く制御が出来ないフェイト達に、クウガはファイズとキバとマミの三人に色々お願いしていた。

「ワタルとタクミ君とマミちゃん！お願いがあるんだけど、あのガジェット…ロボットの方に先に倒してくれるかな！」
「僕たちは構いませんが、一体どうしてです？」
「あのガジェットって、フェイトちゃん達の魔力を制御妨害する機能があるんだ！だから、先に倒さないとダメなんだ！」
「そういうことなら、任せて下さい！」
「僕も構いませんが、ユウスケさんは？」
「俺は…」

ユウスケは迷っていた…このまま海東と戦うべきかと。今まで色んな世界で会っては、邪魔をしてきたけど、大ショッカーとの戦いでは一緒に戦った仲間。
しかし彼は、迷い無くディエンドライバーのトリガーを引いた……

「きゃ！？」

狙った相手はさやかの足元。今の銃撃は威嚇するように向けたものだった…さやかは今の攻撃で腰を抜かしたかのように、動けずにいた

「やれやれ…てっきり、君も魔法少女だと思ったけど…違うみたいだね。」
「海東ッ！」
「何怒っているんだい、小野寺くん？あそこにいた彼女が悪いだけ

さ」
「…ッ」
「それと…ファイズ君とキバの王子に魔導師くんは、暫く動かないでもらいたい」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＳＴ』

と共に一斉にエネルギー弾が発射され、ファイズ・エリオ・キバはその攻撃を当たってしまい倒れてしまった。その攻撃する相手にクウガは叫んだ

「一体どういうことだ！お前がどうしてこんな事を！？」
「…悪いね、小野寺君…僕にも色々事情があるんだ……これだけは」

「戦いに集中しろ、小野寺！あいつは敵だ！」
「シグナムさん危ない！」

シグナムの背後を襲う仮面ライダーサソードにマミが援護射撃で、助けるが…
その隙に仮面ライダーデルタの攻撃にマミは襲われてしまった

「きゃぁぁぁぁー！？」
「マミ！？プラズマランサーーーー！！」

空からプラズマランサーでマミを助けようとしたが、ガジェットドローンのＡＭＦによって妨害されてしまい、更にフェイトの後ろにあった最上階ビルの鏡から、仮面ライダーリュウガのドラグセイバーによって、フェイトは叩き落されてしまった

「っ…このままだと、マズイ」

ガジェットのＡＭＦによって、上手く魔力制御が出来ない上に、ディエンドが召喚した仮面ライダー達の攻撃によって苦戦していた。

クウガはディエンドと、ファイズ・エリオ・キバはディエンドの攻撃によって、ダメージを受けるが何とかガジェットたちと戦い。シグナムはサソードとマミはデルダ、フェイトはリュウガと戦い、キャロはまどかとさやかを守っていた。

「……」

しかも未だに動かない大柄な男がいる。この場は分が悪い為、撤退したいが相手が出した結界魔法によって出られない状態であった。

～～～～

「フリード、ブラストレイ！」

キャロがフリードの体に無数の光を送り込み、足元にミッドチルダ式の魔法陣を展開し、フリードの吐く火球を魔法で包み、加速した炎を放出してガジェット達を焼き払った。

「す、凄すぎ…」

「う、うん…」

『だけど、彼女一人で何処まで持つか分からない。まどか、さやか…もしもの場合は、僕と契約して魔法少女になってもらうよ』

自分たちを守るように、襲ってくるガジェットを次々と焼き払うフリードリヒとそれを制御するキャロの魔法に、未だに驚く二人にキャロは色々考えていた…

「（エリオくんにはアクセラレイション…マミさんにディフェンスゲインを使いたいけど…こっちにもガジェット達が襲ってくると、フリードに回せる魔力が無くなっちゃう…）」

アクセラレイション…対象の機動力を強化する魔法。
ディフェンスゲイン…防御力を強化する魔法。

この2つの魔法でエリオとマミの支援を考えていたが、ガジェットが次々と襲って来る為、フリードを『竜魂召喚』でフリードリヒに開放させて、まどかとさやかを守りながら戦っていたが…
ミサイルランチャーを装備していたガジェット?型のミサイル攻撃に気付くのが遅く、6発のミサイルがキャロ達に迫ろうとした時だった。突然ミサイルが全て爆発した…突然の爆発に驚く3人の前に、ほむらが現れた。

「ほむらちゃん!?」
「貧…じゃなかった、転校生!?」
「暁美ほむらさん!」
『暁美ほむら、君もいたのかい?』
「…質問して良いかしら?これは一体どういうこと…それに、この結界とあのロボット達は何なの?」
「えっと…ね、その…さやかちゃんパス!」
「私にパスしないで!キャロ、後の説明よろしく!」
「は、はい!パスされました!実は…」
「――説明は後で良いわ。先にこの鉄屑共の片付けが先のようね」

「なら、質問するなぁぁぁぁぁーー！！」
『ホントだよ』
「黙りなさい…黙らないとアフロにするわよ。それと、キュゥべえは蜂の巣の刑よ」
『訳が解らないよ』

ほむらから説明を求められキャロが説明をしようとしたが、ガジェットの数に説明は後回しになり、それを思わずツッコミを言うさやかに、冷たい目で睨むほむらであった…

～～～～～

「ッ…仮面ライダーと戦うなんて……でも！」

ディエンドが召喚したデルタと戦うマミ。同じ銃使いとはいえ、相手の攻撃が上だと解っていたが、マミはあることを考えていた。

「（あの仮面ライダーはワタルくんたちと違って、意思や考えが無い…なら、この作戦で！）」

マミはリボンをトランポリンにして高く飛び上がり、デルタに向けて撃った。マスケット銃を撃っては違うマスケット銃に替えて、デルタでは無く地面に撃ち続けた。
しかし、銃を換えている最中にデルタの攻撃で、マミの脇が傷つき倒れてしまった。

「くっ……はぁ、はぁ…」

倒れこむマミにデルタは一歩ずつ歩き近づいて来た。いつでもトリガーを引こうとした時、マミは笑っていた。それに気付いたデルタはその場から離れようとした時、何かに縛られるかのように動けなかった。先ほど撃った地面から無数の黄色い糸が伸びて、デルタを拘束し、動きを封じた。マミはデルタの正面に巨大なマスケット銃を出した。

「…流石の仮面ライダーでも正面から、受け止められるかしら？…でも、動きを封じられてゼロ距離からの攻撃よ…覚悟しなさい！―――ティロ・フィナーレ！」

ティロ・フィナーレを正面から受けたデルタは消滅した。マミは優雅に紅茶を飲んで、微笑んでいた。その後ろには助けに入ろうとした杏子は、呆れていた。

「アンタ…怪我しているのに呑気に紅茶飲んでいるんだよ…」
「あら、良いじゃない…って、どうして貴女がここにいるの？佐倉アンコさん」
「誰がアンコだ！？」
「…冗談よ」
「冗談なら何で目を逸らすんだよ！？」
「お、おほほほ…」
「変な笑いで誤魔化すなぁぁぁぁーーーー！！」

～～～～

一方、ガジェットを倒しているキバ・ファイズ・エリオの３人。先ほどのディエンドの攻撃を受けている為、エリオの動きが若干鈍っ

ていた。そして、ガジェットは動きが鈍いエリオに集中するように、熱光線とミサイルランチャーを撃ち出した。

「うわぁぁー！？」
「エリオ！？」
「エリオ君！」

防御魔法を使うが、防ぎきれずに大きく吹き飛ばされてしまった。バイアジャケットがボロボロになり、身体も傷だらけで動けずにいた。それでもガジェットはエリオを狙うように攻撃するが、キバ・ガルルフォームが動けないエリオを抱えて、攻撃から避けていた。二人を助けようとするファイズであったが、ガジェットに邪魔され動けずにいた。

「大丈夫ですか！？エリオ！」
『落ち着けって、ワタル。エリオの奴、気を失っているだけだ！それよりも…』
「この状況をどうするか…ですね。」
『ああ。シグナムのねーちゃんもサソリ野郎と戦っているし、フェイトのねーちゃんも無理だしよ…誰が助けに来てくれねーかな』
「そんなこと言ってる場合ですか…」
『だよなー…ってオイ！前、見ろ！』
「…えっ？」

一体のガジェットが放ったミサイルがキバの直撃し、その拍子で変身が解けてしまい、エリオと共に倒れてしまった。

「ワタル君とエリオく……くっ！こういう時にオートバジンが居たら…」

オートバジン…可変型バリアブルビークル。（モトクロスタイプの２輪車両）「ＳＢ－５５５Ｖ」。高度なＡＩを搭載しており、ファイズが搭乗しなくとも駆けつけて、装着者の操作によりオートバジン・バトルモード（人型のロボット）に変形し装着者をサポートする。
前輪が変形したガトリングシールドを備えるバスターホイールと高いパワーでファイズをサポートし右ハンドルはミッションメモリーを差し込むことでバイクハンドル型エネルギーブレード「ファイズエッジ」として使用可能。

「うっ…」
『イテテテ…って！大丈夫か、ワタル！？』
「へ、平気です…このぐらいの怪我」
『平気ってお前…腕から血が出ているだろ！』

右腕を押さえるワタルに、心配するキバット。エリオも未だに気を失っていて、ガジェットはワタルを狙うようにミサイルを放そうとしていた。

「ッ…キバット、お願いです。あなただけでも逃げて下さい」
『バカ野郎…俺はお前がオシメを着けていた頃から一緒にいたんだ…死ぬ時は一緒って決めているんだよ。』
「キバット…」
『心配するなワタル…お前を置き去りにしないって…独りぼっちは寂しいもんな。――――いいぜ、一緒に逝ってや…』

「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇーーーー！！」

キバットの死亡フラグ的なセリフに、ある人物がツッコミを入れた。

その人物に、ワタルとファイズは二人揃って声を上げた。

「「ブレイド！？」」

仮面ライダーブレイドの登場で、流石のワタルも驚きを隠せずにいた。ブレイドは醒剣ブレイラウザーでガジェットを斬り倒して、そのままワタルの元へ走った。

「やっぱりあのキバ、ワタルだったんだ。それにしても…良かった」
「その声…カズマ？それにどうして貴方がここに？」
「話すと滅茶苦茶長くなりそうだから、後で話す！それで良い？」
「え、ええ…僕も話すと、長くなりそうですからね」
「なら――俺達は仲間ってことで！」
「は、はぁ…まぁ、その方が良いですね。キバット行きますよ！」
『ＯＫ！キバっていくぜ！』

キバとブレイドはファイズと合流するようにエリオを抱えて走った

～～～～

一方、ビルの鏡を使い奇襲をしていたリュウガであったが…

「ハァァァーーーー！！」

フェイトの高速移動で背後に回り込まれ、プラズマランサーをゼロ距離攻撃で地面に叩きつけられたリュウガは真下にいたサソードとリュウガが衝突し、その隙に…

「――飛竜一閃！！」
「――プラズマスマッシャー！！」

二人の攻撃が直撃でリュウガとサソードは消滅。それから、大方ガジェット達を片付けた、ファイズ達とアサルトライフルを構えてやって来たほむらを先頭にキャロとまどかとさやか。別の方からマミと杏子も合流し、クウガの元にやってきた

「小野寺！」

「「「ユウスケ（さん）！」」」

「みんな！…って、なんか増えてる！？」

全員と合流したクウガはさっきより増えたことに驚くが『まぁ、事情は後から聞くから良いや』でスルーした。そして、ディエンドと男と対峙する一同であったが、ディエンドは余裕があるように笑うように言った。

「まさか、召喚したライダーとガジェットたちを倒すとはね。流石、ミッドが誇るエース魔導師くんとこの『マギカの世界』の魔法少女くん達だ。」

「マギカの世界？」

『多分、僕達の世界の事を表しているんだね。それで、あの機械は全て破壊したし、残ったのは君たちだけだ』

「こいつの言う通りだね。アンタ達のお目当てのデータって奴も手に入ったのなら、お帰りは多分あっちだから、帰って欲しいんだけど」

『マギカの世界』に？を浮かべるまどかにキュゥべえが答え、杏子も納得するように指で違う方向を指していた。

「…それで、ジョーカー。君はどうなんだい？」

「大体のデータは手に入った…では、ここは…」

「――全員抹殺だ」

男・ジョーカーの一言で体勢を構えるライダー達と魔導師一同。そして、ディエンドは一体の仮面ライダーを召喚した。

『Ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅ　ＳＨＩＮ！』

仮面ライダーシン…局地戦用ゲリラコマンド・改造兵士（サイボーグ・ソルジャー）レベル３の特異体である。
それを見たまどか達の一言は…

「なんか怖い…」
「魔女が見たら逃げ出すんじゃない？あの仮面ライダー」
「えっと…仮面ライダーって言うより、人型の魔女って感じね」
「むしろアレ、悪モンライダーだろ？」
「キモイ。それと、まどかが怖がるから出て来ないで！」

上から順にまどか・さやか・マミ・杏子・ほむらからの感想でした。
そして、ディエンドが取り出したのは３枚のカード…それをディエンドドライバーに装填した。

『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＫＩ、ＫＩ、ＫＩ、ＫＩＶＡ！』
『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　Ｂ、Ｂ、Ｂ　、ＢＬＡＤＥ！』
『ＦＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＦＡ、ＦＡ、ＦＡ、ＦＡＩＺ！』

「痛みは一瞬だ」

その発言と共にブレイド・ファイズ・キバはそれぞれ『ブレイドブレード』『ファイズブラスター』『キバアロー』にＦＦＲ形態に変形させられ、ディエンドに『ファイズブラスター』ジョーカーに『ブレイドブレード』シンに『キバアロー』を持ち構えた。

「「ワタル君!?」」
「タクミさん!?」
「カズマ兄ちゃんが剣に!?」
「一体どういうことだ、小野寺!」
「くっ…みんな逃げて!このままだと」
「悪いね…もう遅い」

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＫＩ、ＫＩ、ＫＩ、ＫＩＶＡ!』
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｂ、Ｂ、Ｂ　、ＢＬＡＤＥ!』
『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＦＡ、ＦＡ、ＦＡ、ＦＡＩＺ!』

フェイトとシグナムは解っていた。この攻撃は防ぐ事も避けられる事が出来ない…と。
このままだと、全員この場で死ぬ…それを感じたまどかは震えて動けずにいた。

このまま死ぬ?……何も出来ないで死んじゃう……死ぬ死ぬ死ぬ――みんな死んじゃう。嫌だ…みんな死んじゃうのは……

「い、いや……だ、だめ――――絶対ダメェェェェェェェーーーーーーーー!!!」

まどかの心から願いが結界内に響いた…誰もが振り向いた瞬間。周りが揺れ始めた…

「地震…いや、これって次元震!?」
「一体どういうことだ…」
「それよりも…アレって!」

周りから現れたのは、灰色のオーロラ。それはクウガやフェイト達を飲み込むように、キャロとさやかとキュゥべえに未だに気絶しているエリオが消えた。

「キュゥべえ!」
「さやかちゃん!?」
「エリオにキャロ!?」

そのまま杏子とフェイトが消え、ＦＦＲから解除されたブレイド・キバ・ファイズも消えて居なくなり、残されたクウガとシグナム、まどかとマミもこの世界から消えた…
ディエンドとジョーカーだけはその場に残された。

「やれやれ…今のは君たちの仕業かい?」
「知らん。むしろ私が聞きたいくらいだ…まぁ、任務は成功した。――の書のプログラム。これより我等は帰還する…お前も帰還しろ」
『――了解した。お前たちが帰還した後、結界を解除したら私も帰還する』

ディエンド達も灰色のオーロラでその場から消えた。結界外では結界を張った女性は、誰にも居ないビルの屋上で呟いた…

「…すまない、烈火の将。お前たちを裏切る私を恨んでも構わない…」

銀髪の女性は烈火の将・シグナムに謝るように消えていった。

〜〜〜〜〜

＜ジョーカーマキシマムドライブ！＞

「「ジョーカーエクストリーム！」」

マキシマムスロットにジョーカーメモリを差し込むことで暴風と共に空中に飛びあがり、急降下しながら途中で右半身と左半身を分離させ、ジョーカー側の半身でカメバズーカドーパントを蹴りつけた。

ミッドチルダの路上裏。ガイアメモリを販売していた男がガイアメモリ『カメバズーカ』メモリで変身ドーパントと戦っていた、仮面ライダーダブル・アギトとギンガ・ナカジマであったが、ダブルのマキシマムドライブによってメモリブレイクに成功し男を拘束した。

「よっし！これで一件落着だな」

『だが、翔太郎…このメモリは今までとは違うメモリだ』

「亀にバズーカってちょっと変ですよね…」

「この世界の生き物の記憶…って訳ないな」

「いませんよ、こんな生物……それで、ショウイチさん。さっきから黙ってどうしたんです？」

「……いや、今のドーパント。もしかしたら――お前たち、気を

つけろ！」
「「「えっ？」」」

ショウイチが気づいた時には遅く…さっきまでとは違う空間になっていた。極彩色のぐるぐる渦巻く不思議な国に迷いこんだような世界だった。

「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！？」
『…ギンガ・ナカジマ。これは一体、何だい？』
「私もこんなの初めてなので、知りません！」
「……来るぞ」
「「「はっ？」」」

3人の前現れたのは…この世界にいないはずの魔女の使い魔達であった……

第7話　「次元震」（後書き）

まず最初に言っておく…まどか達はシンさんに謝れ！心の底から謝れ！（笑）

さて、ディエンドが召喚したライダー達である。リュウガ・サソード・デルタが召喚されたのは『剣には剣。銃には銃、黒には黒』っと言ってましたが、フェイト・シグナムとリュウガ・サソードは原作を見ている人には分かると思いますが、皮肉な組み合わせです。無論、デルタとマミも似たようなもんです。

第8話　「鏡の龍と青春爆発ファイヤー！」（前書き）

はやて「キライ　輝け　ライ○マン　明日に向かって～」
なのは「青春爆発ファイヤー！　青春炸裂ファイヤー！」
スバル「超獣戦隊　ラ○ブマン～！」

ティアナ「何故にカラオケ！？しかもラ○ブマン！」
ヴィータ「最近あたし達出番が無いから、みんなでカラオケだ」
シャマル「しかも妙に古い特撮ソングね」
ザフィーラ『なんでも、作者が最近聞き始めて、お気に入りの特撮ソングの一つらしい』

はやて「ほーんと、最近はフェイトちゃんやシグナムばかり出番あってずるいわ～」
なのは「うんうん。ホントだよねー」
はやて「帰ってきたら、あの二人の乳揉み１０倍の刑やー」
なのは「なら私は…全力全開のスターライト…」

フェイト「やめてぇぇぇー！なのは！！」（涙）
シグナム「暫くは帰りたくないな…」

翔太郎「つーわけで、本編」
ギンガ「始まりまーす」

第8話　「鏡の龍と青春爆発ファイヤー！」

極彩色のぐるぐる渦巻く不思議な世界に入り込んでしまったダブル・アギト・ギンガの三人の前には、ドーパントとは違う異質のモノ達が現れ三人を襲った。

「あーもう！ショウイチさんお願いですから、変なの感じ取らないでくれ！」
「おい！俺のせいか！？俺のせいなのかぁぁぁぁーーーー！！」
「二人とも喧嘩は後です！来ますよ！」

ガラスの靴に人間の足が生えた異質のモノ達は三人を襲うが……

「「おりゃぁ！」」
「ハァァァー！」

トリプルパンチによって砕け散った。

『ガラスの靴に人間の足…実に興味深い、ゾクゾクするね…』
「フィリップ！今は戦いに集中しろぉぉー！」
「こう一々戦うのは面倒だ！ギンガ、ウイングロードで一気にこの結界の…多分、中央にこの結界を張っている奴がいるはずだ！そいつを叩くぞ」
「はい！…って、その中央って何処ですか！」
「俺の言う通りに行ってくれれば良い！」
「分かりました！頼りにしてますよ、ショウイチさん！」

ウイングロード・自身の魔力で魔力の橋を生成する補助魔法。橋は直線的に作るだけでなく、ループするような形で生成することも可

能で飛行魔法が使えない陸戦魔導師であるギンガと妹のスバルにとっては、目標地点までのショートカットなどに使える便利な魔法である。

ギンガを先頭にアギト・ダブルの順で走り、この結界を張っている主がいる中央に辿り着いた。そこに居たの5枚の鏡が宙に浮き、中央の鏡には蛇が映し出しているが両目が無く、その両端の鏡には人間の腕が付いていた。

鏡の魔女…性質【陶酔】。生前は自分の美に溺れていた魔女。

それの魔女を見た三人は思わず…

「何だあの化け物は…」

『どうやら…この結界を張った主のようだね。そして、さっきのはこの化け物の兵隊って思えば良い』

「しかも鏡…まるで、童話の絵本に出てきそうな魔女って感じですね」

「……」

アギトはこの鏡の魔女を見ながら、先ほどから耳元で何かが聞こえていた

『――――くい…この世界が…に…い…どう…て私が…壊す……このせか…憎い…全て…を壊…す』

「（この声…この鏡が言っているのか？しかも聞き間違えか…これは子供の声だ）」

アギトはこの魔女が、ただの化け物とは思えなかった。その時、ギンガが叫ぶようにアギトに言っていた

「ショウイチさん！前見て下さい！前！！」
「…はっ！」

ギンガの呼び声に気付いたが時には、魔女の右腕によって殴り飛ばされ壁に叩きつけられた。そのまま巨大な拳がアギトをもう一度殴ろうとした時…

「あぶねぇ！」

＜ヒート！＞＜メタル！＞

ヒートメタルにハーフチェンジし、専用の棒術武器・メタルシャフトで魔女の攻撃を防ぎ、その隙にギンガがウイングロードを使って、左手に装着されているリボルバーナックルで殴るが

「痛っ…なんて硬さなのよ…」

鏡がダイヤモンド並の固さに左腕を抑えるギンガに、鏡の魔女の左腕が襲われ叩き落とされてしまった。そして、ダブルは相手に？まれて身動きが取れない状態であった。

「翔太郎にフィリップ！」

アギト・ストームFにフォームチェンジし、ストームハルバードで相手の右腕を切り落として、ダブルを助けたが中央の鏡から目の無い蛇が牙を出し二人の頭を噛み砕こうとしていた。

「しまっ！」
「チッ…」

「翔太郎さん！ショウイチさん！！」

誰もが無理と思い諦めていた…その時。

＜アドベント＞

何処からが聞こえる機械音声の響き。魔女の鏡から赤い龍が現れ、蛇に噛み付きダブルとアギトを救った。その龍を見た2人は

「「この龍…何処かで見たような…？」」

そんな考えを浮かべている時に別の方から鉄仮面の戦士が現れて、2人は同時に声を上げた。

「龍騎！？」

「ショウイチさんと一緒に現れて、さっきの龍に変身した奴！」

「アギトは良いけど、そこの半分こ！助けてもらって、言った一言がそれ！？」

「また仮面ライダーが増えた！？」

スーパーショッカーと一緒に戦ったアギト（ショウイチ）はいいが、スーパークライス要塞戦でディケイドとダブルと合流した際、すぐにＦＦＲでリュウキドラグレッダーに変身した為、ダブルはそこしか覚えていなかった。それと、アギトとダブル以外にも仮面ライダーがいた事にギンガは驚き叫んだ。

「…って！今、ドラグレッダーがあの蛇を抑えているんだから、今の内に倒さないと！」

「あ、ああ…すっかり忘れていたぜ」

『僕もさ、翔太郎』
「以下同文だ」
「あんたら…あの蛇の代わりにドラグレッダーがあんたらの頭を噛み砕くぞ。」
「ごめんなさい…後で私の方からちゃんと注意言っておきますから、それはやめて下さい！」

魔女の存在をうっかり忘れていた3人に龍騎は本気で言い、その横で謝るギンガ。
ダブルとアギト…と龍騎はお互い必殺技を放した。

＜メタル！　マキシマムドライブ！＞
＜ファイナルベント＞

「「メタルブランディング！！」」
「「ハァァァァーーー！！」」

ダブルヒートメタルのメタルブランディング。アギトストームフォームのストームキック。龍騎のドラゴンライダーキックがそれぞれ決まり、鏡の魔女の本体でもある蛇が爆散し、結界が解けて元の場所に戻った。

「ったく。何だったんだ、さっきのは」
「さぁな…（さっきの子供の声は、どうやら俺だけにしか聞こえなかったらしいな）それで、お前は…名前は？」
「俺は辰巳シンジって言います！…ところで、ここ何処です？」
「「…ギンガ。後はお前に任せた」」
「ハァ…そう来ると思いました。その前に、お父さんに連絡しますので待ってて下さい」

ギンガが父であり、部隊長のゲンヤに連絡しにいっている間に、翔太郎とショウイチ、シンジはそれぞれ話をしていた。シンジの足元には黒い宝石みたいなものが転がっており、それに気づいたショウイチがそれを触れた時、黒い宝石は消滅と言うより跡形も無く浄化されていった。

～～～～～

???

「あ、あれ…ここは?さっきまで、街中にいたはずなのに…?」

さやかが目を覚ますと、先ほどとは違う場所にいた。何処かの部屋のようで、ベットの上でいる…周りには誰もいない

「って、ここ何処よ!まどかー!マミさーん!みんな何処―?居たら誰が返事をしてよ～!」

そして、部屋に誰かが入ってきた。その入ってきた人物に、さやかは目を丸くしてアワアワと驚き叫んだ。

「恭介ぇぇぇぇーーー!?」

「やぁ、さやか。元気そうだね」

さやかの前に現れたのは、未だに入院生活をしている幼馴染の上条恭介。さやかが驚いているのは、治らない左腕が普通に動き。寝た

きりの為、満足に歩けないのに歩いていたからだ。

「ア、アンタ…一体どうして…？腕治ったの？」

「うん。君が僕のために一生懸命、看護してくれたお陰だよ。ありがとう、さやか」

「うにゃ！？（／／／）」

感謝を込めるかのようにさやかの頭を撫でる恭介に、思わず変な声で叫んだ。耳元まで顔が真っ赤になるさやか。そして、恭介はさやかをベットの上に押し倒した

「ちょ、ちょっと！恭介……何するのよ…？」

「何って…君が考えている事だよ、さやか…君にご褒美」

「バ、バカ！私たちは…まだ、未成年で…そ、そりゃ…私も恭介となら良いかなーなんて思っていて…その」

「素直を可愛いね、さやか……僕はそんな君が好きだよ」

「は、はぅぅぅぅーーー！！」

もう撃沈状態のさやかに、左手で太ももを右手は胸を触る恭介。流石に怒るさやかだと思っていたが…

「で、出来れば初めてだから…優しくして欲しいんだけど…ダメ、かな？」

「そう言われると…無理かな」

恭介はさやかのスカートを脱がし、そして…制服のリボンを解き、ボタンを少しずつ外した。恥らうさやかは顔を茹で蛸のように真っ赤だった。けど、さやかは恭介にあるお願いをした

「けどさ…恭介」

「何かなさやか？」
「やる前にさ……先にキ」
「キ？」
「キスして欲しいなぁ……私のファーストキスを貰ってくれないかな？」
「うん！君のキス、僕が貰うよ……さやか。目を閉じて」
「…うん」

ちゅうううううう
ぶちゅうううううう

「ああ…恭介の舌って、ザラザラして……」

目を閉じ、恭介と念願のキスを成功したさやかであったが、舌がザラザラしていることに違和感を抱き、目を開いた瞬間。

『ぶちゅうううううーーーーー！』

さやかのファーストキスは無残にも――――キバットが奪った。

「い、いやぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーー！！！」

〜〜〜〜〜
その結果。体育座りで泣き止まない、さやかを慰めるエリオとタクミ。

「私の…ひっく…初めてのキスが……うわぁぁぁーん！！」
「落ち着いてさやかちゃん！今のは事故だから！ノーカンだよ！」
「そうです！今のは犬に噛まれたと思えば良いだけです！」
「どうして、誰も止めないのよ！私が……あんな目に遭うの、黙って見てたの！？最低ーーー！」
「い、いや…だって」
「う、うん。止めようとしたんですが…」

何やら言い難そうに顔を赤くする二人にキャロが言った。

「起こそうとしたんですか、さやかさんが『で、出来れば初めてだから…優しくして欲しいんだけど…ダメ、かな？』って言って、身体をクネクネしますから…」
「――――え゛っ？」
「「（／／／）」」

この場にいたのは、ワタル・駄コウモリ・エリオ・キャロとフリードにタクミとさやかとQBだった。最初に目を覚ましたのはタクミで、QB・エリオ・キャロとフリード・ワタルと駄コウモリの順。未だに目を覚まさない、さやかを起こそうと駄コウモリが『よーしっ！ここは目覚めのキスで起こしてやるぜ！』っと、アホ発言が引き金だった。流石に不味いと思い止めようとしたが、上の通りである。

そして――――

『オイオイ、このねーちゃん。とんでもない夢を見てやがるぜ…でも、そんじゃー！キバって…うぉ！？』

さやかの腕がキバットを掴み自らキスをした。

「――――もういっそう死んでやるぅぅぅぅーーーーー！！」

「「うわぁ！さやかちゃん（さん）が狂乱したー！？」」

暴れ狂うさやかをタクミとエリオが必死に止めるが、エリオはさやかのカカト落としを食らい気絶。タクミは思わずファイズに変身して止めようとしたが…

「ファーストキスを奪われた怒りと憎しみの…スーパーナックルぅぅぅぅーーー！！」（※ただの中学生です）

「がはっ――――！？」（※仮面ライダーファイズです）

ファイズの腹にボディブローを放し、変身解除させるほどの大惨事であった…

「駄コウモリ、これはあなたのせいですからね。責任はちゃんと取ってくださいよ」

『全くだよ』

「（返事が無い…ただの潰された空き缶のようだ）」（↑さやかのグーパンで潰された空き缶状態のキバットの成れの果てであった）

さやかが落ち着くまで、ここを一歩も動けずにいた一同であった。

第8話　「鏡の龍と青春爆発ファイヤー！」（後書き）

やっと出せた、シンジこと龍騎！本当に彼をどうやって出すか、迷っていましたが何とか出せました！

駄コウモリ！お前の罪を数えろ！！（怒）
それと、さやかの所でちょっと妄想した人、手を挙げなさい！先生は怒らないわ！（↑京水さん風に）
本当に暴走しました、この回は…

次回は海鳴市の話です。ここに誰が出るか、楽しみ待ってて下さい

第9話　「合流と謝罪」（前書き）

さやか「ｏｒｚ」

士「…で、あいつはどうした？」
タクミ「色々ありまして…」
ワタル「駄コウモリがさやかの初めてを奪ってしまって…」

マミ「（美樹さんの初めてが奪われた…？もしかして！）まだ早いわ美樹さん！！私だってまだ、ワタルくんと――」
杏子「お前は本気で黙っててくれ！」

第9話　「合流と謝罪」

ミッドチルダ路地裏。
ガイアメモリを売っていた場所に、他の局員がやってきて現場検証を始めていた。
ギンガと翔太郎とショウイチは他の場所を調べながら、シンジに説明していた。

「…今の説明で解ってくれましたか？」
「……う、うん。大体ね…それで、ショウイチさんと翔太郎も知らない間に、この世界に来ていた…っと」
「まぁ、俺は相棒のフィリップと一緒に来ていたんだ。それで、偶然にもドーパントに襲われていたギンガを助けた」
「そして、ギンガがドーパントに捕まって動けないダブルを俺が助けた」
「あの時は本当に助かりました…」

そんな４人が話しあっていた時、ギンガはシンジのカメラについて聞いていた

「それで、シンジさん。その腰に掛けているカメラって」
「ん？これ、俺の大事なカメラで仕事道具なんだ」
「仕事ってことは…」

カメラが仕事道具と聞いて、ショウイチと翔太郎はある単語を言った

「パパラッチか」
「パパラッチは止めておけ、色々問題だ」
「誰がパパラッチだぁぁぁーーー！！しかも二人揃って言うなぁぁ

ぁぁー！職業はジャーナリストだぁぁぁーー！！」

パパラッチ発言でキレるシンジを落ち着かせながらギンガは、翔太郎達に説教していた。

「…すまん、つい職業上そっちの方が浮かんだ」

「以下同文です…」

「すまんで済んだら、管理局（私たち）はいりません！」

ギンガの説教に正座で謝る2人。三十路と二十が17歳の少女に説教されるというシュールな光景である…そんな時、別の方から何やら騒ぎ声が聞こえていた。それを聞いた四人は他のドーパントが現れたと思い駆けつけたが…

――仮面ライダーファイズが中学生くらいの少女にボディーブローを食らっていた。

「「「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁぁーーーー！？」」」

「他にも仮面ライダーがいたぁぁぁぁぁーーー！！」

異常な光景に思わず全員ツッコミを入れて、この場を止めに入った。

そして…

「ここって、ミッドチルダなんですか！？」

「そして、スバルさんのお姉さん！？」

やっと、さやかが黙り（ショウイチの尻叩きで黙らせた）お互い話し合った結果、ここがミッドチルダと驚くエリオと、説明してくれた人がスバルの姉と知って驚くキャロだった。ショウイチはエリオ達に聞いていた

「それで…これからどうするんだ、お前たちは？」
「僕とキャロは出来れば一度、機動六課に戻りたいです」
「僕とタクミさんは行く宛てが無いので、その六課にいる士さんの所に行きます。ユウスケやカズマも気になりますが…」
「私も友達が心配ですし…でも、エリオやワタルがその六課って場所に行くなら、私も行きます！」

それぞれ行く場所は一緒。機動六課に行こうとする五人にショウイチは……

「なら…保護者同伴だ。お前ら子供五人だけ、行かせる訳にはいかないからな。」
「俺も一緒に行くぜ。ディケイドがこの世界に来ているんなら、俺も会っておきたいからな」
「俺も一緒に行く！」
「ハァ……なら、私も行きます。八神二佐にも色々連絡したいので、一緒に行きます」
「で、実際の本音は？」
「翔太郎さんとショウイチさんに任せると、余計な問題が増えそうなので…」
「「おい！」」

シンジの冗談な一言に思わず愚痴るギンガに、ツッコミを入れる翔太郎とショウイチであったが、機動六課に向かうエリオ達五人に保護者のショウイチに翔太郎とシンジとギンガも同伴する事になった。

～～～～～

地球　日本・海鳴市
バニングス邸

「本当にビックリしたわよ！急に庭から凄い音がしたから、慌てて行ったらフェイトが倒れているわ、知らない人たちが倒れていたんだから」
「私のところは、シグナムさん達が現れたからビックリしたよ」

金髪のショートカットの女性、アリサ・バニングスと紫のロングヘアーの女性、月村すずか。
二人はなのは・フェイト・はやての１０年前からの大親友である。
同時刻に二人の家の庭に突然、アリサの家にはフェイト・杏子・マミ・カズマ（カズマだけは木に引っ掛かっていた）。すずかの家にはシグナム・まどか・ほむら・ユウスケ（ユウスケ一人だけ犬神家のポーズの状態で発見された）
その時、丁度お互い電話で話してた時だった為、連絡した結果アリサの家で集合していた。

「それで、フェイトはどうするのよ？あたしの方で、なのはやはやてに連絡して送りに来てもらう？」
「うん…出来ればお願いしても良いかな？」
「別に良いわよ。それとあなた達、住む場所が無いんなら暫く家に住みなさいよ。」

住む場所が無いユウスケやまどか達は、アリサの誘いは有難い話だった。
まどかやマミは喜ぶか、杏子はフェイトやアリサとすずかにあるお願いをした。

「あのさ、姉ちゃん達お願いがあるんだけど…この辺で、働ける場所って無い…かな？」
「うーん。探せばあると思うけど、どうしたの？」
「いや…その…やっぱり少しの間とはいえ、お世話になるからさ。少しでも働いて食費代くらいは出さないと悪いかなーなんて」
杏子は恥ずかしそうに言った。そんな杏子のお願いを応えるかのように、三人は…
「やっぱ、あそこしか無いでしょ」
「あそこなら、私達からのお願いなら聞き入れてくれると思うよ」
「なら、私が明日頼んでみるよ。すずかとアリサは明日も大学だし」
「…まぁ、あそこはあんたに任せるわ。」
三人揃って『あそこ』の単語に杏子や他の皆も（？）を浮かべ、ユウスケがそのことを聞いた。
「それで、そのあそこって何処？」
「喫茶『翠屋』なのはのご両親が営業しているお店で、お菓子が…」
「なら私も働かせて下さい！！」
お菓子の名前にマミが異常なまでに反応した。息が荒く、興奮するようにマミはフェイトを威圧していた…
その横でアリサはまどかに小さく聞いていた
「ねぇ、あのマミって子。お菓子好き？」
「お菓子作りが好きなんですが…」
「あの威圧…今まで異常の威圧だわ。」
「つーか。マミの奴、止めなくって良いのか？あの金髪の姉ちゃん

の首を絞めて、ガクガク揺らしているんだけど…」

「お菓子作りしたいんですぅぅぅー！！お願いしますぅぅぅぅぅぅーーーーー！！」

「（返事が無い。意識を失っているようだ）」

「「「フェイト（ちゃん）！？」」」

「テスタロッサ！！」

「もう止めてマミさぁぁぁん！フェイトさんが死んじゃうよぉぉぉーーー！」

「…こうなったら、巴マミを止めるわ」（拳銃を構える）

「どんな止め方だぁぁぁーーー！！命を止めるんじゃなくって、普通に止めろぉぉぉぉーーー！」

マミの異常な威圧でフェイトの首を絞めている為、フェイトは窒息状態であった。ユウスケとカズマとアリサとすずかとシグナムは、必死にマミからフェイトを救おうとしていたが、まどかは泣き叫び。そんな、まどかを泣かすマミの命を止めようとするほむらに、叫びながらツッコム杏子であった。

～～～～～

機動六課――――

エリオとキャロの二人が無事に戻って来た事に喜ぶスバルやティアナであったが、はやてとなのは。それとヴィータは仮面ライダー達・さやかにギンガを集めて、これまでの出来事を聞いていた。

「…なるほど。あの戦いの後、フェイト隊長やシグナム副隊長。ユ

ウスケさんと一緒に違う地球に居たと…」
「…はい」
「（あの紅渡って人が言った通りやな…しかも、ミッド式でもなければベルカ式とは別の魔法…そして、魔女とそこにいるキュゥべえ…）」
「その世界で魔女退治をしている途中に、知らない男が海東と一緒にガジェット共を引き連れて現れた…その戦いの最中に突然、オーロラが現れてお前らはここに飛ばされた…と？」

士の問いに、ワタルやタクミも頷く。士は考えていた。海東がどんな目的があっても、誰にも従わない奴だと…もしあるとしたら、どうしても従わなければいけない理由がある筈だ。

「あのコソ泥の事は今はどうでもいいが、ショウイチやダブルの三人は一体どういうことだ？」
「その説明は私の方でします！」
「あんたは？」
「陸士１０８部隊所属のギンガ・ナカジマ陸曹です！」

その問いにギンガが答えた。その人物に妹のスバルは驚きながら、姉であるギンガに問い詰めた

「ちょっと、ギン姉も関わっているなんてあたし聞いてないよー」
「今から説明するから黙ってて、スバル。…それで、八神二佐。前にお父さん…いえ、ナカジマ陸佐の方から聞いていると思いますが、怪物メモリの事覚えていますよね？」
「ええ、覚えておるよ…」

ギンガの質問にはやては冷静に答えた。今までとは違う真剣な眼差しでギンガを見ていた

「それから私たちの方で調べていましたが、やはり実在していました」
「ッ！？…それで、どうしたん？」
「私の方で販売して居る男を見つけ、ご同行しようとしたんですが…その男はガイアメモリを使って、ドーパントに変身しました」
「ガイアメモリ…（それもあの人が言った通りその2やな。）それで、ドーパントってなんや？聞いた事無い名前やな…その辺も、教えて欲しいわ」
「それは、俺達の方で説明させてもらうぜ。」

はやての質問にギンガに変わって翔太郎とフィリップが代わりに答えた。メモリを使って人が怪物に変身した名前が『ドーパント』そして、ガイアメモリの特徴と危険性について教えていた。

「待て、そのガイアメモリはお前たちの世界の物が、この世界にあるんだ？えっと、ダブルの…」
「左翔太郎だ、ディケイド。確かガイアメモリは俺達の世界の物だ。だが、どうしてこの世界に出回っているのかは俺達も調べている最中だ」
「なるほどな…それと、俺は門矢士。士でいい」
「なら…そのメモリを手に入れ、そのデータを元に製作して街に売っている…って線はどうや？」
「確かにその線は考えているが、その製作して居る場所も現在不明でその組織も不明さ」

行き当たりが詰まる一同に、なのははある質問を翔太郎やフィリップにしていた。

「それなら、そのガイアメモリを売っていた人達には取り調べはし

なかったんですか？」
「色々取り調べはしたんだが、それがな…」
「取調べ中に相手は意識を失い、未だに目覚めない。多分、メモリブレイクされると口封じするように、意識を失う仕掛けがあるらしい」
「そのせいで、俺達は毎回ガイアメモリの販売している連中を捕まえても、振り出しに戻るし」
「毎回毎回、変なドーパントと戦って大変なんですよ…しかも今日は変な結界の中に閉じ込められて、ドーパントとは違う化け物に襲われて…」
「お疲れ、ギン姉」
「私たちの知らない間に頑張っていたんですね…ギンガさん」

ギンガの不満の愚痴に同情するように肩を叩く、スバルとティアナ。しかし、今の会話でワタルが、ギンガに質問した。

「あの、さっき結界に閉じ込められて、中から変な化け物が現れた…って、言ってましたよね？」
「え、ええ。そうよ」
「その結界って、どんな感じでした？」
「えーっと、極彩色でちょっと不思議な国みたいな渦巻く結界で…私達とは違う結界だったわ。それがどうしたの？」

ギンガからの説明で、ワタルは深刻そうに頭を抱えていた。このままだとこの世界も危ないと…そんなワタルの考えを知らずに、さやかがワタルに聞いた

「不味いですね…これ」
「不味いって…ワタル。今のがどうしたのよ？」
「さやか…一応聞きますが、今のギンガさんの説明で何か感じませ

んでしたか？」
「全っ然！」
「即答で答えないでください！あなたって本当にバカですね」
「なによー！私の何処かバカなのよー！！」
「良いですか…僕たちはつい最近まで、戦っていた場所です。極彩色で渦巻く結界に化け物と言えば…」

ワタルの説明で、エリオ・キャロ・タクミが同時に声を揃えた。

「「「魔女の結界！？」」」
「その通り。この世界にも魔女が現れたってことです」
「…へぇ？…えぇぇぇぇーーーー！？」

魔女がこの世界にも現れた…その話にはやては、その事について詳しく聞いた。

「それで、エリオにキャロ。その魔女について詳しく説明してもらって、ええか？」
『なら、僕がエリオたちに代わって説明するよ。八神はやて』
「ほな、頼むわ…キュゥべえ。」

キュゥべえから魔女について説明を聞き、はやてとヴィータと士それぞれ頭を抱えた…

「もし、そんなのが他にもミッドチルダにいるとしたら…」
「それって、かなりヤバくないか？」
「ガジェット・レリック・ガイアメモリに魔女…かなりってもんじゃないぞ…最悪だ。
それで、その魔女はどうやって探すんだ？」
『ソウルジェム。僕と契約した魔法少女は皆持っているアイテムな

んだ。それを使って、魔女を探して退治するんだ。しかし、マミや杏子。それにほむらがいないから探すのは難しいよ』

士からの問いにQBは答えるが、魔女退治のプロであるマミ・杏子・ほむらがいない以上、魔女退治は不可能である。

『それとも、君達が僕と契約して魔法少女になってくれるのなら、魔女は探せるよ』

「悪いけど、こっちはあれこれ、もう10年間も魔法少女やってるわ」

「私もあれこれ、10年やっているから…」

はやてとなのはのツッコミに、後ろでシンジが思わずタクミとエリオに聞いていた。

「…ところで、あの子達、もう10年もやってる…って言ったよね？」

「ええ、言いました」

「それがどうしたんです？」

「いや…あの歳で、魔法”少女”は…」

その一言にはやてはQBを捕まえ、シンジに全力で投げた。全力で投げられたQBが顔面に直撃し、痛がるシンジにはやては心の底から……

「女の子は心がキラキラ輝いていればいつまでだって少女なんやぁぁぁぁぁーーーー！！」

気合が入ったかのように叫えた…その場にいた、スターズ隊の面々とギンガ・仮面ライダー達は唖然するが、さやかはそのセリフに

「――そういう考えがあるなんて…流石、現役魔法少女ですね！」

～～～

深夜の海鳴市・バニングス邸

皆寝静まった後、庭にはマミが星を見上げている時、すぐそばにほむらがやっていた。いつものように、冷たい目線でマミを見ていた。

「…こんな夜中になにかしら？」

「……」

マミはほむらを何かを言おうとするが、中々言い出せずにいた。ほむらは用が無いのなら呼ばないで…言ってその場から去ろうとした時…

「あ、暁美さん。あの時はごめんなさい！」

去ろうとした時にマミは頭を下げてほむらに謝った。ほむらは突然の事に訳が分からなかった。マミは未だに頭を下げたまま…その事にほむらはマミに聞いた

「巴マミ、一体何のことかしら？あなたが私に謝る理由が分からないわ」

「……病院の件よ」

以前…病院にグリーフシードが現れ、その魔女を退治する時に、マ

ミとまどかの前に現れたほむらを魔女退治の邪魔されないように、ほむらをリボンで動けないように拘束した。それでもほむらは「今回の魔女は…今までとは違う！」と言い放すが、マミはそれを無視し、その後のワタルからの忠告も無視して戦った為、お菓子の魔女に危うく殺されるところだった。

「あの時、あなたが忠告してくれたのに私…あなたの事を信用しなかった…。だから、その事であなたに謝りたくって…」

「……あなたは私に謝れば良いと思っているけど…ふさげないで！あなたがあの場で死んでいたら、あの場にいた無関係なまどか達も魔女に殺されそうになっていたのよ！」

「分かっているわ。私が死んでいたら、あの子達も魔女に殺されていた…って。私はあの子達を魔法少女になってもらいたくって、色々カッコつけて、演じていたわ…一人ぼっちの辛さに孤独…寂しさに負けていたわ。私が弱かった…いつでも崩れてもおかしくない状態だったわ…でも、あの子達が魔法少女の素質があると知って、私は嬉しかったわ…もしかしたら、あの子達が魔法少女になれば、もう一人ぼっちじゃなくなる…」

マミは今までの事を話していた。全ては自分の弱さが原因だと…自分のせいで、まどかとさやかは魔女との戦いに巻き込まれた。

「そんな理由で…あなたって人は！」

「あなたが怒る事は分かっているわ。今回の件だって、私と一緒にいたせいであの子達も巻き込まれた…ここにいない美樹さんもきっと、私の事を恨んでいるに違いないわ」

「…ッ！」

ほむらは思わず、マミの胸元に掴んだ。怒った顔でマミを睨み、そ

のまま頬を叩こうとしたが…

「…だから！美樹さんに会えたら、私は鹿目さんと美樹さんの二人に謝るわ！魔法少女の世界に誘い込んだ張本人として償う！もし、ワタル君やフェイトさん達がいなくなっても、私は二度と迷わない。今の私には一人でも戦える勇気がある！だって、一人ぼっちで寂しい思いをしているのは私一人だけじゃないから」

マミは今までとは違う真剣な目つきでほむらに言った。そのマミの顔は迷いが無かった…それに感じたほむらは手を離した。

「あなた……最初に会った時と違って、変わったわね」
「ええ…私はある子と出会ったお陰で、変われたわ…」
「仮面ライダーキバ……ワタルね」
「うん」

ワタルの名前で思わず笑顔で答えるマミにほむらは小さく呟いた

「――――本当に変わったのね…マミさん」

第9話　「合流と謝罪」（後書き）

うーん…眠いです。今回で一部のキャラ達が合流しました。次回はマミ杏が高町家の翠屋でアルバイトします。マミが暴走し、それをツッコム杏子…そして、おでん屋が…

それと今回、駄コウモリの出番が無いは未だに潰された空き缶状態のままだからです。ここで直ぐに復活したら、キバットはアンデッド扱いですよｗ

外伝　第9．5話　「魔女」（前書き）

本編行く前に外伝です。

外伝　第9．5話　「魔女」

？？？

薄暗い部屋でモニターを眺める一人の女性がいた。薄い桃色の髪に黒いドレスを着た２０歳くらいの女性は、そのモニターを見て笑っていた…

「『モヂカラ』『天装術』『アース』『気力』『超古代文明・超力』『バートニックウェーブ』…そして『天空聖者・魔法』どれも調べたい物ばかりね」

モニターに映されていた単語にニヤニヤしていた。その時、部屋に二人の女性が入ってきた。マトイ・メイとシャドウである。二人はその女性に抱きつき、話しかけた

「お姉さま～相変わらず、綺麗な肌ですわね～このマトイがもっと綺麗に……いたっ」

「相変わらずね、あなたの百合スキーは困ったものね……マトイ。次、私の胸をまた掴んだら今度は強く殴るわよ」

「あ～ん。出来れば、今のももっと強く殴って欲しいですわ～！」

マトイの百合スキーに呆れる女性に、そのモニターに書かれている内容にシャドウは？マークを浮かべていた

「ねぇーお姉ちゃん。この『ＪＡＫＱ』って何？」

「『ジャッカー』…とあるサイボーク戦士の名前よ。エネルギーが原子・電気・重力・磁力。今研究中に使えると思って調べているんだけど、ハッキリ言ってダメね」

「研究って、死神のおじいちゃんが直している『要塞』のこと？」

「あっちはこの前、回収したグリーフシードを使うわ。まぁ、あれを使えばあの要塞は、『憎しみ』『怒り』『嘆き』『不安』…そして、『絶望』を撒き散らす魔女に近い存在よ。」

説明をする彼女は嬉しそうに話した。その顔は笑顔で喜ぶように笑っていた。そして、
彼女は手に持っていた石を眺めていた

「お姉さま?その石って何ですの?」
「『キングストーン・月の石』よ。ついこの間、手に入ったの…そして『地の石』の欠片に『海の石』『天の石』」
「月の石って、確か『影月』の物ですよね?一体どうやって採ったのです?」
「簡単よ。瓦礫の中から発見された『影月』の体内のから奪っただけよ」
「わぁーお!お姉さまって、バイオレンスね」
「まぁ、後は海と天の石も似たように奪ったけどね…」

そう言い残し、彼女は部屋から出た。その彼女にマトイは質問した。

「あらん、お姉さまお出かけですの?」
「ええ、ちょっと遠くに行くわ。召喚の準備に」
「準備って、また何か呼ぶのー?」
「前はオルフェ…なんとかを呼んだけど、ここじゃなくって『マギカの世界』に召喚されちゃったのよね。そして、次は魔女をミッドチルダに召喚されちゃうし」
「魔女の場合は私が召喚した訳じゃないわ。あれは次元が歪んでしまった影響で、ミッドに現れただけよ。」

そして、彼女の前に灰色のオーロラが現れた。そのオーロラに映さ

れていたのは海が見える場所だった。

「あなた達も一緒に来るかしら？」

「お姉ちゃんが行くなら私も行くー！」

「私もお姉さまの為なら行きますわ～ねぇ、ワルプルギスのお姉さま…」

ワルプルギルと呼ばれた女性はマトイとシャドウと共に海鳴市の地に降り立った…

――この世界に災いを導く魔女のように

外伝　第9．5話　「魔女」（後書き）

ワルプルギスの前半のセリフですが、本編には絡みません。あのシリーズまで絡んだら、死にます（頭が）石はこれから絡みます。

第１０話　「アルバイトと派遣任務」（前書き）

まどか「まどかと！」
ほむら「……ほむらの」

まどか（メイド服＋犬耳）「メイドでワンワンご奉仕するワン！」
ほむら（同じく）「……ほむーん」
アリサ（犬好き）「ちょっと、ほむら！何恥ずかしそうにしているのよ！」
ほむら「は、恥ずかしいです…アリサさん（／／／）」
アリサ「アンタ！このくらいで、恥ずかしがっていたら魔法少女やってやれないわよ」

ほむら「……」（納得がいかないご様子）
まどか「（ほむらちゃん…あっそうだ！）ほむらちゃん！元気出して一緒にご奉仕しようワン！」（スマイル満開の笑顔）

ほむら「ほむぅぅぅぅぅーーーーーーー！！」（大量の鼻血噴射）
まどか「ほむらちゃん！？」

ユウスケ（執事服）「あれ、誰が洗濯するんだろう…」
カズマ（同じ）「俺ヤダ！」
すずか「本編行きますよー」

第１０話　「アルバイトと派遣任務」

３日後の海鳴市　翠屋

「……」

杏子は黙って皿洗いをしていた。今までとは違い、皿を割らないように洗っていた…しかし、何故黙っているかと言うと……

――体が軽い。こんな幸せな気持ちでお菓子を作るなんて初めて……

――もう何も怖くない……！

――私、独りぼっちじゃないもの！

――巴マミ、心の一句

翠屋のパティシエ兼経理担当の高町桃子（４３歳）と嬉しそうにお菓子を作るマミ。その光景はほのぼのに見えるが…

「（…何が心に一句だぁぁぁーーー！心の一句って言っているけど、声に出すなぁぁーーー！！しかも、一句ところが俳句でもなぁぁぁぁーーーい！！しかもこれ、マミの死亡フラグを再建築しているぅぅぅぅーー！？それと、桃子さんもお菓子作るの早っー！）」

マミはケーキのスポンジが焼きあがり、その瞬きをしている間に盛り付けが終わらせていた。人気メニューのシュークリームは桃子がやっているのだが、シュー皮にクリームを入れる時間が、１０秒で１５個を作り上げる早業に杏子はこの人は化け物か！？と思ってしまう程の早業だった。

「（ハァ…こんなことなら、無理言ってカズマ兄ちゃんやまどかに来てもらえば良かったかな…）」

そのカズマやまどか達はアリサの屋敷にお世話になる為、お屋敷の執事やメイドとして働いていた。

因みに、まどかとほむらが着ているメイド服は昔、王様ゲーム（王様・はやて）の罰ゲームで、なのはとフェイトが小3の時に着た物であるが、アリサやすずかとフェイトはその事に黙っていた。…何故なら、丁度良い胸辺りのサイズが無かった為である。

そんな厨房一人の男性が桃子にオーダーを言ってきた

「桃子さん、3番テーブルにシュークリームとショートケーキを一つずつお願いします」

「ええ、分かったわ。ソウジさん。マミちゃんはケーキの盛り付けの方はお願いね」

「はい！」

「…って、オィィィーーー！ちょっと待て、マミ！それ盛り過ぎだろ！」

「そうかしら？」

「苺ジャムかけ過ぎだろ！これじゃあ、この調子でやってたら材料無くなっちゃうだろ！」

マミ流のケーキの盛り付けに突っ込む杏子。それを見ていたソウジは思わず、マミに言った

「マミちゃん…一つ言って良いか？」

「（ソウジさぁーん！お願い、マミにちゃんと言ってくれー！）」

「苺ジャムも良いが、ブルーベリージャムもイケるぞ」

「（そこかよぉぉぉぉーーーー！！ソウジさん、あんた何ドヤ顔

で言ってるんですかぁぁぁぁーーー！それと桃子さんも納得しない！！）」

こうして、杏子のツッコミ兼アルバイド3日目が終了した

～～～～

機動六課

１０８部隊と協力する形で翔太郎・フィリップ・ショウイチと民間協力するシンジ。

その為、暫くは機動六課の隊舎で留まっていた。そんなある日

「派遣任務ですか？」

「しかも異世界に？」

「うん、決定事項。緊急出動がなければ、二時間後に出発だそうだから、スバル、ティアナ。今の作業が終わったら出動準備しておいてね」

「はい！なのはさん！」

「了解です！」

突然の派遣任務に驚くも、出動準備を始めるスバルとティアナ。そして、デスクワーク作業が遅いスバルに付き添いしている士になのははお願いしていた。

「士さんも派遣任務に付き合ってもらいたいんですが、良いでしょうか？」

「俺は別に良いぞ。たまには外の空気を吸いたいからな。それで、夏海はどうする？」

「私も行きます。士くん一人にしておくと、皆さんが大変そうですから」

「オイ！」
「あははは…それで、士さんの方でワタル君とタクミ君、さやかちゃんにも連絡してもらって良いでしょうか？」
「ワタルとタクミは分かるが、何故さやかまで連れて行くんだ？」
士はワタル達は兎も角、さやかまで連れて行く事に、なのはに聞いた。その質問になのはも困った顔で話した
「それが、八神部隊長からの命令でさやかちゃんも一緒に連れて行って欲しいって言われたんです…」
「あの狸、何を考えているんだ？」
「はやてちゃんの事ですから、ちゃんと訳があると思いますよ…」
「まぁ、あの三人は俺の方で言っておく。翔太郎達はどうするんだ？」
「翔太郎さん達はヴィータ副隊長が連絡しに行ってますから、大丈夫ですよ。」
「分かった。それで、何処で待ち合わせなんだ？」
「屋上のヘリポートだそうです」
「ああ、分かった」
それからワタル、タクミ、さやかにエリオとキャロに説明する士。その説明にキャロは士に質問していた
「レリックかガジェットの出現なんでしょうか？」
「さーな。俺はなのはから頼まれて言っただけだからな。それに、はやて直々にさやかも来て欲しいって言うからな。」
「私もですか？まさか……ついに私の実力を頼る事になったか！？」
『それはねーよ』
『それは無いね』
「二匹揃って言うな！！」

キバットとQBのツッコミに怒るさやかを無視して、士はエリオとキャロにある事を言った

「それと、フェイトとシグナムが戻るまで俺が代理でライトニングの隊長って形になった。気合入れていくぞ！」

「「はい！士さん！」」

「じゃあ、僕たちも準備しようか」

「そうですね。……そこの3バカ、遊んでないで準備してください」

「「3バカじゃない！！」」

『君達のせいで、僕までバカ扱いだよー』

～～～～～

二時間後。ヘリポートにスバル、ティアナ、夏海に翔太郎、フィリップ、ショウイチ、シンジが集まり、それから遅れるように士達がやってきた。

「エリオー！キャロー！」

「スバルさんにティアさん」

「すみません、お待たせしました」

「まだ時間あるわよ。隊長たちもまだ来てないし」

なのはたちが来るまで、ワイワイと話している一同。そして…

「みんなお揃いやねん」

「あれ…八神部隊長にヴィータ副隊長？」

「おう」

「それにシャマル先生？」

「はぁーい」

そこから現れたのは、はやて・ヴィータ・シャマルに

「私もいるですよー！」

リィン？が集まってきた。ザフィーラとシグナムを除いたヴォルケンリッターが集合したのであった。

「ってことは、ここにいる全員で出動？」

「うん。部隊はグリフィスくんが指揮を執って、ザフィーラがしっかり留守を守ってくれる。」

「ザフィーラ来ないんだ…」

「詳細不明とは言え、ロストロギア相手だし使用メンバー全員出撃ってことで」

シンジの問いにはやてが答え、ザフィーラが来ない事に落ち込むタクミ。なのはは、ロストロギア相手って事で全員出撃っと言ったが……翔太郎はある事に気づいた

「つーか、これ多すぎだろ」

「全員あのヘリに入れるとは思えない」

「それに所在不明とは言え、俺達まで来ていいのか？場合によっては、俺もここに残るぞ」

翔太郎にツッコミにフィリップもツッコム。ショウイチも流石にこの多さに待機しようとしたが…

「今回の事件、ショウイチさんの超能力とフィリップ君の地球の本棚の力が必要で…出来れば、お二人の力をお借りして欲しいんですが…やっぱダメです？」

「それに今回は探し物捜しだから、お前らは警察と探偵なんだから手を貸せ。」

はやてが申し訳ないように説明してお願いするが、士はキッパリ言い切った。

「俺は別に良いが、フィリップはどうだ？」
「僕も別に良いよ。別の世界か…興味深いゾクゾクするね」
「ここも別の世界だろ。まぁ、しょうがない……でもな」

翔太郎も軽く承諾し、フィリップは逆に興味津々でＯＫを出した。
ショウイチは仕方なく承諾するが……

「本当に人数オーバーだろ、コレ」
「「「……」」」

結果
バイクを持っている士・翔太郎がヘリを追いかけるように、走る事になった。
それでも人数が多い為、士の後ろにタクミ。翔太郎の後ろにシンジが乗っていた

～～～～～

ヘリ内

「行き先、何処なんですか？」
「第９７管理外世界…現地名称『地球』」
「「はっ！？」」

ティアナからの質問にはやてが答えた。その地球の名前に一同は声が出たが、フィリップはその事に益々興味が沸いた。

「この世界にも、地球があるとは益々興味が沸いてきた…早速検索を…」

「おーい。検索は後にしろ、フィリップ。」

検索しようとするフィリップに、翔太郎の代わりにショウイチは止めた。

それをスルーするようにはやては話を進めた

「その星の小さな島国の小さな町、日本『海鳴市』ロストロギアはそこに出現したそうや」

「地球って、フェイトさんが昔住んでいた…」

「うん。私とはやて隊長はそこの生まれ。」

「そうや」

「あたし達も6年ぐらいは住んでたよな」

「うん。向こうに帰るの久しぶり」

思い出話を語るように話すなのはとはやてにヴィータとシャマル。

そんな時、キャロは地球について調べていた。

「えっと…第97外管理世界…文化レベルB」

「…魔法文化無し。次元移動は無し…って、魔法文化ないの？」

「無いよー私のお父さんも魔力0だし」

「スバルさん、お母さん似なんですよね」

「うん。」

「いや…何でそんな世界からなのはさんや八神部隊長みたいな人がオーバーSランク魔導師が…」

魔法文化無しに驚くティアナにスバルがキッパリ言って、その後にはやてが言った。

「突然変異と言うか…たまたまな感じかな」
「あっ、すみません！」
「ええよ、別に」
「私もはやて隊長も魔法に出会ったのは偶然だし」
「「「へぇー」」」

その事にQBがある事をなのはやはやてに聞いた

『なら、僕がこの世界の地球の人と契約して魔法少女が増えれば、魔法文化レベルも増えるよ！』
「せんでええわ！」
「キュゥべえ…君、本当はサラリーマンじゃないの？」
「あー確かにサラリーマンぽいよねーいつも契約、契約って言うし」
『僕をサラリーマンにしないでくれるかな？エリオとスバル』

そんな談義にショウイチはある事を考えていた…

「（……しかし、さっきから変な胸騒ぎがするな。この先…ヤバイ予感がするのは俺の気のせいか？）…それで、こいつは大丈夫なのか？」
「さやかちゃん大丈夫？」
「あぅぅ……あ、頭が…クラクラする…吐きそう」

初めてヘリに乗った為、ヘリ酔いしてシャマルの膝で横になるさやかであった…

～～～～～

翠屋　休憩中

「つ、疲れた～～～～！」
「はい、お疲れ様杏子ちゃん」
「ど、どうも…ありがとうございます、桃子さん」
「はい、マミちゃん」
「ありがとうございます、美由希さん！」

桃子と美由希から渡されたメロンソーダとシュークリームを貰い、食べ始める杏子とマミ。

「あ～生き返るー」
「相変わらず元気があるね、杏子ちゃんは」
「だって美由希さん、このシュークリームめちゃ美味いんだもん！」
「それは当然さ。母さんの作るシュークリームは世界一だからね」
「もうー士郎さんったら！」

「二人とも…杏子ちゃんとマミちゃんがいるんだから、いい加減に止めたら？」

未だに新婚夫婦の様に仲の良さに、美由希は呆れていた。その横で杏子も半笑いで笑っていたが、未だに無言で座っているマミ。流石に変だと思い、杏子はマミの顔の前で手を振るが、無反応だった。

「……って！マミの奴、またシュークリームの美味しさに笑顔で気を失っているぅぅーー！？おーい、マミ！いい加減に現実から戻って来いぃぃーーー！！死ぬなぁぁぁぁーーー！！」
「またシュークリーム１つで気を失うと、お店が困るから戻ってきてぇぇぇぇぇーーー！！それと、お父さんもお母さんもスルーしないでぇぇぇぇーーー！！」

――体が軽い…こんな幸せな気持ちで美味しいシュークリームを食べられるなんて初めて……
――もう何も怖くない……！
――私、独りぼっちじゃないもの↑マミの心からの本音
――頼むからお前は少し黙ってくれぇぇぇぇーー！！この死亡フラグ製造機ぃぃぃぃーーーー！！↑杏子の心からの本音

そんな時にお店の扉から、材料の買出しから帰って来たソウジだった。

「マスター、ただいま戻ってきました…って、どうしたんだ？」
「ソウジさぁぁぁぁぁん！！大変で変態でぇぇぇぇーー！」
「ん？マミちゃんが桃子さんお手製のシュークリームを食べて、また気を失った…っと？」
「ワン（そう！）」
「いや、毎度の事だけどよく解りますよね！？その会話！」

買出しから戻ってきたソウジが目に入ったのはシュークリームを片手に『我が生涯に一生の悔い無し！』な笑顔で気を失うマミに、慌てすぎて何を言っているか解らないが、助けを求める杏子。それを理解して通訳して話すソウジに、思わずツッコミを入れる美由希であった。

第１０話　「アルバイトと派遣任務」（後書き）

フリーダム姉さんに生まれ変わったマミの暴走に、真面目に働く事にしたのにマミのせいで苦労する杏子。でもそんな杏子が好きです。はい（赤好き）

今回はなのはｓｔｓのｓｓ００１を基に書いてます。その為、暫くはドタバタ話が続きます（マミの暴走的な意味で）

ちなみに

フェイト＝実家に戻り、使い魔のアルフと一緒に義姉のエイミィの子供の子守

シグナム＝フェイトの家に居候（ニートじゃない！）

ユウスケ・カズマ＝アリサのお屋敷で執事やっている

まどか・ほむら＝同じくメイドやっている。（何故か犬耳装備）

士「で、前回の９．５話であんなこと書いたが、本当に出さないんだな？」

作者「最初はサービス的に書いたんだけど…要望があれば、スポット参戦の外伝的な話を書くかも」

なのは「ＶＳスーパー戦隊的な内容かな？」

作者「要望があればの話だけどね」

まどか「要望来たらどうします？」

作者「死ぬ気で書く」

要望があれば書きますが、無かったら書きません。ガオ・ボウケンＶＳスーパー戦隊のようにバラバラのチーム編成で出します。もし要望があれば、チーム編成も書いてください（大体５～６人）

例
ビッグワン
リュウレンジャー
ハリケンブルー
シンケングリーン
黒騎士・ヒュウガ
ゴセイナイト

こんな感じです。
書くんだったら、ビッグワンとリュウレンジャーを出したい

第１１話　「到着！海鳴市～お帰りなさいませー！ご主人様？」（前書き）

杏子（ネコ耳メイド）「メイドレッド！杏子！」
さやか（同じく）「メイドブルー！さやか！」
ほむら（以下同文）「め、メイドブラック…ほむら」
まどか（ｒｙ）「メイドピンク！まどか！」
マミ（ｒ）「メイドイエロー！天火星マミ！」（↑一人だけ名乗りポーズしてる）

「「「メイド戦隊　メイドレンジャー！！」」」

はやて「ちゃう！何で一人だけダイレンジャー！？折角、カクレンジャー風に名乗ってたのに！？」

ショウイチ「…なんで、あんなことをやっているんだ？」
フェイト「はやてが『丁度５人揃っているし、メイド服で戦隊名乗りやー』って言っちゃって…」
カズマ「それにしても、マミちゃんもよく出来たなーあの名乗り」
シンジ「俺もやってみたけど、難しいよ…アレ」
スバル「うん」（やってみたけど無理だった）

ソウジ「……」（１人で天火星の名乗りポーズ）
シグナム「……」（１人で天幻星の名乗りポーズ）
士「……」（天重星ポーズ）
フィリップ「……」（頑張って、天時星）
なのは「♪」（天風星ポーズ）

一同「「「あんた達のせいかぁぁぁぁーーー！？」」」

第１１話　「到着！海鳴市～お帰りなさいませー！ご主人様？」

ヘリ内

皆楽しそうに話している時にシャマルはリィンに小学生位の子供服を見せた。
それを見てリィンは喜ぶようにシャマルにお礼を言った

「はい、リィンちゃんのお洋服！」
「シャマルありがとうですぅ～！」

その服の大きさとリィンの大きさにフォワード組とライダー達が思わずツッコミを入れた

「えっ？リィンさん、その服って…」
「はやてちゃんのちっちゃい頃のお下がりです」
「いや、お下がりって言っても多きさ合わないでしょ」
『おいおい、チビッ子。それ、人間サイズの服だろーどうやって着るんだよ』
「フォワードの皆と仮面ライダーの皆さんには見せた事無かったですね」
「「「ん？」」」
「システムスイッチ！アウトフレームフルサイズ！」

その掛け声と共にリィンは光だし、それを見た一同は驚いた。先ほどまで小人の妖精サイズだったリィンは……

「「「おぉ！？」」」
「一応、これくらいのサイズにもなれるですよ」

「デカっ！？」
「でも、小さいですよ」
『あらあら～中々やるじゃない～リィンちゃん』
『あーこれで、シグナムねーちゃんみたいにボインボインだったら良かったのによ～！今からでも良いから胸の所を大きくしろよー空気よ…あぎゃーーー！』
「あなたは少し黙ってて下さい、キバット。……潰しますよ？」
『（ちょ…潰しながら言わないでくれ…）』

ティアナ、夏海、キバーラが小学生くらいに大きくなった（でも小さい）リィンに感想を言うが、一匹ＫＹ発言するＫＹコウモリを握り潰そうとしているワタルであった。
そんなワタルをスルーするキャロはリィンに色々聞いていた

「普通の女の子のサイズですね」
「向こうの世界にはリィンサイズの人間もふわふわ飛んでいる人間もいねーからな」
「あの、一応ミッドにもいないと思います」
「うん」
「「「いや、俺（僕・私）達の世界にもいないから！」」」

そんなヴィータの説明にティアナとスバルとショウイチ・夏海・ワタルがツッコミを入れて、なのはとシャマルは笑っていたが…はやて一人はあることを考えていた

「（皆ええツッコミやな…今度、六課の新喜劇でも作ってみるか。あっ、ボケが足りないわ）」

……そんな事を考えているはやてであった

「ふーん。大体、エリオやキャロ…ワタルくらいですかね」
「ですね」
「リィン曹長、そのサイズでいた方が便利じゃないんですか？」
「こっちの姿は燃費と魔力効率があんまり良くないんですよーコンパクトサイズで飛んでいる方が楽チンなんです！」
「なるほどー」

それからバイクで追いかけていた士達と合流し、はやて・ヴィータ・シャマルは先に現地入りし居なくなったが、士はある事に気づいた

「なぁ、キバーラ。ひとつ聞いて良いか？」
『なぁに？』
「いや…ヘリで移動するより、お前の力でここまで来れば良かったんじゃないか？」
「「「……あっ」」」

～～～
地球　海鳴市

それから士達は海鳴市に到着し、一同が目に映ったのは、森林にコテージだった。

「はーい到着です！」
「あーやっと着いたー！」
「ハァ…ずーっとバイクに乗っていたから、疲れた…」
「運転する俺の身にもなれ」
『帰りはちゃんと、私の力で送ってあげるから安心しないよ』

妙に元気良くカメラで写真を撮るシンジに、疲れた顔になるタクミにそれを愚痴る士。

「それで、あそこに見えるのコテージって感じに見えるけど」
「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所として、使用を快く居宅して頂いたですよ」
「現地の方？」
「コテージ持ちって…そいつ、どんだけお金持ちなんだ…」
「まぁそこは良いが、良く快く居宅を許してくれたな。いくら、お前の故郷でもそう簡単に異世界の事話せる訳ないだろ」

さやかの質問にリィンが答え、翔太郎は協力者の顔をどんな顔が想像したが、何故が情報屋のサンタちゃんやウォッチャマン…園咲家の園咲琉兵衛の顔が浮かんでいた。
ショウイチはその事になのはに聞いたが、そこに一同の前に一台の車がやって来た。

「あっ自動車？」
「こっちの世界にもあるんだ」
「あるに決まっているでしょ…無かったら、どんだけ文明低いんですか」
「うんうん」

ティアナの素のボケにツッコミを入れるワタルに、それを頷くシンジだった。
そして、車から出てきたのは金髪の女性二人だった。それを見た一同は驚くように叫んだ

「アリサちゃん！…って、フェイトちゃん！？」
「「フェイトさん！？」」

「なのは！それとエリオとキャロとワタルとタクミ！」

久しぶりに再会するなのはとフェイトであったが…アリサがその驚きに、なのはに聞いた

「ちょっと何驚いているのよ、なのは。まるで今まで何も知らなかったように驚いてさ」

「だって、フェイトちゃんがここに居る事知らなかったんだもん！」

「はぁ！？だって、あたしの方ではやてに連絡したわよ」

「えっ！？」

「……はやての事だから内緒にしてたかも」

「あははは…はやてちゃん…次会ったら――――お仕置きかな」

なのはの一言に、一瞬身震いをした一同にフェイトとアリサは心の中で「（はやての命が危ない）」と考えていた。

「まぁ…はやての事は置いといて……それで、そこに居るのがあんた達の教え子に仮面ライダーね」

「ああ。それであんたは誰だ？」

「初めて会ったに相手に言う言葉かしら……」

「紹介するね。私となのは、はやてのお友達で幼馴染の」

「アリサ・バニングス。よろしく！」

「「よろしくおねがいします！」」

「うん。それで、はやて達は？」

「別行動ですぅ。違う転送コードから来るはずなので」

「はやてちゃんなら、すずかちゃんの所にくるかも」

～～～～

一方、月村邸ではやて達もすずかと再会し、色々話をしていた。

「う……急に寒気が」
「大丈夫はやてちゃん？」
「平気平気！（あ…今一瞬、怒ったなのはちゃんの顔が頭に浮かんでしまったわ…）」
「お仕事だから、あんまりゆっくりは出来ないんだよね」
「ん…そうなんよ。無くし物なんやけどね」
「頑張ってね…時間あるようならご飯とか一緒に食べよう」
「きっと！」

そして、すずかとはやてはガレージから車を出しに行き、シャマルとヴィータは入り口の方で待つ事になった。

〜〜〜〜〜
待機所コテージ

「それで…フェイト。お前が居るって事は、ユウスケやカズマも居るって事か？」
「うん。それと、さやか…まどかとマミも一緒だよ」
「本当ですか！それで、まどかとマミさんは！？」
「マミは今あるお店でアルバイト中。まどかとほむらはあのコテージの中だよ」

士の問いにフェイトが答えた。そして、まどかやマミの名前に驚くさやかは、フェイトからのコテージの中に居ると聞き皆より先にコテージの扉を開けた

「おかえりなさいませー！ご主人様！」

「――お、おかえりなさいませ…お嬢様」
「……」
笑顔で出迎える犬耳メイド服を着た親友と恥ずかしそうに言う転校生を見たさやかは、無言で見なかった事にして扉を閉めた
「あ、アハハハハ…私、今変なの見ちゃったかなぁーまどかがメイド服着ているし…しかも転校生も一緒に…気のせいだよね？うん。気のせいだ」
もう一度、意を決して扉を開けるが…
「おかえりなさいませー！ご主人様！」
「――お、おかえりなさいませ…お嬢様」
「……」
――もう一度無言で閉めた。
そして、さやかが言った一言が……
「ウソダドンドコドーン！！」
「「さやかが壊れたぁぁぁぁーー！？」」
「良いから早く入りなさいよ！」
オンドゥル語のさやかにアリサ以外の面々がツッコミを入れて、アリサが怒るようにさっさと扉を開けた。そして、三度目の正直でさやかは…
「お帰りなさいませー！ご主人様！」
「――お、お帰りなさいませ…お嬢様」
「ぷっ……あっははははははーーーーーー！！ちょっ…やっ

ぱ、もう腹筋が……崩壊する」
「さ、さやかちゃん…」
「……」
「それになんでメイド!?もう、お腹が…特に転校生、アンタが一番……うがぁ!」
「うるさい……黙らないと殴るわよ」
「ほむらちゃん…殴ってから言わないでよ」

腹を抱えて笑うさやかにグーパンでさやかを殴るほむら。それをもう諦めるように、ほむらの肩をぽんっと、手を置きながら突っ込むまどかであった。
そんな時、騒がしいと思い顔を出したユウスケとカズマが見たのは、士達の姿だった。

「つ、士に夏海ちゃん!って…それにワタルとショウイチさん!?」
「チーズ!それとワタル!」
「ユウスケー!」

それぞれの再会する一同だったが、タクミがある人物の事を思い出し、フェイトに聞いた

「ところで、フェイトさん。シグナムさんは?」
「…ごめん、実家に置いて来ちゃった」

それから、大体落ち着いたところで各自、自己紹介が終わったところでなのはから今回の任務について説明が始まった。

「さて、今回の任務について簡単に説明するよ。」
「「「「はい!」」」」

映し出されたモニターに海鳴市・市内全域の地図だった。

「捜索地域は此処。海鳴市の市内全域、反応があったのは…此処と、此処と、此処」

「移動してますね」

「そう。誰かが持って移動しているのか、独立で動いているか分からないけど」

「対象ロストロギアの危険性は今の所、確認されてない」

「仮にレリックだったとしても、この世界は魔力保有者が滅多にいないから暴走の危険性がかなり薄いね」

「とは言え、相手はロストロギア。何が起こるか分からないし、場所も市外市。油断せずにしっかり捜索していこう」

「それでは、副隊長達も後で合流してもらうので」

「先行して出発しちゃおう！」

「「「はい！」」」

なのはとフェイトからの説明が終わり。それぞれ離れようとした時、士はフェイトにある事を聞いた

「そう言えばお前、なぜ今回の任務の事知っているんだ？」

「みんなが来る前にはやてから連絡があって、それで任務内容を事前に聞いていたんです」

「成程な…それで、何でシグナムを置いて来たんだ？」

「それは……任務内容の確認に夢中で忘れていました…」

「なら、今すぐあいつを呼べよ。」

「ですよね…」

フェイトはシグナムを念話で呼ぶようにしている間に、はやて・ヴィータもそれぞれの仕事をしていた。そして、まどか・さやか・ほ

むら・カズマの４人は…

「それで、君達はどうするの？」

「私は…その」

「出来る事があれば、手伝うけどさ…」

「私には関係の無いことだわ」

迷うまどかに協力しようと考えているさやかと違って、非協力的な態度を取るほむらだった。そんな態度を取るほむらにさやかは怒りながら、ほむらに食い付いた

「何言ってるのよ、アンタ！アンタだって、魔法少女なんだから一緒に協力するって、気持ちは無いの！？」

「…生憎、私にはそんな気持ちは無いわ。私がここで一緒に居るのは、この様な事態だから居るだけ。それに、私はあの戦いで魔力を消費したままなのよ。あなたがグリーフシードを出してくれるのなら、戦闘の方も考えても良いわよ」

「……ッ！？アンタは……！」

ほむらの話にさやかも分かっていた。ほむらやマミもあの戦いで魔力を消費したままであること。しかも、この世界は魔女がいない世界…当然グリーフシードも手に入らない状態。そこで協力しても、魔力が消費するのであれば見返りも無い。

「もう良い！アンタがここまで薄情な女とは思わなかった！この貧乳メイド！」

「待ってさやかちゃん！」

そう言い出し、さやかはエリオとキャロと共に、まどかも行ってしまった。

カズマは頭を?きながら、ほむらの事を心配するように聞いた

「あのさ、ほむらちゃん。君の気持ちも分かるけど、あの子の気持ちも考えた方が良いよ?」

「……」

「あの子だって、君やまどかちゃんに会えて嬉しかったんだよ。だから…って、聞いてる?」

「――――あの女…人の事また貧乳って言ったわね…自分が少し大きいからって…今度こそ、その命神に返してあげるわ……」

「お願いだから、話し聞いてよ…」

ほむらにとって、一番言ってはいけないことをさやかはまた言ってしまい、その事でほむらはキレていたのだった。

〜〜〜〜〜〜

捜索組1

なのは／スバル／ティアナ／リィン／士／ユウスケ

海鳴市周辺を捜索している時に、シャマルとはやてから連絡が入った

『ロングアーチからスターズとライトニングへ。さっき教会本部から新情報が来ました。

問題のロストロギアの所有者が判明、運搬中に紛失したとの事で事件性は無いそうです』

『本体の性質も逃走のみで攻撃性は無し…ただし、大変に高価な物なので出来れば無傷で捕られて欲しいのこと…まぁ、気抜かずにしっかりやろう』

「「「「了解!」」」」

レリック事件とは無いと知りスバルもティアナ、リィンもホッとす

るように安心していた。そして、日が暮れたので買出ししようと考えていたが、協力者であるアリサやすずかが用意してくれると知り、なのはは手ぶらで帰るのは悪いと思い、携帯であるところに電話した

「あっ、お母さん？なのはです」
「「えっ！？」」
「うん。お仕事で近くまで来てて…そうなの…うん。ホント近く…でね、現場の皆にケーキ差し入れで持って行きたいから…」

なのはが電話した相手が母親と知ったスバル達は小声で、話していた。

「（そ、それは存在はしてて当然なんだけど…）」
「（なのはさんのお母さん…）」
「（どうせ、いい歳の皺だらけのおばさんだろ。大体分かる）」
「「（あー納得）」」

士・スバル・ティアナの失礼な会話に、ユウスケとリィンは二人でヒソヒソ話していた

「（あーきっと、士の事だから桃子さんのことをいい歳の皺だらけのおばさんって、思っているんだろうな…）」
「（きっと、スバルとティアナも同じ事を考えているに違いないですねー）」
「さて、ちょっと寄り道」
「はいですー」
「あの、今お店って…？」
「そうだよ。うち喫茶店なの」
「喫茶・翠屋！おしゃれで美味しいお店ですよー」

なのは達は翠屋に寄ることにした。その時、士はある人物に会うことになろうとは思っても見なかった……

～～～～～

捜索組２
エリオ／キャロ／さやか／まどか／タクミ

捜索中、さやかは未だにほむらに対する怒りが収まらずにいた。

「なんなのよ！あの貧乳！魔法少女で強いからって！」
「あ、あの…さやかさん、少し落ち着いて…」
「落ち着いていられないわよ！あーもう！本当にあの貧乳…イライラする…」
「あのさ、さやかちゃん。もし、同じ理由でマミちゃんも同じように協力を断ったら、君はマミちゃんにも同じ事言える？」
「ッ…そ、それは…」

タクミの言葉にさやかは口が籠もった。マミもあの戦いで、魔力を消費している…もし、マミもほむらと同じ理由で協力を断るかもしれない…それをマミにも同じ事を言えるのかと言われえると、言い返せない

「それは……その…」
「それにさ、ほむらちゃんは君やまどかちゃんを何度も助けているんだよ？それなのに、あんまり酷い事は言わない方が良いよ？」
「う…うん…それはそうなんですが……でも」
「でも？」
「あいつ…嘘をついているように思うんですよ。何て言うか…何かを諦めている様な…」

嘘をついている…その言葉にタクミはまるで自分の事を言われているように思えた。
その時、エリオが申し訳ないように二人の間に入った

「あ、あの…タクミさんとさやかさん。」
「なによ?」
「なに?」
「いえ…その…さやかさんが貧乳って言い過ぎたせいで……その、キャロとまどかさんが」

「どうせ…私も貧乳だよ…中学生になっても、大きくならないもん…私だって大人になればママみたいに胸が大きくなるもん……orz」
「あうぅぅ…私も小さいもん…育ち盛りなんだもん…私も大きくなれば、フェイトさんみたいに大きくなるもん…貧乳じゃないもん…orz」

道端の中で体育座り落ち込むまどかとキャロに、さやかは必死で二人に謝った

「ごめん二人とも!今のはまどかたちの事じゃないから!そのうち大きくなるよ!」
「そのうちって…いつなの?さやかちゃん…」
「そうですよ…少し大きいさやかさんには解りませんよ…」
「大丈夫だって!世の中には小さい胸が好きな人が……あっ」
「「どーせ、私達は小さいもん…」」

「あのタクミさん…僕、キャロにどんな言葉を掛ければいいんでしょうか?」

「何も言ってこない限り、何も言わない方が良いと思うよ？」

「は、はぁ…」

エリオはタクミに困ったように質問し、タクミは自分なりの考えで言った。ちなみに、さやかはまどかとキャロを慰めるのに３０分以上かかったことは言うまでもなかった……

第１１話　「到着！海鳴市～お帰りなさいませー！ご主人様？」（後書き）

最近仕事が忙しく遅れたけど、１１話です。

ドラマＣＤ聴きながら書いているんですが、やっぱ映像が無い分イメージで書くと辛いっス…

本当はソウジが来た理由を書くつもりだったんですが、主にさやかのせいで止めましたー（えっー）

次回でソウジが来た理由とそろそろシリアス書かないと…

Ｐ．Ｓ．スーパー戦隊とのクロスは今も応募してますので、詳しい内容は活動報告にて…

第12話　「変身」（前書き）

まどか「そういえば、今月ってほむらちゃんのねんどろいどとｆｉｇｍａが発売するんだよね」

士「それと、来月はマミのねんどろいど発売だな」

ほむら「（これでｆｉｇｍａ同士とはいえ、まどかと……ウフフフ）」

さやか「わたしのｆｉｇｍａは2月だし楽しみだなー」

杏子「あたしも3月に発売決定しているし、楽しみだよー」

杏さや「「でも…いつになったら、ねんどろいど発売するんだろ…」」

ユウスケ「作者は、ねんどろいどとｆｉｇｍａのほむらちゃんを通常と眼鏡っ子用に2個ずつ買うらしいよ」

シンジ「そして、借金地獄を楽しみなー状態だよ」

第１２話　「変身」

喫茶・翠屋前

母・桃子に電話してから１０分後に翠屋に到着した、なのは達。そして、なのはがお店のドアを開けた瞬間、桃子と再会し喜ぶなのはと桃子。なのはの後ろでは、スバルやティアナ、士も桃子の若さに思わず驚きを隠せなかった。それもその筈４３歳なのだが、知らない人が見たら二十歳くらいに見える。そして、なのはと二人で並べば姉妹にも見えなくもない。
そして、父士郎と姉の美由希もやってきて一家再会に楽しむ中、ユウスケが美由希に杏子とマミの事を聞いていた。

「マミちゃんと杏子ちゃん?あの二人なら、ゴミを捨てに行ってるよ」
「あっ、そうなんだ」

～～～～～

ゴミを捨てに来たマミと杏子は、ゴミを捨てた後ある話をしていた

「ふぅーこれでゴミは全部捨て終わり～っと」
「ええ、そうね。……ところで、佐倉さん」
「んー?なんだよマミ?」
「いえ…あなた変わったわね。私と最初に会ったあなたとは思えないわ」
「……まぁ、お人よしの兄ちゃんのせいって奴かな」
「カズマさんの事?」

「そっ。万引きして、店のおっちゃんに捕まったあたしを盗んだ分の金払って助けてくれたのが最初の出会いだった……普通なら見過ごせば良いのに見知らない相手を助けてくれたんだ…」

「そう……それで魔女退治はどうしてたの？もしかして……」

「いいや。使い魔はカズマ兄ちゃんが相手をして、魔女は二人で戦う。これが最近までのやり方。可笑しいよな…前のあたしはさ、グリーフシード欲しさに見知らない他人が使い魔に喰われるのを待って、魔女に成長したら狩る…そして、グリーフシードを手に入れる……自分が生きる為に他人を犠牲にする…ほんと、なんでこんな馬鹿な事をしていたんだろって…思えてきたんだ」

杏子はしゃがみながら、悔やむような目で自分の両手を見ていた…この両手には洗っても消えない罪が一生残っている…どんなに償おうにも償えない、消えない罪。昔、自分の祈りが家族を壊してしまった事も……

「なぁ…マミ。アンタから見たら、あたしって魔法少女より魔女って思わないか？」

「……いいえ。そう思わないわ…私も最近、罪を作ったわ」

「は？」

「鹿目さんと今はいないけど、美樹さんを魔法少女の世界に誘った馬鹿な女よ」

マミも杏子の隣に座るようにしゃがみながら、語った…人々を魔女から守る正義の魔法少女として他人を救う為なら自分を犠牲にして戦っていた……しかし、本当は臆病で弱虫、一人ぼっちが嫌だった…

「――でね、初めて彼女達とワタル君と出会った時、キュゥべえから彼女達にも魔法少女の素質があると聞いて私は一人ぼっちの孤独に負けた……一緒に戦ってくれる仲間を求めてしまった…」

「マミ……」
「本当なら、彼女達にはこの事を忘れるように…って、言えば良いのに魔法少女体験って言って魔女退治に付き合わせてしまった…。ワタルくんも同じように誘ったわ」

――魔法少女になっても、辛い思いが続く…いつ死ぬかもしれない戦いと解っていて誘った…自分の弱さのせいで、無関係の人を危険な目に遭わせてしまった。

「だから、私も罪があるの…謝って許してくれるか解らないわ。…でも、今は一人でも戦える勇気があるの。例え小さくってもこの胸に勇気が生まれた……運命の鎖を解放してくれた人のお陰でね」
「そっか。……でも、馬鹿だろお前。アンタはまだ全然良いよ…あたしより何倍もマシだ」
「佐倉さん……」

マミの頭に優しく手を乗せて、安心させるように笑った。そして、服のポケットからポッキーを取り出し、マミに差し出した

「食うかい？」
「ええ…頂くわ」
「――なら、俺も貰っても良いかい？」

二人の間にはいつの間にかソウジも入り込んでおり、二人を驚かせていた。

「ソ、ソウジさん!?」
「いつの間に!?」
「すまん。君達の会話を聞いてしまった」
「……どの辺まで？」

「最初から全部さ。それで、魔法少女は一体？」

申し訳ないように謝るソウジに、マミや杏子は自分達が魔法少女である事がバレてしまったが、二人は仕方なく魔法少女の事と魔女の事をソウジに言った。ソウジはその事を考えた

「ふむ……成程」

「信じてもらえます？」

「ああ。そして、君達は別の世界から来たと」

「まぁー別の世界から来たって言われても、信じられないと思うけどね」

「いいや、別の世界から来たって事は信じるよ。何故なら、俺もそうだからね」

「「えっ！？」」

「それに魔法少女って話も信じるよ。まぁ……俺も魔法少女とは違うが、誰がを守る戦士だからね」

「戦士…？」

「そう。まぁ、俺の世界はワームって地球外生命体が人間に擬態して社会に潜伏しているんだ。それで俺はそのワームと戦うマスクドライダー…しかし、一体のワームが俺に擬態し俺はそのワームと戦った後、ある事件が起きたんだ」

「事件？」

「ああ。俺達マスクドライダーにはクロックアップシステムっと言う装置があるんだ」

「クロッコアップ？」

「クロックアップよ、佐倉さん。それで、そのクロックアップって何です？」

「まぁ、目には見えない超高速の特殊移動って思ってくれれば良いよ。しかし、俺のカブトゼクターのクロックアップシステムが暴走し、変身解除が出来ない状態で俺はクロックアップの世界に閉じ込

められてしまった。超高速の為誰も俺の事が見えない…他の人々から不安の存在として怯えられていたんだ」

翠屋で一緒に働いているソウジはいつも笑っている人だったが、この時は真剣で何か寂しげな目で、語っていた。マミも杏子もソウジの気持ちが解っていた、自分達も同じ境遇に近い存在に思えてきた

「それで…ソウジさんは辛くなかったんですか?誰も助けてくれない、誰も気付いてもらえない、誰もソウジさんの言葉が届かないのに一人で孤独になりながらもワームと戦うの……」

「いいや、俺には大事な家族がいる。いつでも帰れる場所があるからな、それにお祖母ちゃんや妹がいる限り俺はいつでも戦える。」

「「（……家族か）」」

「さて…長話になってしまったな。そろそろ戻らないと、桃子さん達が心配されるな」

そう言って、ソウジは先にお店に戻りその後を追うように、マミと杏子も歩き出した。

〜〜〜〜

待機所コテージ

皆捜索している間、フィリップは地球の本棚で機動六課の面々とマミ達について調べていた。

「高町なのは…魔法と出会ったのは、この世界にロストロギア『ジュエルシード』を探しに来たユーノ・スクライアとの出会いが切っ

掛けで魔導師になった――なるほど。さて次、暁美ほむらは…」

フィリップがほむらの事を調べようとした時、突然地球の本棚から強制的に追い出されて、後ろから倒れてしまった。その突然の事でフィリップは驚きを隠せなかった

「何だ今のは…今までこんな事無かった筈だ」

フィリップはもう一度ほむらについて調べようとしたが、同じように追い出されてしまった。強制的に追い出されるなど、よほど厳重なロックが掛けられていないとあり得ない。となると…考えられるのは、「暁美ほむらには何かがある」ということだ。

「――暁美ほむら……彼女は一体？」

考えている時に傍に置いてあったスタッグフォンが鳴り出し、それを取り出して電話に出た。相手は翔太郎でロストロギアの関する定期的連絡で連絡を寄越したのだった

『――フィリップ、俺だ。今3度目に反応があった場所に着いたが、やっぱ手掛かり無しだ。そっちは？』

「今、八神はやてから新情報が来て、どうやら今回はただの運搬中に紛失したとの事で事件性は無いらしい」

『あー分かった。一回俺達もそろそろ戻る。』

「ああ、分かった」

電話が終わったフィリップはもう一度地球の本棚で、今度はフェイト・はやて・エリオの三人にヴィータ達ヴォルケンリッターについて調べてみたが、この面々にも色々ロックが掛かっており、調べるのを断念したのだった

～～～～～

翠屋

ゴミ捨てから戻ってきたソウジ達は見知らぬ女性達にユウスケを見て、マミは声をかけた。

「ユウスケさん！」

「あっ、マミちゃん！丁度良かった、今君に用事が…」

「って、お前はソウジ！？」

「ん？」

マミの隣にいたソウジに驚く士に、無表情で反応するソウジだった。そして、長話になりそうになり、それぞれテーブルに座りながらお互いの事情を話していた。

「成程な…お前の方にもオーロラが現れて、この世界に来ていたと……それで、何でお前は普通でいられるんだ？確か、クロックアップの世界から閉じ込められている筈だ」

「あ、そう言えばそうだ。」

士の問いにユウスケもその事を思い出し、その事について答えたソウジは……

「それは君のお陰さ、士。君が一度、世界を破壊し全てを再生した結果で、クロックアップシステムも直り、俺はクロックアップの世界から解放できた。そのお陰で、もう一度お祖母ちゃんやマユと一緒に暮らせる事が出来た」

「そういう事か…」

士・ユウスケ・ソウジの3人の話に、話が全く解らないなのは達はコーヒーをマミだけ紅茶を飲みながら、マミや杏子にも色々聞いていた

「それで、あなた達の事はフェイトちゃんやさやかちゃんから聞いているよ。初めまして私は高町なのは、よろしくね」

「巴マミです！」

「佐倉杏子です」

「私はティアナ・ランスターよ。で、士さんの話に全く理解出来ずに、頭から煙を出しているのが、同僚のスバル・ナカジマ」

「私はリィンフォース？ですぅ～」

お互い自己紹介したなのはとマミ達に、なのはは姉の美由希にソウジの事を聞いていた

「そういえばお姉ちゃん、ソウジさんっていつから家で働いているの？」

「うーん…確か一ヶ月くらいかな。うちに来てすぐに働いてくれたから」

「――ところでソウジ。お前、オーロラに吸い込まれて何処に出たんだ？」

「んー確か、高町家の道場だったな。丁度、美由希くんが剣の練習中の時に現れてしまって、危うく斬り殺されるところだったなーまぁ、それから事情を話したら士郎さんは、即答で俺を家に居候させてくれてね。それで働いているんだ」

ソウジはのん気に笑っているが、士はなのはに小さく質問していた。最初は冗談交じりで聞いてみたが、なのはと美由希からとんでもな

い発言だった

「（――ソウジは笑っているが、お前の姉ちゃん剣道家か？）」

「（御神流の剣士なんです。でも…）一応聞くけど、お姉ちゃん。その時の練習の時、何使ったの、木刀？竹刀？」

「真剣だよ。確か『神速』の練習中の時」

笑顔で真剣と答える美由希に『あっ、やっぱり』って顔をするなのはとリィン。他は身を少し引いていた。杏子に至っては、『ウソダドンドコドーン！』って叫びそうな顔であった。

「（おい…その神速って何だ？）」

「（通常とは桁違いの速度で動くことが出来るって言ってましたよ。お父さんとお兄ちゃんが）」

「（……おい。お前の一家、本当に人間か？）」

「（ねぇ、ティア。もしかして、なのはさんのお家の人達って凄いのかな？）」

「（知らないわよ！その神速ってやつを使って、しかも真剣を避けるソウジさんも凄いわ）」

「（まぁ…超高速のクロックアップの世界を経験していれば、避けるのは可能だと思うよ……多分）」

「（ウソだ…ウソダドンドコドーン！）」

「（流石だわ…美由希さんにソウジさん！）」

色々ありながらも一同はコテージに戻り、その時ソウジやマミ・杏子も一緒について来た。……しかし、マミと杏子は気付かなかった。近くで、カイゼル髭を生やした、毛玉のような外見をしている魔女の使い魔が見ていたことに…

～～～～～
？？？
使い魔から監視をしていたワルプルギスは、困ったような顔で見て、その横ではマトイは面白そうに見ていた。

「……どうやら、機動六課と仮面ライダー達がここに来ていたとはね。ちょっと、予想外だったかしら」
「あらら～ん。どうしますのお姉さま？今から邪魔者排除で倒しに行きます？」
「いいえ。今は放って置いて良いわ」
「良いんですの？もし、途中で向こうが気付いたら邪魔されますよ？」
「気付いたら気付いたで面白いじゃない。それに、貴女は久しぶりに遊びたくないのかしら？気付いてやって来て、出迎えて遊んであげるの」
「うふふ…お姉さまって、本当に最高で…痛っ！？」
「――私の胸を揉みたかったら、この作戦が成功したらご褒美に夜のお相手になってあげるわよ」
「マジですの！？ハグハグＯＫ！？」
「マジよ」
「や、やったぁぁぁぁ～～～～～！！」

歓声の声をあげるマトイを放っておいて、ワルプルギスはあることを考えていた…
別の場所を監視し、そこに映されている少女の姿を見て……

「（さて……こんな事態でも、貴女は大事な約束を…大事な友達を魔法少女にさせないように彼女を守れるのかしら……暁美ほむら）」

そして映し出されている暁美ほむらを見てたワルプルギスは、そう考えていた。

～～～～～～

コテージから戻ってきた一同は、はやてやアリサ、すずか達が準備をしていた晩御飯をの手伝いをしながら、皆楽しそうにしていた。一人だけ事前におでんを作っていたらしく、それを持って来た。

「いやーまさか、おでんが食べられるのは思っても見なかったわー」
「ええ。おでんを食べるのは久しぶりですね」
「ギガうめぇぇぇーーー！」
「そう言ってもらえると光栄だな。さぁ、まだまだあるから食べてくれ」
「「「「はーい！」」」」

天堂屋自慢のおでんを食べている一同に、さやかとショウイチはあることに気付いた

「ところで、このおでん何故、大根と卵とがんもどきしか無いんだ？」
「出来れば他の具も入れて欲しいかもー」
「……コイツの実家は、三つの具に拘ったおでん屋なんだ…まさかここで作るとは思わなかったが」
「そ、そうなんだ…」
「無断で他の具を入れたら、手加減無しのライダーキックの刑だ」

真顔で言うソウジに一同は一瞬で理解した…この人、本気だ…っと。
それから食べ終わった後、近くの銭湯に行こうとした時…センターが反応し、今回のロストロギアが見つかった。

「やれやれ、食後の運動か…」
「お風呂は運動してからだね」

士となのはに他も納得していたが、はやてとキバットだけは涙を流しながら戦闘準備をしていた。

「（何故あいつら泣いているんだ？）」
「（キバットは予想出来るけど…はやてさんは？）」
「（……多分、キバットと同じだよ）」

『（折角の桃色の桃源郷がぁ～！乙女の熟した果実がぁ～！！ロスト何とかの馬鹿野郎！）』
「（皆の乳を揉むのが楽しみだったのに～ロストロギアの馬鹿ぁー！）」

そんな二人（一人と一匹）の事は放っておいて、シャマルが空から結界を張り、ロストロギアを閉じ込めていた。

「早く終わらせて、乳も…じゃない、お風呂タイムやー！スターズ&ライトニング出動やー！」
「「「はい！」」」
「（はやてちゃん…）」
「（今本音が出たね）」

「「「セットアップー！」」」

スターズとライトニングはそれぞれのデバイスを起動させ、バイアジャケットに包まれ、ロストロギアの元に向かった

「俺達も行くぞ！」
「「「「おー！」」」」

士はディケイドドライバーを、翔太郎もダブルドライバーを取り出し腰に付け、フィリップの腰にも同じようにダブルドライバーが巻かれて、CとJのガイアメモリを構えていた。ユウスケとショウイチはアークルとオルタリングを呼び出し、シンジとカズマもカードデッキとブレイバックルを、ソウジとタクミとワタルも、カブトゼクターをファイズギアとキバットを構えて……

『キバっていくぜー！』
＜Ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ＞

「「「「変身！！」」」」
＜Ｈｅｎｓｈｉｎ＞
＜サイクロン！＞＜ジョーカー！＞
＜Ｃｏｍｐｌｅｔｅ＞
＜Ｔｕｒｎ　Ｕｐ＞
＜ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ・ＤＥＣＡＤＥ＞

響鬼・電王を除く9人のライダーがここに集合し、現れた。
この世界を守るかのように……

第１２話　「変身」（後書き）

次回から久しぶりに戦闘です！

さてさて、ソウジとマミと杏子の三人は元々一人で戦っていた者同士であり、このクロス大戦ではソウジはクロックアップの世界から開放されている設定です。
それでも家族の為に未だにワームと戦い続け、マミも今は一人でも戦える勇気を持ち、そしてソウジの気持ちが理解出来る。
しかし、杏子は二人の気持ちが解るが、自分の罪に迷っている状態です。真面目に働き始めているが、未だにゼロからやり直して良いのか、もう一度自分の為ではなく他人を守れる魔法少女に戻れるのか…っと、迷っている状態。今後の機動六課及びカズマ以外の仮面ライダーとの繋がりで迷いを断ち切る可能性があります。

しかし、最近ドタバタ多かったなぁ……主にキバットとマミのせいで本当は銭湯でエロオとワタルのラッキースケベを書こうとしてたんですが、ここはカットして、アスムが参戦してから書きます。（多分）

第１３話　「任務終了…そして」（前書き）

ユウスケ「いやぁ～久しぶりに戦闘だね」
ワタル「久しぶり過ぎてこの小説、もうドタバタでよくね？って思われていますが、作者頑張りましたよ。（多分）」
ティアナ「そうね…多分頑張ったんじゃない？」
杏子「マミのせいで、あたしの胃がもう…ボトボトさ」
さやか「あんたは頑張ったよ……杏子」

はやて「そんな訳で、戦闘シーンはカットでさっさと銭湯シーンやー！」
キバット『おっぱい！おっぱい！おっぱい！』
はやて「乳揉み！乳揉み！乳揉み！」

なのは・魔王様モード「――はやてちゃん、少し頭冷やそうか……」
ディケイド・激情態「手を貸すぜ…なのは」

第１３話　「任務終了…そして」

海鳴市

一斉に変身した仮面ライダー達にまどか達は唖然としていた。
今まではキバやクウガ、ファイズ、ブレイドで見慣れていたが、一気に９人となるとそれぞれ、違う姿にさやかとマミにいたっては目をキラキラさせていた。

「さて、君達はどうする？」
「遠慮するわ」
「まぁ…行っても良いけどさ、あんまり魔力使いたく無いし…」
「グリーフシードが無いと魔力回復出来ませんからね。マミ達は先にコテージに戻って下さい」
「ええ、そうさせて貰うわ。頑張ってね、ワタル君」
「それじゃ、俺達も行って来る。夏ミカン、こいつらを頼むぞ」
「はい。士君とユウスケも頑張ってきて下さいね」
「うん！」

結界内に入ろうとした時、すずかがダブルに一つ質問していた。ちょっと困った顔だった

「あ、あの…彼起きないんですが、大丈夫なんでしょうか？」

すずかが見ていたのは、先ほどの変身で倒れたフィリップの事を心配し、おどおどしているように、困っていた。

「簡単に言っちゃえば、ダブルに変身する際、フィリップの意識は

俺の所に入るんだ。だから、すまないがフィリップの身体を任せて良いか？」
「は、はい。それなら、車が必要ですね。私が取りに行くから、アリサちゃん達はここで待ってて」
「うん。分かったわ」
そう言い残し、すずかは車を取りにコテージに先に戻りライダー達は結界内に入り消えていった。

～～～～～
結界内

一同が目に入ったのは、ぷよぷよしているスライム形のロストロギアだった。
フォワード達は驚き、キャロは可愛いと言っている。しかし、ライダー達は

「俺、初めてスライムのモンスターを見た」↑カズマ
「うん。俺も」↑ユウスケ
「むしろ、全員同じだろ」↑ショウイチ
「スライムか…ぞくぞくするね」↑フィリップ
「フィリップー！」↑翔太郎
「いいからやるぞー！！」↑士

余裕あるように冗談交じりな会話が出ていた。しかし、あまりにも数の多さにエリオは驚きながら、はやて達に質問していた

「これ、全部本体ですか？」

『危険を感じると複数に分裂してダミー体を増殖する。せやけど、本体は1つや』
『本体を封印すれば、ダミーは全て消えるです！』
『放って置けば、本体から離れたダミー体が街中に広がるからな。空戦チームは広がったダミーを全て回収する。そっちはお前らがやってみろ』
『素早く考えて、素早く動く！』
『練習通りにいける筈だよ』
「「「「はい！」」」」

エリオの質問にはやてとリィンが説明し、なのは、フェイト、ヴィータは空からダミー回収を始め、フォワード達とライダー達も動き始めた。
しかし……

「打撃無効！？」
「斬撃無効です！」
「こっちの火炎と通常魔力弾も効果無し…」
「流石ロストロギア…見た目は可愛いですが、侮れません」
「こうなったら、ドラグレッダー使って全部食べさせる？」
「食わすな食わすな！アレ食べたら、ドラグレッダーの腹が壊すぞ！」
「ダメですからね！回収が目的なんですから！！そんなことやったら、なのはさんが怒ります！」

予想以上にこちら側の攻撃が効かず、龍騎の思いつきにディケイドがツッコミ、ティアナも怒るように言った。
スバルはスバルで、エリオに電気ビリビリ～って言うわ、それに釣られてブレイドも『じゃあ、俺も手伝うよ！』って言ってきた

「それで止まるが分からないし無傷で、って言われているし…ダメージコントロールしずらい攻撃は無し！なので、カズマさんも禁止です！」

「では、君達、少ししゃがんでくれ！キャストオフ！」

＜Ｃａｓｔ　Ｏｆｆ＞＜Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ＞

カブトはマスクドフォームからライダーフォームに2段変身し、マスクドアーマーを飛散させてスライムに直撃させるが、効果は無しだった。

「ん？これでもダメだったか」

「殴っても無理なら、今のでも効かないだろ」

「なら、斬っても撃っても殴ってもダメなら、ドッガハンマーで潰しましょう！跡形も無く」

「あんた達、話聞いてたぁぁぁぁぁーーー！？」

もう…やりたい放題のライダー達にティアナは戦闘より、ツッコミに集中していた。それでも、スバルとエリオとタクミとユウスケにある指示を出して頑張っていた。

「スバルとエリオ、タクミとユウスケさんはこいつらがこれ以上広がらないように止めてて！私とキャロが本体確定させて封印する」

「「了解！」」

「分かった！」

「なら、俺達も協力するぜ！」

＜ルナ！＞＜トリガー！＞

ダブルはＬＴにハーフチェンジし、更にメモリガジェット・スパイ

ダーショックにギジメモリを挿入し、クモ型のライブモードを起動させながら、トリガーマグナムに装着した。

「おりゃー！」

トリガーマグナムから発射されるネット弾がダミースライム達を束縛し、増殖を止めるようにした。ディケイドも一枚のカードを装填した。

＜ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・ＩＬＬＵＳＩＯＮ＞

ディケイドは実体のある分身・ディケイドイリュージョンを発動して、６体の各々が独自の行動をとりつつスライムを抑えていた。

「おい！抑えっている内にさっさと本体を見つけろ！」

「はい！」

ティアナが撃つ魔力弾を避ける動きに、ティアナとキャロはこれが本体と確信していた

「反応が違う？これが本体」

「捕まれます…我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

アルケミックチェーンと呼ばれる鋼鉄の鎖を召喚し、あらかじめ付与しておいた「無機物自動操作」の魔法によって対象を捕縛していた。

しかし、スライムはバイア展開しアルケミックチェーンを崩そうとしていた。その時、スバル・エリオ・ファイズが相手のバイアを壊すために、援護を始めた。

「エリオ！タクミ！アサルトコンビネーション行くよ！」
「はい！スバルさん！」
「僕も！？まぁ、うん、良いよ！」

スバルのリボルバーナックルによる打撃とエリオの雷を纏ったストラーダによる斬撃と同時にファイズはミッションメモリー挿入したファイズショットを手に装着し、ファイズフォンの『ＥＮＴＥＲ』を押すことにより『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』の音声が発せられると共に、フォトンストリームを経由してフォトンブラッドが注入されグランインパクトを発動。それを同時に繰り出した必殺技

「「「グラン・ストライクドライバー！！！」」」

その衝撃で相手のバイアは破壊された。それを続くようにティアナとキャロ、ダブルも封印するように攻撃をした。

「バイア破壊！クロスミラージュ！バレットS！」
「俺達も行くぜ！フィリップ！」
『マキシマムドライブ、行くよ！』

＜トリガーマキシマムドライブ！＞

スパイダーショックを外した状態でトリガーメモリをトリガーマグナムに挿入させ、ダブルＬＴのマキシマムドライブを発動した。その二人の攻撃にキャロは補助魔法のブーストでティアナとダブルの攻撃を封印の力を与えた。

「我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力を」

「「「トリガーシーリングシュートー！！」」」

ティアナの撃った弾丸を中心にダブルＬＴの黄色・青のエネルギー弾を無数囲む様に放され、相手は避ける事も出来ずに直撃し封印された。

「封印成功！」

喜ぶエリオに空から見ていたはやては、動作停止を確認した後シャマルに完全封印を指示始めたが、キャロが自分から完全封印をやりたいと願い始めた。その願いにシャマルやリィンもそれを任せて見ていた。

その離れた場所では、なのはとフェイトは封印と聞いて初めて出会った時の事を思い出していた…

１０年前の出来事、なのははユーノと出会いが魔法との出会いであった…なのは自身も最初は人助けで、ロストロギア・ジュエルシードの封印を始めた。

同じように、フェイトも使い魔のアルフと共にこの地球に散らばったロストロギア・ジュエルシードを回収する為に現れた……全ては愛する母の願いの為に

そのロストロギア・ジュエルシードがきっかけで二人は出会って戦い……

フェイトとちゃんと話し合いたいなのは。もう一度母の笑顔を見たいフェイトは擦れ違うも正面から全力全開でぶつかった…

しかし、フェイトの母はフェイトにある真実を話し、フェイトは何もかも失い絶望した。――――大切で最愛の母に裏切られ、全て壊された…生きる気力を失うも、消える事も無い絆が、最後まで自分

の名前を呼んでくれた少女。
『全てはまだ、始まってもいない…』それを思い出し、フェイトは空を駆けた。
自分の名前を最後まで呼んでくれた少女…なのはと共に空を駆け、どんなに大きな壁があっても乗り越えて見せる。例え小さくも消える事も無い勇気と一緒に…

しかし母と永遠に別れ、罪を背負うも、全ての終わり・本当の始まりが動き出し、
最後はなのはとフェイトはお互いの手を取り合う仲となった……

「…今日の事、後でユーノ君にメールしとこうっと」
「うん」

キャロの封印魔法をはやてが封印は万全と決定し、出張任務が終わりを告げる

――――筈だった

～～～～～～

機動六課とライダー達が結界内で戦っている時の結界の外。車を取りにコテージに戻ってきたすずかの前に一人の女の子が立っていた…

「えーっと、お姉ちゃんが月村すずか？」

「えっ…うん。そうだけど…あなた、迷子？」

「迷子じゃないよーお使いだよ、お姉ちゃんに頼まれて来たんだ」

「お使い？でも……こんな場所――――きゃ！？」

気付いた時にはすずかは、沈んでいた……

自分の足元を見てみると少女の影に飲み込まれる様に沈み、目の前の少女は不気味に笑っていた……『ケラケラ』っと

「な、何…い、いや…た、助け…て」

「お姉ちゃんに頼まれてやっているけど、そうじゃなかったら」

「――――――本当は骨も残さずに食べたいんだ」

「（――助けて…なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん……）」

そう言い残しすずかの姿は消え、少女・シャドウも姿を消した。

誰もいないコテージにオーロラが現れた。そこから出たのは、誰も乗っていない銀色のバイクに恐竜のような小さいロボットだった

～～～～～

それから、すずかが戻ってくるまでまどか達は待っていた。
未だに意識が戻らないフィリップの身体を放って置けないのもあって、動けなかった。
そんな中、マミは一人で考えていた…真剣に悩んでいるような顔で、考えていた。

「……」
「マミさん、どうしたのかな？」
「そんなに悩んで、一体どうしたんです？」
「……不味いわ」

言った一言にほむら以外全員、マミの顔を見た。その顔は魔女と戦っている時と同じ真剣な顔で、まどかはさやかの後ろに隠れるようにし、杏子もソウルジェムを構えていた。
未だに状況が分からないアリサは、マミに聞いた。

「不味いって、一体何がどうしたって言うのよ！」
「不味いんです…！なんで、今まで気付かなかったのかしら……私とした事が！」

その言い方に、ほむら以外の一同は息を呑むように聞いていた
――――そして

「そうよ…何で今まで、変身掛け声を考えなかったのかしら！」

…その一言に全員ズッコケタ

「そうよ！魔法少女なんだから一度は変身掛け声で、変身するのが王道だわ！なのに、今まで必殺技の『ティロ・フィナーレ』の名前しか考えてなかった……あぁ、今すぐ変身掛け声を考えて……いいえ、矢張りここは変身ポーズも一緒に…『この大馬鹿がぁぁぁぁぁーーーーーーーーー！！』シャルロー！？」

杏子の渾身のツッコミ（ライダーキック）にマミに直撃し倒れこむが、すぐに復活し我を思い出した

「ご、ごめんなさい！私、つい…」
「ったく…何やってるんだよ、マミ」
「そうですよ、マミさん！そりゃ…あんな変身シーンを見せられたら、そう考えてしまうのは分かりますけど…」
「うん…そうね。でも、私一人じゃズルイもんね！待ってて、佐倉さんと暁美さん！二人の変身掛け声も私が考えてあげるわ！ついでに変身ポーズも！」
「そう言うもんじゃねぇぇぇぇーーーーー！！」
「何故、私も？」

マミの壮大なフリーダムに絶叫的に叫びながらツッコム杏子。
そんなやり取りに、まどかとさやかは二人揃ってこう言った

「「こんなの私達が知っているマミさんじゃないー！！！」」

っと…

しかし、笑っていられるのはここまでだった……
桜台と呼ばれている場所の真上に大きな魔法陣が突然、空から現れた。

まるで今まで隠して在ったかのように、現れたのだ……

「な、何アレ!?」
「魔法…陣?」
「これって、一体!?」
「ッ……一体全体どうなってるんだ!?」

驚くまどか、さやか、マミ、杏子に対しアリサと夏海は何の事が分からずにいた。

「今度は何なのよ!」
「皆して、どうしたんですか?」
「見えてないんですか!?あの魔法陣が!」
「ん?魔法陣…?」
「一体何のことです?」

?マークを浮かべる二人にマミは見えているのは自分達だけっと、確信した。そして、まどかの肩に乗っているキュゥべえに聞いてみた。

「(キュゥべえ…これはもしかして)」
『(君の考え通りだよ、マミ。見えているのは君達だけで、アレは何かを召喚する魔法陣って所かな)』
「(なら……早く止めないと!)」

マミの考えに杏子も協力し『今回だけよ』っと、言いながらほむらも協力してくれた。

『ちょっと待ちなさいって!あんた達あそこに行くの?』

「ええ。あのまま、放って置いたらこの街がどうなるが分からないんです！」
「そうだよ！もし厄介な物が召喚されたら、桃子さんや士郎さんに美由希姉ちゃんが……」
行こうとする3人にキバーラが止めるもマミと杏子はこの街を心配し、そこで触れ合った人達を守りたいと決めていた。その気持ちにキバーラは呆れながら、3人に言った
『なら…私が少し離れた場所に連れてってあげるわ。それで良い？』
「「本当!?」」
『ええ。』
「ちょっと待って下さい！一体何のことですか、あそこに何があるんですか」
「そうよ！いい加減に説明しなさいよ！」
『夏海ちゃん達は見えてないけど、あそこにデッカイ魔法陣があるの。それで、この子達はそれを止めに行くって訳よ』
「じゃあ…私も行きます！」
『ちょっと、夏海ちゃん!?今の話し聞いてた？』
「聞いてました。それに…士くんにこの子達を頼まれています。ですから、行くって言うなら、私も行きます。」
『もぅ……これで何かあったら、怒られるの私なのよ～』
「ごめんなさい、キバーラ」
『行くわよー』
そう言って、キバーラはオーロラを呼び出し夏海やマミ達魔法少女をあの魔法陣の近くまで連れて行った。
その場に一人だけ残された、アリサは…

「全くもぉー！私だけ置いて行って！――――まぁ、彼がこれじゃ一緒に行こうにも無理よね」

未だに起きないフィリップの身体を心配するアリサだったが、未だに戻ってこない親友のことを思い出した

「そういえば…すずかったら遅いわね。何やっているのかしら？」

そう言いながら携帯電話を取り出した時、アリサの背後に銀髪の女性が立っていた。
笑いながら手を振るように

「はぁい～♪初めまして、アリサ・ローウェルさん」
「バニングスです！……って、貴女は？」
「うーん。内緒♪」
「はぁ？――――――――っ」

女性はアリサの顔に右手を広げた瞬間、アリサは意識を失い、その場で倒れてしまった。
そして、倒れたアリサを抱えながらある事を言った

「う～ん…空で運ぶのも面倒なのよね～私もシャドウちゃんみたいに影で移動したいわ……でも、この子、良いおっぱいじゃない。――少し揉んで良いかしら」

～～～～～

桜台
魔法陣の下には、薄い桃色の髪に黒いドレスを着た女性が不気味に笑っていた。

「夜の一族はもう手に入れた。後は良い素質を持った消耗品が来るまで、待ちましょう……でも、その前に」

彼女が振り向いた時、オーロラが現れた。そこから出てきたのは、夏海とキバーラとマミ・杏子・ほむらにそれと勝手に付いて来た、まどかとさやか。

『到着よ～って、あれ？』
「少し離れた場所って言いませんでしたか？少し所が、近づきですよ」
『そのつもりだったんだけど……変ね』
「って、アレ……？あそこに人が」

夏海の質問にキバーラも困っていたが、さやかが目の前に女性がいることに気付いた

「あら、まさか機動六課と仮面ライダー達が来ると思ったら、先に貴女達が来るとは思っても見なかったわ」
「機動六課と仮面ライダーの事を知っている！？」
「あんた、何者だ！」
「……」

機動六課と仮面ライダーの名前にマミと杏子は女性に食い付き、ほむらも無言で睨み付けながら、見ていた。

「本当は全員揃ってから、名乗りたいけど……貴女達なら先に名乗らせてあげるわ。」

女性はその場にいる夏海達の顔を見て、自らの名前を言った。その名前に夏海とキバーラとさやか以外は驚いた…

「――――――私の名はワルプルギス・K・パンドラ。貴女達、魔法少女と敵対する魔女よ。よろしく…鹿目まどか、暁美ほむら。」

この出会いは何かの運命か悪戯か……まどか、ほむら、ワルプルギスの出会いが世界を大きく変わろうとしていた……

第１３話　「任務終了…そして」（後書き）

アリサ・ローウェルと夜の一族はリリカルなのはの原作『とらいあんぐるハート３』が元ネタであります。ぶっちゃけ、自分は未プレイです（爆）
なので色々調べました。
でもＯＶＡは見ました。高町兄妹強すぎだろ！？

夜の一族はリリカルなのはに無い設定ですが、妙にすずかにはその名残のようにあります。（漫画ではドッチボールでフェイトのジャンプショットを片手で受け止め投げ返し、着地前に撃墜と、思えない超人的身体能力を持ち合わせています）

アリサ・ローウェルとアリサ・バニングスも似ているようで、違う存在。
ディケイドで言うのなら、原典とリイマジと思ってください

ワルプルギス・Ｋ・パンドラは魔女です。でも、外見は普通の人間。本来の魔女は人の姿では無く異物の筈ですが、何故が彼女だけは人間の姿のまま。
…そして彼女の過去には、まどかとほむらの存在があります。

――ですが、折角のシリアスだったのにマミさんのフリーダムのせいで一部ぶち壊しです！それと、マトイ姉さまはハッキリ言っちゃえば、女性版・京水さんですｗ

第１４話　「世界の殺戮者」（前書き）

士「今回の話は残酷な描写ありだ」
ユウスケ「ちょ！？どういう事！？」
ワタル「今回は真面目に書いてたら、ちょっと残酷な描写になったみたいですよ」

なのは「なので、すみませんが残酷な描写が苦手な人は見ないで下さい！」
フェイト「作者も警告タグ入れるべきが迷っていますが、残酷な描写はこの回だけなので入れないらしいです」

第１４話　「世界の殺戮者」

桜台

「――――――私の名はワルプルギス・Ｋ・パンドラ。貴女達、魔法少女と敵対する魔女よ。よろしく…鹿目まどか、暁美ほむら。」

その言葉に夏海とさやか以外、驚きを隠せなかった……。ワルプルギスはその驚く少女達の顔を面白そうに笑っていた。話が分からない夏海がマミに聞いていた

「そのワルプルギスってなんです？」

「ワルプルギスの夜…私達、魔法少女にとって最大の敵……」

「強弩級の大物魔女さ…しかし、アレがワルプルギスかよ」

マミと杏子の説明にまどかとさやか、夏海も息を呑むがほむらだけは否定をした。

「――――貴女…冗談ならふざけないで、貴女がワルプルギスなんかじゃない…一体何者？」

「あら？何故そう思えるのかしら、暁美ほむら。それともワルプルギスを一度見た事あるから、そう言えるのかしら？」

「……答えるつもりは無いわ」

「なら、私も同じよ。」

一発即発の状態でありながら、まどかはワルプルギスに一つ聞いていた

「あ、あの…一つ聞いていいですか」

「何かしら？」
「な、何で…私やほむらちゃんの事知っているんですか…？私、魔法少女じゃないのに」
「そう言えばそうだよ！何で知っているのさ！」
「ウフフフ……ちょっとした因果関係って覚えてもらえば良いわ。それに知っているのは貴女や暁美ほむらだけじゃないわ。美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子。私はね、あなた達5人の事は知っているの……さて、お喋りはここまで。そろそろ始めましょう。最高に面白い殺し合いを…」

笑いながら言う言葉にマミと杏子も一瞬身体が震えた…この相手から出るプレッシャーは普通の人間じゃない。まして、同じ魔法少女でもない……なら
『アレハヒトジャナイ――チニウエタマモノダ』
『トテモキケンナソンザイ』
『ユダンシタラコロサレル』
『――コロサレル』

その言葉が脳内を過ぎり、身を少し引こうとしたが引けない。何故ならこの世界の人達は異世界の自分達を受け入れてくれた。優しく暖かく、自分達を娘の様に接してくれた人達を…守りたい。救えなかった本当の家族の変わりに、今度こそ自分たちの手で守る。

「…それで、佐倉さん。一度聞くけど、グリーフシードは？」
「……無い」
「私も無いわ。それに他の魔法で攻撃は兎も角…ティロフィナーレを使うと……魔力がギリギリね」
「手詰まりか……でも」
「それでも戦いましょう。魔法少女として、この世界を守るために」
「……ああ」

それを決心し、二人は魔法少女の衣装に変身した。しかし、ほむらは既に変身していた。そのまま彼女は拳銃を取り出し、一瞬でワルプルギスの背後に回り拳銃のトリガーを引こうとしていた……

「（貴女が誰だが、知らないけど……消えなさい！）」

ワルプルギスは気付いていない。それを確信しながら、引く――――――筈だった。

引こうとしていたが、引けない……手が震え、恐れるかのようにトリガーが引けない。

「（な、何で……手が震えるの…？）」

その隙にワルプルギスはほむらの右脇に回し蹴りで蹴り飛ばされた。蹴り飛ばされた、ほむらは蹴られた右脇を抑えながらワルプルギスを睨むように見ていた

「ハァ…ハァ…あ、貴女。一体何をした？」

「何って回し蹴りをしただけよ。折角のチャンスを無駄にしたわね…暁美ほむら。それとも『ほむらちゃん』って呼んだほうが良いかしら？」

「ふざけないで！」

もう一度手に持っている銃をワルプルギスに向けて、構えた。今度こそ、撃つ。ただそれだけ……なのに、手が震えて標準がズレてしまい、違う地面を撃ってしまった。

「なんで……」

「ウフフフ……何でかな？それとも人を撃つのが怖い？」

「――ッ！」

「いいえ。貴女は目的の為なら人を撃てるわ。最初は――――となった友達を爆弾で燃えるように、殺した…いえ倒したって言えば良いのかしら。そして、最終的には大事な友達を撃ち殺した……それから、学校のクラスメイトを見殺ししながら大事な友達を守り、そして、白い魔法少女を殺すも守れなかった……ほら、貴女は人を殺せる筈よ。十分穢れた手で私を撃ちなさい…そして、大事な目的の為なら、殺せるものなら私を殺してみなさい――魔法少女・暁美ほむら。」

恐れる事も無く、ほむらに近づいてきた。不気味に『ケラケラ』と笑いながら一歩、また一歩と近づいてくる…そして、まるで自分の全てを見抜かされているかの様にほむらは…

「う…うわぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーー！！！」

叫びながら銃を発砲した。標準で狙わずに、たた恐れるように撃った。

『この女は私の全てを見抜いている』今まで感じなかった恐怖が今になって、感じていた……。でも、ワルプルギスはそんな、ほむらに次々と言った

「でも一番驚いたのは、貴女が本当の自分を隠す為に嘘つきの仮面を被っているのが驚きだわ……知っているのよ、本当の貴女は暗くって弱くって泣き虫で、誰かに守られてもらっている貴女が！今度もこの時間軸で貴女は誰かに守られる、それが貴女の定めなのよ！変えられる事もない運命に縛れる呪いを恨み、そして！」

「うるさい！うるさい！うるさい！！これ以上言うなぁ――！」

「良いのよ、誰かに助けを求めて！『誰が助けて、死にたくない！』

って。巴マミ、佐倉杏子に求める?それとも鹿目まどかに魔法少女になってもらって、助けを求める?」

「言うな!言うな!それ以上言うなぁぁぁぁぁぁーーーー!!がっぁ!?」

「――――はい。捕まれたわ…ほむらちゃん」

気付いた時には拳銃の弾が無くなっており、そしてワルプルギスに首を掴まれていた。

相手は普通の女性のように細い腕にも関わらず、右手でほむらの首を掴んでいた。いつでも、ほむらの首をへし折っても良いくらいの圧力で…

「ほ、ほむらちゃんぁぁぁぁーー!!」

「嘘…でしょ…転校生が?」

「マミ!」

「分かっているわ!夏海さん、二人をお願いします!!」

そのまま二人は駆けつけるように走り、杏子は槍をマミはマスケット銃を構えて、ほむらを助けようとしたが

「――――――行きなさい、〃シャドウ〃〃マトイ〃」

「はーい」

「はぁ〜い」

ワルプルギスの一言に何処からが、声が聞こえた。その時、杏子の腹部に痛みを感じ……突然の出来事に杏子は自分の腹部を見た。そこには、影から黒い何かが自分の腹部を刺さっていた。

「……がぁっ!」

「佐倉さん!」

口から血を吐きその場で倒れこむ杏子にマミは叫んだ。杏子を助けに行こうとした時、誰かに頭を掴まれながら、飛ばされた

「きゃっ!?…い、一体何が…」

マミが目を開けた時には、見知らぬ女性と杏子の近くには自分より小さい女の子が立っていた。女性は笑顔で笑いながら手を振っていた。

「はぁ～い♪初めまして、乳牛の魔法少女ちゃん。」

「乳牛!?」

「さて――お姉さま。早速お遊び初めてよろしいんですの?」

「――ええ。始めて良いわ。でも、ソウルジェムは壊しちゃダメ。でないと遊べなくなっちゃうから……だから、じっくり甚振って遊びなさい」

「「はーい」」

未だにほむらを掴みながら、ワルプルギスは二人に甚振るように指示を出していた。その指示に二人は子供のように笑いながら返事をした。

「うーん。お姉ちゃんのお肉美味しそうだね…食べて良い?」

「――ッ!誰が!!」

手に持っていた槍を振るい払うが、シャドウはそれを避けながら杏子の左腕に噛み付いた。その痛みに杏子は槍で無理矢理シャドウを払い、そのまま後ろに下がった。

息を荒くしながら、杏子は右手で噛まれた左腕を押された。噛まれ

た所は赤くなり、杏子はシャドウを睨みつけた

「て、てめぇ……」

「――――血は甘いねお姉ちゃん…でも、お肉は柔らかい…もっと食べたいな、食べたい…今度は、足を食べても良いー？」

口周りにはトマトケチャップが付いたように、指でなぞりながら口に入れた。

そして、美味しい食べ物を初めて食べたように強請る子供のように

「でも、立った状態で食べるの難しいから……足首切り落としてから、食べよー」

そう言いながら、シャドウは自分の影を複数の骸骨の剣士を作り襲わせた。

杏子は槍を片手で持ちながら、襲ってくる骸骨の剣士を振り払った。

「く、くそぉ……！」

槍を伸縮・湾曲・分割が自在な多節棍のように、襲ってくる剣士達を振り払うが無数に出てくる敵に苦戦し、更に左腕と腹部の傷の痛みが走り苦戦していた。

「がぁ――――――！？」

そして、痛みのせいで動きが鈍った隙に背後にいた敵の剣が杏子の左肩を貫き、更に右の太股を貫かれた。その場で倒れこみ、更に近くにいた骸骨の剣士は手に持っている剣で杏子の背中を刺した…一歩も動けず、息を荒くなりながらシャドウを強く睨みつけた

「ハァ、ハァ……このまま、負けて……たまる、か」
「お姉ちゃんはソウルジェム壊しちゃダメっていうから、両腕と両足だけはじっくり味わって食べちゃおうー」
傷だらけで倒れこむ杏子に骸骨の剣士と共に、シャドウは近づいてきた。手負いの獲物を食らおうとする猛獣の如く……動けず、穢れ始めるソウルジェム…杏子は何も出来ないまま終わろうとしていた
～～～～～
「はぁ、はぁ――――」
「う～ん、もうちょっと楽しませてちょうだい～」
マミは連続で使い回すようにマスケット銃で、マトイに狙うも牙状の槍で薙ぎ払い押していた。杏子と違いスピードでは無くパワー系で、更にマミの攻撃を直撃しても怯むことは無い
「（このままだと、マズイわ…相手のペースで押されている……それに、佐倉さんと暁美さんを助けないと）」
「余所見していると危ないわよー！乳デカちゃん」
「胸は関係ありま――しまっ！？」
マトイの左腕は一瞬にザリガニのハサミに変わり、それがマミの腹部を突き刺さった。
マミは口から血を吐き、更にマトイはマミの右の掌に猪の牙みたいな白く尖った物を突き刺した

「あぁぁぁぁぁぁーーーーーー！！」
「いい響きね…お姉さん、ゾクゾクしちゃう…なら、もっと良い泣き声をだしてぇぇぇーー！！」

倒れこむマミを蹴ったり踏んだりするマトイ。そのまま、牙状の槍でマミの背中を軽く切り刻むように切っていた。

「あぁぁぁぁーーーー！！」
「そう……もっと、もっとよ！貴女の泣き叫ぶ声が素敵！私をもっと興奮させて！」

一方的な暴力の如く、マミの衣装は背中から真っ赤に染まった。身体中に伝わる傷の痛みがマミを襲い、立ち上がることも動くことも出来ない…だが、マミは……

「（怖くない……もう、怖くない……ここで諦めたら、あの子達を守れなくなっちゃう…でも――――）」

そう願い、マミの意識はもう失いかけていた……杏子と同じように魔力を穢れ始めたソウルジェム。そして、もうすぐ自分の命が消える事に…

～～～～～～

圧倒的やられるほむら達にその場に残された夏海はキバーラにお願いした。

「キバーラ！お願いがあります！私ともう一度変身させて下さい！」
『ちょっ！？本気なの夏海ちゃん！』
「はい！今は士くんやなのはさんが居ない以上、私が守らないと！」
『う…』
「だから、あの子たちを助けたいんです！お願いです、キバーラ」
『いいわ…でも、あの子達を助けたら、直ぐに離脱するわよ』
「はい！」

夏海はキバーラを持ち、構えた。

「変身！」
『か～ぷっ♪』

その掛け声と共に夏海はキバに酷似した仮面ライダー。仮面ライダーキバーラに変身した。

キバーラサーベルを構えるキバーラ。そして、ほむら・マミ・杏子を救おうと立ち上がった。そんな中、まどかはキバーラにお願いをした

「な、夏海さん！お願いです…マミさんと杏子ちゃんを…ほむらちゃんを助けて下さい！」
「私たち、悔しいけど何も出来ない……だから、お願いします！マミさん達を助けて下さい！」
「はい――――」

3人を助けるためにキバーラは駆けた。しかし、未だにほむらを掴んでいる状態でワルプルギスは、キバーラを見ていた

「そういえば、貴女がいた事を忘れていたわ……なら、貴女の相手は」

そう言って、ワルプルギスは左手を上げた。上げた瞬間、オーロラが現れ――――そこから出たのは

「あれは大ショッカーの!?」

魔化魍・オルフェノク・ファンガイア・ワームといった、各ライダーの世界に怪人達だった。複数のバケネコ（子）とサナギ体にロングホーンオルフェノク・マンティスファンガイアがキバーラを襲い掛かってきた。

「こんな時に…」

キバーラサーベルを振るいサナギ体とバケネコを倒すも、ロングホーンオルフェノクとマンティスファンガイアの攻撃により、キバーラは押されていた

～～～～～

キバーラが戦っている怪人達を目の辺りに、まどかとさやかはたた動けずにいた。
魔女とは違う異物の存在……あんな、化け物が目の前にいる恐怖に怯えていた

「な、何なのよ……あの化け物達は！それに、あの灰色の怪物って、前に見なかった!?」

「う、うん…見た事あるけど……あ、あれも魔女だよね、キュゥべえ!?」

『いいや、あれは全て魔女じゃないよ。全く別の生命体だ（いや、むしろ…僕には好都合かな…）』

QBはあることを考えていた……この危機を脱出出来る方法を思いつき、まどかとさやかに提案出した

『二人とも!今すぐ、僕と契約するんだ!』

「「えっ?」」

『僕と契約しれば、マミと杏子とほむら、それに光夏海を助けられる!今すぐ契約するんだ!』

契約――――その言葉に二人は考えていた…何かをお願いし、自分が魔法少女となって皆を助けられる…しかし

「で、でも……キュゥべえ、急に言われても……」

「ちょっと待って…」

『でないと、彼女たちは殺される!そして、次に殺されるのは君達だよ!だったら、今すぐ僕と契約して!』

QBの言っている事に、二人も分かっている……その時、まどかは偶然にもほむらの顔を見ていた

「あ――――がぁ――――」

苦しそうに目から大粒の涙を流して、まどかに助けを求めるように手を差し伸べるように……そのほむらの顔を見て、まどかは決めた。友達を助けたい…守られているのは嫌だ。なら、自分の力で皆を助けたい…そして、まどかはQBに言った

「キュゥべえ！私、まほ――――」
「まどか後ろ！」

そう言おうとした時、いつの間にワルプルギスはまどかの背後に立っていた。ワルプルギスの目は、まどかを見ていた……そして

「きゃぁー！？」

まどかの腹部を力いっぱい蹴った。まるで、契約させないように邪魔をした。腹部を蹴られ、仰向けで倒れるまどかにワルプルギスは、まどかの腹部を踏んだ

「あぁぁぁぁぁぁーーーーー！！」

足でまどかを踏み、右手には未だにほむらを掴まれていた。そんな、ワルプルギスはまどかに言った

「鹿目まどか……貴女、契約の意味知っているかしら？」
「い、痛…あああああああーーーーー！！」
「確かに貴女が契約して、魔法少女になればこの危機を変えられる…でも、その代償にこの世界を壊す。意味分かるかしら？何かを得るには何かを捨てる…貴女は友達を守る為にこの世界を壊す破壊者になるのよ。それを望むのなら、遠慮はいらないわ。」

そう言って足を離すが、まどかは踏まれていた場所を押さえながら、聞いた

「い、一体な、何の事です……私が破壊者…？」
「ええ、貴女は破壊者よ……ディケイド以上の破壊者。自覚は無い

と思うけど、貴女は自分の世界でやってはいけない事をやったのよ…」

「やってはいけない事……？」

「ジョーカーとディエンドの時よ。貴女、恐怖のあまり自分の力で次元の壁を壊し、本来の世界の秩序を壊してしまったの。だから、あの時次元震が発生し、世界をつなぐ橋が貴女達をこの世界を送ってしまった。」

その言葉にまどかは理解した。あの時のオーロラは偶然じゃない。自分がやってしまったって事に――そして、あれが自分の力の一部なら、魔法少女になったら……

「――世界ごと壊しちゃう」

「――そう」

そう思い、震えた。自分にも魔法少女の素質がある…そして、自分も魔法少女になって困っている人たちを助けられると思っていた。そして、今自分の力に恐怖した……

「――そうよ。貴女の力で皆を助けても、結局大事な家族や友達を殺す。いえ、全世界の生命体全てを無に出来る。ほら、凄いでしょ…それなら私を殺せる。私だけじゃないわ、シャドウやマトイも殺せる。貴女は全宇宙の破壊者…いいえ、生きている者を全て皆殺しに出来る殺戮者よ。世界の殺戮者・鹿目まどか。最高で素敵な名前じゃない」

殺戮者……その言葉にまどかは何も言えずに、震え涙が止まらない。殺戮者――殺戮――サツリクシャ――サツリク…全ての人達を殺す殺戮者――

世界の殺戮者・鹿目まどか

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！！」

その事にまどかは恐怖と共に悲鳴を上げた。その悲鳴は空まで響いた……

第１４話　「世界の殺戮者」（後書き）

……さて、本当にやっちゃったな…

次回は残酷な描写にしません。そして、まどか達は助かるのか！？
機動六課と仮面ライダー達は間に合うのか！？

コメント及びポイントも下さい…

第１５話　「闇を切り裂く者達」（前書き）

ユウスケ「うーん……」
カズマ「どうしたのユウスケ？変に悩んで」
ユウスケ「うーん…今更言うけどさ、シグナムさんって何処行ったの？」
一同「「「えっ！？」」」

士「フェイト、お前連絡したんだろな？」
フェイト「う、うん。したんだけど…おかしいな？」
ヴィータ「ここでついに、ニート侍発動か？」
シャマル「それ、シグナムが聞いたら怒るわよ」
はやて「もし、そうだったら乳揉みの刑やな！」

第１５話　「闇を切り裂く者達」

――――こんな筈じゃなかった…最初は軽い気持ちでついて来たのに。なのに、今はイヤだ…今すぐ逃げ出したい。こんな気が狂いそうな場所早く逃げたい…

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！！！！」

魔女と名乗る女性の人が何かを言い、そして親友が泣き叫んでいた。その親友の顔は泣き狂い、心が壊れそうな悲鳴が響いた…

「ま、まどか……」

私、美樹さやかは親友・鹿目まどかの元に行こうとしたが……

「な、なんで動けないのよ…ど、何処も怪我して無いのに…何でだよ」

動きたくっても動けない。身体が未だに震え、動けない…怖いから？ううん、怖くない。怖くないんだ…だから、私があの子を守らないと…

「――――――だから、私が…う、動きなさいよ！動いてよ！！」

私は自分の身体に言い聞かせた。それでも、足が竦み動けない…嫌だ。動いてよ、ここで動けなかったら……私より小さい女の子が影で骸骨みたいな化け物を作り、そして赤い子を剣で刺して周りを赤く染まった。マミさんも年上のお姉さんに未だにやられている…キバに似た仮面ライダーに変身した夏海さんは、魔女じゃない怪物

と戦っている。

分かっている筈だ。マミさん達が殺されたら、次に殺されるのは私だ

――――――コロサレル。コロサレル・コロサレル・コロサレル。

マチガイナク、コロサレル。

私は嫌だ。こんな所で死ぬのは嫌だ、あいつの顔を見えずに死ぬのは嫌だ……

QBと契約して、このピンチを変える……でも、口も未だに震えている。

――――契約して、魔法少女になって戦う?戦って勝てるの?あの化け物みたいな人達と?

…ごめんなさい、今から本当の事言いますから……身体を自由にさせて下さい――――

コワイコワイコワイコワイコワイ……

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない……

――――――誰が助けて、死にたくないよ…

～～～～～～

泣き叫ぶ友達……私は助けたい。でも…今の私は動けない…この女が私の首を放さない限り…

「ウフフ…良い泣き声ね。そう思うでしょ、ほむらちゃん？」

この女が、まどかの心を傷付けた…殺したい……この女を今すぐ殺したい。

この距離ならもう一度撃つ…この女の頭を撃ち抜く。

そして、左腕に装備されている円盤型のシールドから、もう一つの拳銃を取り出し撃つが――――

「何度撃っても無理よ。貴女は私を撃つことが出来ない……」

こんな近くなのに外した。女…ワルプルギスは驚くことも無く、未だに平然としていた。

こんな事一度も無かった……なんで？なんで、私は……

「どう？このまま、首を折られて死にたい？ああ、安らかに逝けるように、――――を砕いてあげるわ。それとも、この時間軸から逃げるかしら？」

どうして、この女は知っているの…？なんで私の事を知っているの…？こんなところで死にたくない…私は、あの約束を守りたい……あの子との約束を……

そう思った時、ワルプルギスは手を放した。

「がっ……はぁ、はぁ……」

「今回は特別よ、行きなさい。心配なんでしょ、鹿目まどかが？」

「――――ッ！」

ほむらはワルプルギスの事を放って置いて、直ぐにまどかの元に行った。そんな横目で、ワルプルギスはこう呟いた

「――――なんで貴女は、未だにあの約束を守っているの…なんで、約束を破ろうとしないの――――――ほむら」

～～～～～

嫌だ嫌だ嫌だ…破壊者なんて嫌だ！私はごく平凡の中学生なんだよ…なんで、私が――――――震えて動けない。立てない……嫌だよ、破壊者は嫌だ殺戮者は嫌だよ…私が何したの、私が何か悪い事した……今まで悪いことした事無いのに…

「――――か！――――どか！」

誰かが呼んでいる？――――誰？誰なの？

「――――――まどか！」

「ほ、ほむらちゃ…ん…？」

「……大丈夫だから…貴女は私が守るから…だから、貴女は泣かないで…お願い、まどか」

「ほ、ほむら……ちゃん」

ほむらは安心させるように、抱き締めた。暖かい…ほむらちゃんって、こんなに暖かいんだ……もう安心出来る…そう思い、まどかも少し安心した

「――――でも、もうここで終わりにしてあげる……消えなさい。まどか、ほむら」

ワルプルギスの左手には黒い弓を、右手には魔力で作った矢を構えていた。その狙いはまどかとほむらだった。しかし二人は気付いていない

「（――――バイバイ、ほむらちゃん）」

そして、放された――

――――――が、空から紫色の光が降ってきた。

放たれた矢に向けて、光は向かっていた……その時、まどかとほむらはワルプルギスが撃った矢に気付いた。――――――しかし

「――――――紫電、一閃!!」

ワルプルギスが放った矢は、一人の女性によって防がれた。その女性には炎を纏った剣……レヴァンティンを構えていた。ピンク色の髪のポニーテイルの女性……

それの女性の顔を見て、まどかは叫んだ。

「シグナムさん!?」
「すまん。遅くなった」

ヴォルケンリッターの将であり、機動六課のライトニング隊の副隊長。烈火の将・剣の騎士シグナム、戦場に立つ。

「まさか、貴女が居たとはね……烈火の将」
「何者かは知らんが、仲間を傷付けた罪は重いぞ」
「そう……でも、悪いけど。貴女が来ても巴マミと佐倉杏子はもう助からないわ……死あるのみ」
「そ、そんな……」

マミと杏子が助からないと聞き、まどかは震えて顔は青くなった。しかし、シグナムは未だに余裕ある顔で言った

「悪いが、その思惑は崩させてもらう」
「なに?」

～～～～～～

身体が動かない…そりゃそうだ、身体中に刺されて動ける筈が無い……ああ、あたし。こんなチビに殺されるのか……しけた人生だったなぁ…こんな事なら、もっと皆と居たかったな…
けど、この骸骨達はきっと、あたしが犠牲にしてきた人達が化けて来たんだ…これが、あたしに対する罪と罰なんだ……だから、あたしは認めるよ。ごめんなさい…本当にごめんなさい――――でも、

最後だからこれだけは言わせてよ、神様

――――あたし、もう一度楽しい夢が見たかった…なぁ

「それじゃ…いただきまーす！」

チビ…シャドウは杏子の頭を噛み砕こうとした時、雷のように何かが走り、杏子を抱えた。先ほどまで居た杏子が消え、周りを見渡すシャドウだった。そして…

「あ、あれ…あたしは？」

「良かった！無事だったんですね！」

「お前は…確か……？」

「ライトニング隊のエリオ・モンディアルです」

「あ、あははは……これって夢じゃないよね…あたし、まだ生きているんだよね？」

「はい。貴女は生きています。だから、安心してください！」

「うっ…そうだよ…でなかったら、涙が止まらないもん…」

杏子をお姫様抱っこで抱えているエリオだったが……

「でもさ…エリオ、一つ言って良い？」

「ん？なんです？」

「頼むからさ…その手退けてくれないかな、あたしの胸触っているんだけど……」

「う、うわぁぁぁー！！す、すみません！！」

驚くと同時にエリオは、お姫様抱っこで抱えていた杏子を落とした。

背中にも傷がある為、ある意味止めを刺すように杏子はもがき苦しんだ。

「ぎゃぁぁぁーーーーー！！お、お前ぇぇぇーーーー！！何、止めを刺すんだぁぁぁーーーー！！今の超痛かったぁぁぁぁーー！！」

「す、すみませんーーーーーー！！！」

傷だらけなのに叫ぶ杏子に、あわあわとしながら謝るエリオ。そんな二人にシャドウは骸骨の剣士を向かわせたが、白竜の炎によって、エリオごと燃やした

「フリードリヒ、ブラストレイ！それと、エリオ君にも！」

「ちょっとキャロ！？僕なんかしたぁぁぁーーーーー！？熱！？」

「熱！？むしろこっちにも火がぁぁぁぁーーーー！！お前ら、本気で止め刺すんじゃねぇぇぇーーーー！！」

先ほどまでは周りには血が染まっていたが今度は炎によって燃え、まどかの悲鳴から杏子の絶叫が響いた事になっていた……そして

「ウェェェイー！」

巨大な翼「　オリハルコンウイング　」を展開させ、空中を自由に舞う・仮面ライダー剣
ジャックフォーム。ブレイドＪＦは強化された醒剣ブレイラウザーでシャドウに斬りかかっていた。

「お兄ちゃんも遊んでくれるのー？」

「俺は女の子には手を出さないけど、今回だけは許さない！」

「けど、遊んでくれるんでしょ？遊ぼうー！」

シャドウは影で無数のミラーモンスター・ゲルニュートを作り出すが、ブレイドＪＦの背後にいた龍騎のストライクベントによって燃やされた。

「よっし！」

「ナイスアシスタント！シンジ！」

「続けて、アルケミックチェーン！」

キャロの錬鉄召喚魔法・アトミックチェーンによって、シャドウは鋼鉄の鎖に拘束された。

～～～～～～～

もう意識が薄れていく……もう、これで最後なんだ…これで、お父さんやお母さんの所に逝けるんだ……それで、昔みたいに一緒に暮らせる……

でも、何か忘れている……そうだ、まだ鹿目さんと美樹さんに謝ってない……私のせいで、こんな事になったんだ……だから、ごめんなさい。お父さん、お母さん…私、まだそちらには逝けない――

そして、まだ死ねない！

「――それじゃ～止めね」

牙状の槍を振り翳そうとした時、マトイの背後から獣の雄叫びが響いた。青い狼は疾風の如く走り、魔獣剣ガルルセイバーでマトイを

切り裂いた。

「くっ！？」

『バッシャーマグナム！』

青い狼から緑色の半魚人に変わり、左手の持っていたガルルセイバーは消えて、変わりに右手には魔海銃バッシャーマグナムを構えた。その銃口先には、先程切り裂いた傷口にゼロ距離の水流弾を発射した。

「がぁ――――――！？」

その水流弾に吹き飛ばされ、緑の半魚人の魔皇力により大気中の酸素と水素から強制的にアクアフィールドを生成し、疑似水中環境を作り出した。その水中環境で水中戦を繰り広げ、水流弾によって宙に舞うマトイに緑の半魚人は…

『ドッガーハンマー！』

緑の半魚人は紫のフランケンシュタインに姿を変えた。右手に持っていたバッシャーマグナムから魔鉄槌ドッガハンマーに変わり、それを両手で構え…相手に向けて振り翳した。

――その一撃で地面にクレーターが出来るほどの力だった。その一撃で、相手は動かなかった……それを見ながら、紫のフランケンシュタインは真紅のコウモリ…仮面ライダーキバ・キバフォームに戻った。

それの一部始終を見ていた、シャマルとヴィータは二人揃って言った一言

「「容赦無し（かよ）（ね）……」」

そして、キバは相手を確認せず急いでマミの下に走った。

「マミ！大丈――――って、マミ？」

「ごめんなさい…ワタルくん…ほんの少しだけで良いの…このまま、こうさせて…お願い」

マミはキバに抱きついた。顔は下を向いている為見えないが、その願いと離さない様に抱きしめている為、キバは離そうとしながった。

「なぁーシャマル、何であたしの目を隠すんだよ？」

「そ、それは、ヴィータちゃんには刺激が強いから！子供が見ちゃ駄目なの！」

「あたしは子供じゃぁぇぇぇーーー！！」

ヴィータの目を隠し、ちゃっかり見ているシャマルであったが…誰も気付いていなかった……丁度マミがキバに抱きしている時、そのマミの胸の下にキバットが埋もれていたことに

『マミの怪しからんおっぱい…た、たまんねぇ……あぁ、ぷにぷにのぷるんぷる～んだ…この際、おっぱい吸っていいかな…』

～～～～～

そして、キバーラが戦っているワームのその内の3体が脱皮し成虫体に変わった。

コレオプテラワーム・アエネウス・クロセウス・アージェンタムは

クロックアップを使い、キバーラを追い詰めようとしたが……

『クロックアップ』

その音声と共に、何かが通り過ぎた。目に見えない無い戦いが始まり、その内の一体が爆発し、それから…

「――――そこか！」

アギト・フレイムフォームのフレイムセイバーがクロックアップ状態のクロセウスを切り裂き、爆発した。突然の出来事に訳が分からない、キバーラにスバルとティアナが駆けつけた。

「大丈夫で……って、仮面ライダー！？」

「今度は白！？」

「スバルさんにティアナさん！」

「その声、夏海さん！？」

「夏海さんも仮面ライダーだったなんて、そっちの方が驚きだわ…

…もう、何人いるのよ、仮面ライダーは」

てっきり夏海は普通の人だと思っていたが、実は仮面ライダーだった事に驚くスバルとティアナの二人であったが、未だに残っているバケネコとサナギ体に対して…

「この化け物たち何なの！？」

「えっと…ネコとサナギのお化け？」

「あれは、各ライダーの世界と戦う怪人たちです。ですから、お二人は引いてください」

「引かない！」

キバーラは2人に引かせようとしたが、スバルは迷いも無く引かないと言い切った。
その身勝手なスバルにティアナが止めた。ティアナはあの異質な化け物相手に勝てるか、どうか分からなかった……

「ちょっと、スバル！何言ってるのよ！ここは一旦引いた方が…」
「ここで引いたら、夢にたどり着けないもん！だから引かない！」

スバルの言い出したら聞かない事に、ティアナは分かっていた。だから、ティアナはクロスミラージュを構えた。

「私が援護するから、あんたは全力でやりなさい！でも、少しでも敵わないと思ったら引く！分かった！？」
「うん！」

スバルはマッハキャリバーで走らせた。相手がどんな未知数の相手でも勇気で立ち向かう気持ちで戦う！スバルは右手のリボルバーナックルでサナギ体を殴ったが…

「やっぱ、ガジェットとは違う！」
「相手は機械じゃないんだから、当然よ！」

そう言いながら魔力弾で援護していた。例え、力は及ばなくともコンビネーションで
対抗した。――――そして

＜ルナ！＞＜メタル！＞

二人の援護として、ダブルはルナメタルにハーフチェンジし、バケ

ネコやサナギ体はルナメタルの鞭状のメタルシャフトによって倒された。

「大体、片付いたな」
「ナイスアシスタント、芦河、左くん」
「ショウイチで良い。全く、こんな速いとはやり辛いな」
『全く同意だね』

相手がここまで強いとは思わなかった……そして、ティアナは自分の無力さに悔やんでいた。そして、スバルもこの人達のように、強くなりたい。仮面ライダーの人達やなのは達、隊長達のように強くなりたい……そう思った

「きゃぁぁぁぁーーーーーー！！」

悲鳴を上げたのは、一歩も動けずに怯えていたさやかだった。先程の戦いでは、ライダー達の相手をせず、近くにいたさやかを狙うオルフェノクとファンガイアだった

「来るな！来るなぁ！こ、こっちに来ないでぇぇぇぇーーーーー！！」

身体は震え、座り込みながら必死に泣き叫ぶ、さやかだった……

「い、いやぁぁぁ……私、私…死ぬの嫌だよ、助けてよ…恭介…」

泣き崩れ、地べたに座り込みながら上条恭介の名前を呼ぶさやかに、オルフェノクとファンガイアは非情にも牙を剥いた…。
『諦めていた……泣いて叫んでも、助からない……私はここで死ぬ

んだ……だから、私は諦めようとしていた』

――――その時『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』の音声が発せられると共に、さやかの真上に赤い閃光が見えた…その光は闇を切り裂き、希望（ひかり）をもたらすような輝きだった

その光は灰色の怪物・オルフェノクをグランインパクトで貫き、赤いΦ（〇を貫く？）の文字が浮き爆発した。さやかは怯えながら、自分を守ってくれた人を見て安心した。

「ごめんね、さやかちゃん。もう平気だからね」

「よく頑張ったね…さやか。後は私達に任せて」

「タ、タクミ…さんにフェイト…さん！」

仮面ライダーファイズとフェイト・Ｔハラオンは優しく声をかけ、さやかを守る希望（ひかり）となって、守った。

第１５話　「闇を切り裂く者達」（後書き）

前回と今回は少し温度差があります。

今回も少しシリアスでしたが、キバットのＫＹドスケベが発動し、更にＫＹラッキースケベが発動したエリオに思わず怒る嫁のキャロです。

その為、前回のｎｉｃｅ鬱なシリアスな空気は何処行った！？

まぁ、個人的はキバの連続フォームチェンジがやりたかっただけです。

さて、次回…本当はこの回でなのはさんを暴れてもらう予定でしたが、次回に持ち越しです。そして！ついに鬼が参戦。それと、敵組織が明らかに…

それと、シグナム姉さんが出て来なかったのは……フェイトの義姉の子供達と遊んでそのまま一緒に寝てましたー（え

第１６話　「不幸と天丼と俺、参上！」（前書き）

なのは「♪」

翔太郎「おい…何であいつ、あんなにご機嫌良いんだ？」
はやて「降臨や…」
さやか「はぁ？」
はやて「魔王様の降臨や」
一同「「「なのはさーん！ここに大魔王って言っている人がいますよー」」」
はやて「魔王って言ったけど、大は…ぎゃぁぁぁーーーー！！」

第16話　「不幸と天丼と俺、参上！」

「ごめんね、さやかちゃん。もう平気だからね」
「よく頑張ったね…さやか。後は私達に任せて」
「タ、タクミ…さんにフェイト…さん！」

仮面ライダーファイズとフェイト・Ｔハラオンは優しく声をかけ、さやかを守る希望（ひかり）となって、守った。

「さて、次は…」

先ほどさやかに向けていた優しい目線は一気に鋭い目線で、マンティスファンガイアを見ていた。相手が始めて見る怪物でも、バルディッシュを握り締めファイズと共に立ち向かった。

バルディッシュのハーケンフォームにフェイト自身の高速移動でマンティスファンガイアを斬りつけた。カブト程のスピードではないが相手には有効であり、さやかの元から離すように押していたが…

「…ッ！矢張り、儘にいかないかなぁ…」

相手のマンティスファンガイアも専用武器の大鎌でフェイトを斬りつけるように押していたが、後方にいたファイズのファイズフォンのバーストモードの援護によってダメージを受けた。しかし、その時に相手が手に持っていた大鎌は、さやかを目掛けて投げ飛ばした。

「「しまっ！？」」

さやか自身も呆気にとられ動けなかった。それでも二人はさやかの

前に立ち、守ろうとフェイトはシールド魔法で防ごうとした時、何処からがマシンガンが発砲され相手の大鎌は吹き飛ばされた。突然の出来事に3人も呆気にとられていた。
そして、3人を助けたのは1体の銀色のロボットだった。そのロボットにファイズが叫んだ

「オ、オートバジン！？」
「えっ？知ってるの？」
「僕のバイクです」
「（ロボットがバイクって……）」
「（タクミさんの世界って、ロボットがバイクなんだ……）」

ロボットがバイクと言う若干、変な間違いが生まれてしまったが、そうとも知らずに、ファイズはオートバジンの右ハンドルにミッションメモリーを差し込むことでバイクハンドル型エネルギーブレード「ファイズエッジ」を取り出し構えた。

「それって、タクミ…ファイズの専用の剣？」
「ええ、そうなります」
「それなら、一緒に！」
「はい！オートバジンはさやかちゃんを守って！」

『はーい』っと言う感じに右手で敬礼するように、さやかの前に立った。
ファイズとフェイトは連続でマンティスファンガイアを斬りつけていった。相手は専用の鎌を失った為、反撃も出来ず……そして

「「ハァァァー！！」」

正面からファイズエッジが背後からバルディッシュのハーケンフォ

ームがすれ違うように、マンティスファンガイアは斬られガラス体が割れ蒸発するかのように消滅した。

〜〜〜〜〜

シグナムのレヴァンティンとワルプルギスの魔力で作られた剣が火花を散り、応戦一方の戦いが始まった

「ハァァァーー！！」

「ッ！？」

シグナムが優勢のように押していたが、一時身を引いた。まるで余裕があるように、ワルプルギスにいくつか質問していた。

「いい剣捌きだな…」

「あら、それ馬鹿にしているのかしら？ハッキリ言ってしまえば、近接戦闘は大の苦手よ」

「いいや、馬鹿にしていない。無駄の無い構えに私の隙を幾つか、突いてくる……名は？」

「さっき、この子たちに教えたばかりなのよ。次、教えるとしたら全員揃ってからよ」

「そうか…」

そう言いながら、二人は剣を構えていたが…シグナムは何かを待つように、見回していた。そして、少し風が吹くように…何かが通り過ぎた

「――――――成る程ね。」

そう言いながら、ワルプルギスは一瞬で背後を向き、剣を振った。
その魔力で作られた剣は何かとぶつかった

「――――――烈火の将が囮となり、その隙に仮面ライダーが不意討ちね…それがファイズ・アクセル……いいえファイズ・アクセルにフォームライドした、ディケイドかしら？」
「大当たりだ…驚いたぞ、このスピードを感じるとはな。お前、人間か？」
「本当に不意討ちするのであれば、カブトにして欲しいわ。言っておくけど、魔女よ」

Dファイズ AFはディケイドに戻り、ライドブッカー・ソードモードを構えてシグナムの隣に立った。そして、二人は一斉に動いたが…

「――――――そして、後方にクウガに機動六課の魔導師！」

魔力で作られた剣を矢のように弓で2人の後ろを撃ち放った……その狙った先には木に隠れていた緑のクウガとはやて。クウガ・ペガサスフォームもペガサスボウガンのブラストボウガンで打ち落とすように相撃ちをした。

「……全く、油断も隙も無いわね……」
「お前が言うな」
「全くだ」

ここまでの作戦を簡単に止められても、二人は動こうとしながった。
その二人の後ろには青のクウガ・ドラゴンフォームのクウガとはやて。不意討ちが失敗した以上、二人の元に駆けつけた。

「それで、次は？」
「さぁな？」
「答える義理は無い」
「以下同文」
「同じくや」

４人は答えようとしなかった。それから、シグナムはワルプルギスに言った

「すまないが、もう一つ聞いても良いか？」
「悪いけど答える義理は無いわよ……」
「そうか…」

そう思った時、ワルプルギスの身体に拘束魔法・チェーンバインドがワルプルギスの身体を締め上げていた。そして、その真上には白いバイアジャケットに身を包んだ高町なのはの姿があった。
両手には１０年間共に飛び続けたパートナーのレイジングハートを構えて……

「それでも話を聞いてもらいます！！」

そう言って、なのははワルプルギスに向けてレイジングハートを構えた。バスターモードの先端から、ピンク色の魔力が集束するように……

「オイ…まさかな」
「まさかだよね？そのまさかじゃないですよね、シグナムさん？」
「……そのまさかだ。私は鹿目と暁美を連れて非難するから、お前らも気をつけろ。」
「ほな、逃げるでぇー！」

「「……」」

「ディバインバスタァァァァァーーーーーーーー！！！」

そして、ワルプルギスに光の閃光を放された……防御も出来ずに、逃げることも出来ずに、包むように直撃した
ディバインバスター・エクステンション…なのはの得意技のディバインバスターのバリエーションの1つ。高密度で圧縮された魔力が減衰することなく対象を打ち抜く、強力な集束型砲撃魔法でかなり貫通力・破壊力が向上している魔法…

それを離れて見て、合流していた面々はこう揃えて言った。

「「「「何あの破壊兵器――――！？」」」」

そして、あれがなのはのディバインバスターと分かっているフェイト達もあることを考えていた

「あれ、なのはのだよね？」
「それ以外に何があるんだよ」
「なのはの身体も心配だけど……無事かな？」
「分からないわね」
「ああ……確かに心配だな」

心配そうにするフェイト達にアギトが3人に聞いてみた。流石にあれは無いだろう…っと、思った。

「それで、何が心配なんだ？」
「「「あれを防御せずに直撃で食らった人が」」」
「「「「確かに心配だな」」」」

その事に誰もが考えていることが一致し、更に妙な団結力が生まれた。
『なのはを怒らせないようにしよう！』っと…

「なのはさんの砲撃……素敵だわ」
「おーい、マミ。自分も撃ってみたいって顔で見るなー」
「その前に必殺技の名前を…」
「やめんかぁぁぁぁーーー！！」

～～～～～～～

そして、攻撃を撃ち終った後。なのはは地上に降りて、周りを見渡した後地面に埋もれていたディケイドとクウガを発見した

「大丈夫ですか！？士さんにユウスケさん！」
「また死ぬかと思った……」
「危うくあねさんの所に逝く所だった…」
「――――で、あいつは？」
「分かりません…でも非殺傷設定で撃ちましたから」
「まぁな…それにこの辺一帯は、お前らが張った結界内だからな。逃げ出す事も出来ない筈だ」

「全く、今のが非殺傷設定じゃなかったら本当に死んでいたわ……」

「「「ッ！？」」」

煙が晴れた時、ディケイド・なのは・クウガの目の前にはノーダメージのワルプルギスにその横には、先ほどキバの連続フォームチェンジで倒れた筈のマトイ・メイの姿があった。
後から他のメンバーも揃い（マミと杏子はフリードリヒの背中に乗っている状態）そして、先ほどボコボコした筈のマトイがいることに驚くキバだった

「貴女、どうしてここに！？」
「あらん、王子様。次はちゃんと生きているか死んでいるか確認してから、そこの爆乳ちゃんの所に行ってね～」
「人の胸を見て爆乳って言わないでください！！」
『そーだ！確かにマミのおっぱいは爆乳だが、将来は乱乳なおっぱいに進化するんだ！凄いだろー！！』
「「「凄くねーよ！！」」」
「…キバットは空気呼んで自重して下さい。で、あの時は確かに歯ごたえがありました。…どうして、平気なんです？」
「うーん。簡単に言っちゃえば、胸をフルパワーして、ぼいんぼいんな状態で防いだ。…って、思ってね♪」

笑って笑顔で答えるマトイに良く解らない説明にキバは呆れ、ディケイド・アギト・カブト・ダブルの右側・ファイズも同じように呆れて頭を抱えていたが……

「ぼいんぼいん…だと！？」↑カズマ
「ヤバイ…冗談と解ってても、想像したら…」↑シンジ
「――――ぶはぁ！？」↑ユウスケ（鼻血が出た音）
「お、落ち着け…お前ら！こ、これは罠だ！」↑翔太郎
「「お前が落ち着け。」」↑士・ショウイチ

一部のライダーだけ精神的にダメージを与える結果となっていた。
六課のメンバーも呆れていたが、キャロやまどか達は（マミ除く）

「どうやったら、大きくなるか教えて下さい…」↑キャロ
「こんなのおかしいよ…不公平だよ」↑まどか
『なら、僕と契約して胸を大きくするかい？』
「何よ…あの余裕な顔…私も、もうちょっと大きかったら恭介を…」
↑さやか
「解せぬ」↑ほむら
「貧乳なめるぁぁぁぁぁーーーーー！！」↑杏子
「杏子ちゃん、怪我人だから静かにしてね」↑シャマル

こちらにも精神的ダメージを与える結果となっていた

「あの……。これ以上この子達を泣かせないで下さい」↑フェイト
「じゃー喜ばせる方を教えてあげるわ♪大きくしたいんなら、好きな殿方に胸揉んでもらいなさい。」
「「「「あぅ！？（／／／／／／）」」」」
「余計に精神的なダメージを与えるな。それと、はやてお前からも何か言ってやれ」
「ほな、早速本物か調べてもらうで！……その乳揉ませて」
「はやてちゃん？」
「はやて？」
「すまん。俺が悪かった」

好きな殿方に揉んでもらうっと聞き、慌てるキャロ達。それに呆れて士は、はやてに言うが一緒になってセクハラ親父のように言い。
その事で幼馴染のなのはとフェイトはお怒りの目ではやてを睨み、
士は二人に謝るカオスな状態だった

「――――それで、いつまで時間を稼ぐつもりだい？」
「ああ。いい加減付き合うのも疲れたからな。」
「全くです。まさか、こうも引っかかるのがこんなに多いとは思いませんでしたが」
呆れて言うカブト・アギト・キバの3人に、エリオは驚きながらキバに聞いていた
「どういう事、ワタル？」
「簡単ですよ、エリオ。あれは何かを召喚する為の魔法陣って言っていましたよね。なら、普通ならもうとっくに何かを召喚している筈です」
「しかし、それをしないと言うことは…何かが足りずに、召喚出来ないという事だ」
「そして、ここにいる俺達をくだらない話で足止め……そうだろ？」
キバ・カブト・アギトの順で説明で、ティアナやタクミは『なるほど…』っと呟き、『えっ、そうなの！？』っと言う、スバルとさやかだった。
そして、ワルプルギスは手をパンパンするように拍手をしていた。
「ご名答。流石ね…でも、もう時間稼ぎは終わりよ。それと、機動六課。これを返すわ」
そう言いながら、ワルプルギスはオーロラを使い、ある人物を出した。
その人物になのはやフェイト、はやては声を同時に出した
「アリサ！？」

「それにすずかちゃん!?」
「二人に何をしたんですか!?」
「足りない物として、使っただけよ。」

足りない物として使った……その言葉に一同は息を呑んだ。二人は若干衰弱しているように弱りきっていた。そして、ワルプルギスは言った

「この子達のライフエナジーを少し頂いただけよ。その意味分かるかしら、王子?」
「ッ!?まさか!」
「こいつらの命を使って、何かを召喚するつもりか!」
「ええ。特に、紫の子は凄かったわ……流石、夜の一族。ちょっと奪っても平気だったから結構、糖として貰ったわ…そのせいで、そっちの子はあんまり、奪わなかったけど」

ディケイドの一言に、なのは達も驚きを隠せなかった…友達の命で何かを召喚する……
そして3人は…

「貴女……人の命を何だと思っているんです…?」
「ただの道具。そして…使い捨ての消耗品よ。もしくは、実験台の道具」
「貴女は!」
「そんなこと許さへん……人を道具扱いするなんて、絶対にダメや!」

なのはは無言で、魔法陣に向けてレイジングハートを構えた。そして同じようにフェイトとはやてもバルディッシュとシュベルトクロイツを構えた。

「破壊するつもり?でも、もう無理…遅いわ」

そして、魔法陣は突然、光だし周りが揺れ始めた。まるで、災いが起きる前触れのように……

「しまっ!?」

「こうなったら、全員あの魔法陣を破壊するぞ!」

「――――させないよ」

ディケイドがそう言い出し、まどか達除く全員で破壊しようとした時、アルケミックチェーンに縛られているシャドウは自分の影に潜り、アルケミックチェーンから脱出してワルプルギスの元に戻り、無数の矢を放すように襲った。

それを防ぐようにシールド魔法で皆を守る機動六課に、少しでも落とそうとカブトクナイガンのガンモードで撃ち落すカブトにドラゴンロッド・ストームハルバードの長いリーチを駆使して一緒に落とす、クウガDFとアギトSF。

影の矢が撃ち止み、魔法陣から出てきたのは、発光する何かだった…それは何かを探すようにウロウロし、そして…

「はぅ!?」

その発光する何かは…なのはの身体に入り、動かなくなった。その場にいたフェイトは慌てて、駆け寄ろうしたが、ディケイドが止めに入った

「なのは!って、放してください!」

「ダメだ！今のなのははは敵だ！」
「どういうことです？」
「今のはイマジン…電王の世界の敵だ。あいつらは契約者として選んだ人間に憑依し、契約者の望みを聞こうとするんだ」
その説明に、さやかはディケイドに質問した。
「でも、願いを叶えてくれるんでしょ？ならイイモンの怪人だよね？」
「叶えてくれる代わりに、その代償として契約者の過去をイマジンが都合の良いように改竄し、現在や未来を変えることを最大の目的だ……」
「それって、まさか――――」
「ああ。一歩間違えたら、この時間が消滅して、なのははフェイトやはやて。お前らとの出会いも無くなり、機動六課が存在しなくなる」
その言葉に全員、止まった。フェイトに至っては、座り込むように驚きを隠せなかった。
自分との出会いが無くなる、自分を助けてくれたなのはとの出会いが――――無くなる。
その事に、フェイトは震えた。
なのはに憑いたイマジンはなのはから出ることも無く、憑依したままだった。
そして、イマジンに憑依されたなのははは赤いメッシュが入った逆立った髪と赤い瞳を持ち、そして言った一言は…
「俺、参上！」

――――その一言に、誰もが黙った。突然のキャラ違いのなのはに、フェイトはアワアワと驚き、はやてとヴィータは『何あの不良なのは（ちゃん）？』等と言われた。

「――――って、ここ何処だ！？おーい！良太郎！ハナクソ女―！亀、熊、ハナタレ小僧！！」

ギャーギャー言い始め、呆れたディケイドはなのはに憑いたイマジンに向けて言った。

「何でお前なんだぁぁぁぁぁーーーー！！」

「ぐぼっ！？」

「「「なのは（ちゃん）（さん）を殴ったぁぁぁぁぁぁーーーー！？」」」

なのはに憑依したイマジンの事を知っているかのように、なのはの顔面をグーパンで殴った。それを見て、全員ツッコミを言えるかのように叫んだ。

「おい、モモタロス！いいから出て来い！また殴るぞ！！」

「ちょ、お前は！…って、言ったそばから殴るな！」

「なら、強制的に…」（ＦＦＲのカードを取り出す）

「わーったよ！出てやるよ！」

そう言いながら、なのはから出てきたのは崩れやすい砂粒でできた体に上半身・下半身が逆転した、顔付きの悪い鬼だった。それを見たクウガは……

「あの時の恨みぃぃぃぃぃーーーーーー！！」

「落ち着け、小野寺！よく分からんが、落ち着け！」

「うわぁーユウスケの顔が鬼ように怖いー」
「まるで、ここで会ったが百年目って顔だねー」
「お前ら、落ち着いて言うな」

落ち着かせようとするシグナムを横目に、のん気に言うカズマとスバルにヴィータが言った。
そして、また揺れ……今度出てきたのは…

「――――今度は人が降って来たね…」
「痛そう…」

降って来た人物は、犬神家のような状態で地面に埋もれた。それを見ていた、まどかとさやかは唖然としていた。その埋れた人物の元にもイマジンが現れ、彼を助けるように必死で引っ張っていた…

「ふ、不幸だぁ…」
「大丈夫か、幸太郎」
「大丈夫じゃない…今日は不幸のレッドゾーンだぁ…」

妙に哀愁が出ている青年に、モモタロスが声をかけた

「幸太郎に天丼！」
「モモタロス！？」
「天丼じゃない…って言っているだろ」
「お前まで来たとはな、もう一人の電王」
「お前はディケイド！？って、これもお前の仕業か？」
「今回は俺のせいじゃないぜ。あいつらが、お前らをこの世界を破壊する怪人として、呼んだらしい」

指を指す方向には、女性の姿だった。ワルプルギスは、困った顔で

見ていた。

「魔化魍のバケガニ辺りが欲しかったけど…ここは一旦引くべきね」
「えぇーそんな、お姉さま！」
「安心しなさい。帰ったら、好きなだけ遊んであげるわ」
「ヨッシ！」

ガッツポーズしてまで喜ぶマトイは置いといて、ディケイドはワルプルギスを止めた。

「帰るのか？」
「ええ。まさかの召喚した怪人が敵だったんですもの…当然、引くわ。でも――シャドウ、とっておきの物で遊んであげなさい」
「はーい」

そう言い出して、シャドウの影は異質の物を作った…
頭部はタカ、胴体はトラ、脚部はバッタの合成獣だった。それと同時にマトイとシャドウの姿は消え、そしてワルプルギスは

「我らはスーパーショッカーの意思を受け継ぐ組織『ネオ・バダン帝国』バダン帝国の大首領の右腕、魔女。ワルプルギス・K・パンドラ。覚えおきなさい。機動六課と仮面ライダー」

第１６話　「不幸と天丼と俺、参上！」（後書き）

さて、次回で海鳴市編終了です。本当はこの回で終わらせるつもりだったんですが、長引きました…

そして、モモタロスと及び幸太郎とテディのコンビが登場です。幸太郎は最初出す予定は無かったのですが、矢張り好きなライダーなので、後先考えずに出しちゃいました

ですが、次回はちょっとお休みで今度、スピンオフをやります。本編とは全く違う話で、カオスな話です。スピンオフ第１弾はシンデレラです。

第17話　「魔女の囁く声、そして魔の手」（前書き）

モモタロス「俺、さんじょぉおおおおおーーーーーー！？」
土「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー！？」
なのは「人の身体を勝手の使って…変な決めポーズまでやらされて…そして、顔面グーパン。痛かったな……ねぇ、少し反省しようか？」

「ディバイン…バスター」

一同「「「ヒィィィィィー！？」」」
まどか（ほむらに目隠しされている）「えっ！？一体、何があったの！？」
ほむら「あ、貴女は見ちゃダメよ！あの光景は絶対に…ほむーん」

第17話　「魔女の囁く声、そして魔の手」

「我らはスーパーショッカーの意思を受け継ぐ組織『ネオ・バダン帝国』バダン帝国の大首領の右腕、魔女。ワルプルギス・K・パンドラ。覚えおきなさい。機動六課と仮面ライダー」

そう言い出した魔女は周りを見渡し、ほむらとまどかを見ていた。むしろ、ほむらだけを見ていた。冷たい眼差しで強く睨み付けていた。

『聞こえるかしら、ほむら?』

その声はほむらにしか、聞こえないように念話で話しかけていた。

『貴女は今すぐ、私を殺したいかしら?』

『――――ッ!』

『なら、私を殺せるいい考えを与えてあげるわ。』

『なんですって…』

『そこにいる機動六課と仮面ライダー達を使えば良いのよ。そうね……使える物は道具のように扱って、使えなくなったらポイっと、捨てればいいのよ。』

『貴女は……!』

『まぁ、臆病者には無理な話だったわね…』

それを面白そうに言う魔女に、ほむらは言った。相手が自分の事知っているかもしれない……でも、今の自分は違う。その挑発に乗るかのように…

『ええ、いい考えね。その案乗らせてもらうわ…貴女が何者かは知

らないけど、私の邪魔をするのなら……あの人達を使ってでも、貴女を殺す』

『良い返事ね。楽しみに待っているわ…ほむらちゃん』

その返事を待っていたかのように、ワルプルギスは不適に笑い…そして、機動六課と仮面ライダーたちに言った

「さて、私も帰らせてもらうわ。でも、この合成獣と仲良く遊んでいってね」

「いらない、いらない！いらないから、即返品します！」

「押し付け商売は嫌われるぞ！」

「そう言わないで。これでも、ガイアメモリで儲かっているのよ。そして、次にあった時に、全員無事ならご褒美あげるわ♪」

『なら、ご褒美で乳揉ませて…がばっ！？』

「今すぐ変身解除して、あなたをコンクリート詰にして海に沈めますよ……」

「（なら、私も！…って言ったら…なのはちゃんのお仕置き決定やな。）シャマルとキャロはすずかちゃん達、怪我人を連れて一時撤退！」

「「はい！」」

「それと、翔太郎さん達とタクミくん！お願いだけど、シャマルたちの護衛に回ってもよろしいですか！」

「ああ、任せろ！」

「はい！」

「それと…そこの鬼の怪人達も」

「俺は鬼じゃね！」

「詳しい話はあっちの方で聞いたほうがいいな。テディ！」

「分かった！」

スバルと士からのクレーム？に面白そうに答えるワルプルギスは冗

談交じりで言うが、駄コウモリのスケベ心にキレて殴る、装着者だった。そんな内心を隠しながら、はやてはシャマルとキャロに怪我人を連れて撤退するように指示を出していた。

「あ、そうそう。テスタロッサ執務官。頑張っている貴女にご褒美あげましょうか」

「ご褒美？」

「この前、その子達の世界でガジェット達が出たの覚えているかしら？」

「ええ…覚えています」

「あれは貴女が探し続けている男『ジェイル・スカリエッティ』から借りたの。それじゃ、バイバイ」

そう言って、ワルプルギスは消えた。フェイトは追いかけようとしたが、合成獣が吼えた。鷹の頭部でありながらも、凶暴な獣のように…そして、虎の爪でフェイトを切り裂こうした時

「……うっ、矢張りパワーは虎並みに強いな」

「ソウジさん！？」

クロックアップでフェイトの前に立ち、ガブトクナイガン・クナイモードで受け止めるカブトであったが、パワーでカブトとフェイトごと吹き飛ばした

「くっ！？」

「きゃっ！？」

合成獣は吹き飛ばした二人を、もう一度襲おうとした時、別の方から火炎弾が合成獣を襲い、二人を助けた。他のライダーとは違う姿、紫色の鬼。仮面ライダー響鬼にカメンライドしたディケイド。D響

鬼だった

「やっぱ、あんなヘンテコ化け物相手には、これが一番だな」

D響鬼の両手には、音撃棒・烈火を構え合成獣と戦い、そのフォローで左右からブレイドＪＦとヴィータが援護していた。

「ハァァァァーーー！」

「ウェイー！」

ヴィータのグラーフアイゼン・ハンマーフォルムを、ブレイドＪＦは醒剣ブレイラウザーを振るい、相手の合成獣を叩き斬りつけようとした時、相手は消えた。

「なに！？」

「消えた！？」

「お前らの上だ！」

合成獣はバッタのように大きく跳び跳ねり、その虎の爪を立てながらD響鬼・ブレイドＪＦ・ヴィータの３人を弾き飛ばした。

「「「うわぁぁぁー！」」」

「士！」

「カズマ！」

「ヴィータ！」

クウガ・龍騎・シグナムも追撃するかのように、合成獣と戦うが、バッタの瞬発力、トラの鋼鉄な爪。その近接戦闘を回避するように、はやてはなのはと共に後方からの攻撃を始めていた

「そんじゃ！いくよ、なのはちゃん！」
「うん！はやてちゃん！」

二人は合成獣を狙い定め、なのははディバインバスターをはやてはミストルティンの詠唱をしていたが、相手の合成獣はその二人に強く睨むように見て……
口から火炎弾を吐いた

「んなぁ！？」
「火炎弾！？」

二人は急いでシールド魔法を展開し、火炎弾を防いだ。その攻撃を見ていた、スバル達フォワード組は

「地球の鳥って、口からフリードのように火炎弾出すんだ…」
「ちょっと予想外！？」
「魔法レベルは無しって言うくせに、動物のほうは油断出来ないわ」
「そもそも、地球にあんな合成獣いないから！鳥は口から火炎弾吐かないよ！」

それぞれ驚くように言う3人にフェイトがツッコミを入れた。

～～～～～～

怪我人を連れて、離れた場所に移動したシャマルとキャロにまどか達。
衰弱している、アリサとすずか。傷だらけのマミと杏子…

その護衛でダブルとファイズと幸太郎とテディとモモタロスだった

「あーもう！何で、天丼は普通の状態で俺だけが、こんな状態なんだよ！」

「やっぱ、祖父ちゃんがいないからそれなんじゃないか？」

「こういう時だけ、何で良太郎がいねえんだよ……身体さえあれば」

そんな愚痴を言うモモタロスは置いといて、４人に回復魔法・静かなる癒しで治していた。そんな中、ダブルとファイズは

「不味いな……士達、押されているぜ」

『一回、僕たちも戦前に戻ろう』

「そうですね。オートバジンはここで、シャマルさん達を守ってて」

『Ｐｉ！（はーい）』

「すまね、シャマル。俺たちも戦前に戻って良いか？」

「オートバジン残しますので」

「はい！ここは私が守りますから、はやてちゃん達の方をお願いします」

「任せな」

ダブルは苦戦している仲間を助けに行こうと戻ろうとした時、さやかがダブルとファイズにある事を頼んだ。

「お、お願いです！私も連れて行ってください！お願いします！」

さやかの手には普通のバットを握り締めながら頭を下げて、ダブルとファイズに頼んだ。理由は分からないが、先程までとは違う目で見ていた。しかし、二人は連れて行く事を断ろうとした時、杏子が言った。

「そんな棒一本で、何する気だよ」
「た、戦うに決まっているでしょ！みんなの足手纏いになりたくない…なら、私だって！」
「さっきまで、怯えて泣いていた奴が良く言うよ。どーせ、あの合成獣のバケモンを近くで見て、腰抜かして皆の邪魔する気だろ」
「うっ……でも、もう違う！もう怖くないもん！」
「なら、どうして震えているんだよ？やせ我慢しても、無理だよ。兄ちゃん達も言ったら？来ても、反って邪魔だ！って」
「そんなこと無いよね！？――タクミ……さん」
「……」

さやかはの顔を見た。しかし、ファイズはさやかの顔を見ないようにしていた。まるで、杏子の言った事に賛成しているように……

「なによ！私だって、戦え…る……もん」
「なんだよ、仲間にも拒絶されて悔しい？忘れていると思っているけど、良いか。あたしとマミ、ほむらは普通の人間じゃない、魔法少女だ。そして、あんたとまどかは普通の人間。その差を考えてから、言いな。バーカ」
「誰がバカよ！」

さやかは信じていた仲間に裏切られたような気分だった。更に杏子はさやかを笑うように、馬鹿にしていた。魔法少女と普通の人……その差がハッキリ分かっていた。
そして、さやかは…

「――ごめん。ちょっと、一人になりたい」

そう言って、目元には涙が出ているように、さやかも姿を消してしまった。そのさやかを追いかけようとまどかも走り出そうとした時、

杏子に止められた

「今は一人にさせてやりな。（ったく……嫌われ役も疲れるね）」
「（佐倉さん…貴女まさか、ワザと言ったの？）」
「（ああでも言わないと、あいつ。大怪我して、取り返しが出来ない事になるからね）」
「（――ごめんなさい、私の代わりに言ってもらって…）」
「（良いよ。嫌われ役は慣れているさ……けど、後はマミが言いな）」
「（うん）」

2人はテレパシーで敢て、嫌われ役を演じさやかを傷付けないように守った杏子に、その自分の代わりに嫌われ役をやった杏子に詫びるマミだった。

「それじゃ行くぜ、フィリップ、タクミ」
『僕はいつでも行けるよ、翔太郎』
「はい！」
「なら、俺…いや、俺達も一緒に行くぜ」

それを言ったのは、幸太郎だった。その隣にはイマジンのテディも一緒に、行こうとしていた。

「けど、お前…」
「これでも俺も仮面ライダーだ。テディ」
「ああ、幸太郎」
「変身！」

金色のデンオウベルトを腰に付け、右手には変身に必要なライダーパスを構えて変身した。

＜ストライクフォーム＞

そして、幸太郎は藍色をメインの全身を走るデンレール、胸のターンテーブルなどが特徴の仮面ライダー電王。いや、もう一人の電王・ＮＥＷ電王ストライクフォームに変身した。
その右手には、イマジンテディが変身する大型の剣。マチェーテディを構えた。

「どう？俺とテディは？」
『よろしく頼む』
「なんだ、お前らも二人で一人のライダーだったか」
『僕たちと同じだね』

二人で１人って事で、妙に気が合った二人（３人と１体）だったが、ファイズに『早く行きましょうよ』って、事で３人のライダーは仲間の元に行こうとした時、翔太郎は

「っと、その前に」
『ＣＪに戻すのかい？翔太郎』
「ああ」

＜サイクロン！＞
＜ジョーカー！＞

ダブルＬＭからＣＪに戻った。しかし、そのＪのガイアメモリに杏子はある事を思い出した。

「あぁぁぁぁー！そうだ！」
「ど、どうしたの、佐倉さん？」

「あれだ！おい、マミ！確か、ここの世界に来る前にあたし達の世界で青のライダーともう一人の男の人いただろ？」
「え、ええ。確かにいたわ。それが、どうしたの？」
「実は、あたしとカズマ兄ちゃん。マミ達と合流する前に会ってて……」
そう言いながら、右手である物をあっちこっち探すように探し、そして…
「――そうだった。その男から、いらないとか言って貰っていたんだ…グリーフシード」
～～～～～～～～～～
未だに合成獣に苦戦していた一同。合成獣は近づく者には鋼鉄な爪で切り裂き、離れた相手には鷹の目で狙いを定め、火炎弾を吐き出す。そして、瞬発なジャンプ力…隙が無い相手だった。
「くそっ…思ったより、手強いな」
「ああ。カズマ、シンジ。お前ら、残りのカードは何だ？」
「うーん。俺は後ファイナルベントのみ」
「こっちは、カテゴリー９と６と５と２だけ。それに、さっきの攻撃ＪＦを解除させられちゃったからね…」
「（ワタルとショウイチの方も、フォームチェンジ繰り返しても、効果は無しだった。ユウスケの場合は丁度いい物が無い以上フォームチェンジが出来ない。ソウジはクロックアップの手もあるが…さっきから使って、いつまで持つが分からない…）」
ディケイドも響鬼のカードにファイズ・アクセルを使ってしまった

為、ほかのカードでカメンライドしても、有効な手が無い。もう手詰まりと思った瞬間。

合成獣の頭のタカの口から火が集中していた。まるで、トドメを刺すように最大出力で放そうとした時……

「――――ティロフィナーレ！！」

その掛け声と共にタカの横顔が爆発した。合成獣はまだ生きているが、先ほどの攻撃のせいか黒く焦げていた。

「今の攻撃って…」
「むしろ、今の厨二っぽい必殺技は…」
「あいつしかいないだろ……」

エリオ・キバ・シグナムの3人はある人物を浮かんでいた…そして、こんな名前の必殺技を叫ぶのは、彼女しかいなかった

「ワタルくん、無事！？」
「あっ、やっぱり」
「巴、矢張りお前だったか…」
「あ、はい。皆さんご無事ですね」

平然と言うマミに、フェイトがあることに気づいた。先ほどまでは、穢れていたソウルジェムは綺麗になっており、傷も全て治っている事に

「ところでマミ。もう大丈夫なの？」
「はい！もう全然平気です」
「けど、一体どうやって？だってグリーフシードは…」

フェイトとキバに疑問に、後からフリードリヒに乗ってきた杏子達が合流した。その時、杏子が代わりに説明した。

「その説明はあたしがするよ。グリーフシードなんだけど……ごめん、持っていた事に忘れてた…」

「「「はぁぁぁー!?」」」

「そのお陰で、ソウルジェムの穢れは浄化出来て、私の力で傷も回復。それと、アリサさんとすずかさんも、もう平気です!」

二人がもう平気と聞いて、フェイトやなのは、はやても安心するような顔だった。そして……

「ほな、みんな……相手の能力も解った所で、反撃返しで一気に決めるでぇ!」

「「「はい!」」」

「巴!お前は相手を牽制するように、相手の近くの地面を撃てるか?」

「任せて下さい!」

シグナムの指示通りにマミは両手にマスケット銃を構え、合成獣の近くの地面を撃ち狙う…相手はマミに狙いを定めるように火炎弾を発射しようとした時だった。地面から、無数のリボンが相手を拘束していった。

「その次!キャロ、行くよ」

「はい!」

それを続くように、なのはのチェーンバインドとキャロのアルケミ

ックチェーンが3重の拘束で相手は全く身動きが取れない状態だった。

「さて、トドメを行かせて貰うぜ！」

ライダー達もそれぞれの必殺技の準備をしようとした時…

「いくぜいくぜいくぜぇぇぇーー！」

「――それで、あの馬鹿は誰の身体を使って電王に変身しているんだ？」

「あの身体、アリサさんです」

「「「……」」」

これからと言う時に、いつの間にかモモタロスが電王・ソードフォームになっていて、その事にディケイドがファイズに聞き、回復し終わって未だに気を失っているアリサの身体を勝手に乗っ取り、電王に変身してしまった。その事に、なのは達3人娘は若干怒っていた

「さっきは色々やられたけど、今度はそう簡単にやれるかって！行くよ、エリオ！」

「はい！…えっと」

「杏子！佐倉杏子だ、覚えておけー！」

「はい、杏子さん！」

杏子の槍とエリオのストラーダ、赤き槍騎士と魔法少女により合成獣のバッタの脚部を切り落とされ、それに続くようにヴィータ・スバル・ティアナ・マミの攻撃。

「お前ら、あたしについて来い！」

「はい！私たちも遅れずに行こう！ティア、マミ！」

「それは私のセリフよ！マミも遅れずに行くわよ！」
「はい！」

ウイングロードを使い、マッハキャリバーを全力で相手のタカの頭部まで走り、相手の顎にリボルバーナックルで魔力を圧縮、上体〜拳を強化し直接殴る打撃魔法・ナックルダスターを、その真上からヴィータのグラーフアイゼンのギガントフォルムが上下からの攻撃でタカの頭部を潰し、その追い討ちを掛けるように

「クロスファイアシュート！」
「ティロフィナーレ！」

集中砲火によって相手の頭部を完全に潰すも、それでも動くように無理矢理、虎の爪でヴィータ達を斬りかかろうとするも。

「――――――紫電、一閃！」

ポニーテイルの髪をなびかせながら、シグナムの炎の魔剣こと、レヴァンティンは紫電一閃で相手の両腕を切り落とした。その炎は主と仲間達を守る炎として…
そして、為す術がない合成獣に隊長達と仮面ライダーは一気に決めた。

「そんじゃ！なのはちゃん、フェイトちゃん！それに士さん！」
「うん！」
「分かった！」
「一気に決めてやる！」

ディケイドはＦＡＲのカードをディケイドドライバーに挿入し、ダブルもジョーカーメモリをマキシマムスロットに、クウガは右足に

力を集中し、アギトはクロスホーンを展開し足元にはアギトの紋章が浮かび…

『ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ・ｄｅ、ｄｅ、ｄｅ、ＤＥＣＡＤＥ！』

＜ジョーカー！マキシマムドライブ！＞

「「ハァァァ……！」」

龍騎はファイナルベントのカードを暗龍召機甲ドラグバイザーに読み込ませ、ブレイドはスペードの５＋６＋９のラウズカードを醒剣ブレイラウザーにスラッシュ。

『ファイナルベント』

『ライトニングソニック』

Ｍ電王とＮＥＷ電王はライダーパスを電王ベルトにセタッチしてフリーエネルギーをフルチャージ。クロックアップで相手の背後に回ったカブトはカブトゼクターのゼクターホーンを倒す事で発動。

『ウェイクアップフエッスル』をキバットに吹かせることで、右脚に備わる「ヘルズゲート」を全開放。ファイズはファイズポインターにミッションメモリーセットして右足に接合させ、ファイズフォンのＥＮＴＥＲキーを押すことにより「Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ」の音声が発せられ…

『『フルチャージ』』

『ウェイクアップ！』

『１・２・３・ライダーキック』

『Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ』

「ディバイン……バスタァァァァァァ――――――――！！！」
「プラズマ……スマッシャァァァァァ――――――ー！」
「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティン！」

なのはのディバインバスターと、フェイトのプラズマスマッシャー、はやてのミストルティンがディケイドのディメンションキック・ダブルのジョーカーエクストリーム
クウガのマイティキック・アギトとカブトのライダーキック、ファイズのグリムソンスマッシュ。
龍騎のドラゴンライダーキック、ブレイドのライトニングソニック。
M電王の俺の必殺技パート1、NEW電王のカウンタースラッシュ。
キバのダークネスムーンブレイクが炸裂し、合成獣は爆発と共に消滅した……

「名づけて、俺達の必殺技パート1！」
「スターライトニング・ストライク・フィナーレ！」

「マミィィィ！頼むから、ドヤ顔で言うなぁぁぁぁぁーーーー！」
「パート1って、他にも出るのか…？」

――――傷が治って早々、杏子の叫び声が響いた。そのパート1に士は、思わず思った…

〜〜〜〜〜〜〜〜

激戦が終わる少し前、一人ぼっちで立ちつくさやかの後ろに灰色のオーロラが現れた。そこから出てきたのは、先ほど消えたはずのワルプルギスだった。

「――――貴女は相変わらずね、美樹さやか」

「あ、あんたは……ッ！」

「そう怖い顔しないの。折角良いもの見せてあげようと、思って戻ってきたのよ」

「良いもの？」

「ウフフフ……」

ワルプルギスがゆっくり右手を上げた時、オーロラが現れた。その先に映されたのは、幼馴染の少年だった。

「恭……介？」

「流石、幼馴染。良く分かったわね…映っているのは、貴女達があの次元震でいなくなってからの病院よ」

「――――――ッ！？」

あれからどの位の日が経ったか、分からない……しかし、さやかは幼馴染の少年・上条恭介の姿を見て、今まで我慢していた物が溢れ出ていた。

「な、なによ…あいつの顔を見ただけで…何で涙が出てくるのよ」

今すぐ会いたい思い人の顔を見て、さやかは顔をぐしゃぐしゃにしながら、涙を拭いた。しかし、ワルプルギスは背後からさやかの耳元にある事を言った。

「――でもね、彼。このままだと、自殺するわ」
「――――――えっ」

自殺？自殺って、自分で自分の命を絶つ事だ……何の話？どうして、あいつが自殺するの？――――――ワカラナイワカラナイワカラナイ、ワタシニハワカラナイ…

「分からない顔しているわね…病院の先生に『諦めろ』って、言われたのよ。今の医学ではどうしようもないって『バイオリンは諦めろ』……。そう言われたら、彼、物凄い顔で泣きじゃくったのよ、そうね…大事な玩具を奪われた子供のように」

バイオリンが出来ない…あいつが、恭介が大好きなバイオリンが…諦めろって、それって何？それじゃ、あいつの夢がもう叶わない。恭介の演奏がもう聞けない……嫌だ、そんなの私が…

「許さないわよね……でも彼に残された道は、幾つがあるわ。１つ目は本当にバイオリンを諦める。２つ目はそれでも諦めたくない、頑張って治そうとしたい。３つ目…もう何もかも嫌になって、自らの手で死ぬ。まぁ、今の彼なら本気で死ぬつもりよ」
「嫌……聞きたくない…やめて」
「そうね…死ぬんだったら、彼はどんな死に方をするのかしら？貴女は想像出来る？病院からの飛び降り自殺？それとも、ナイフで首をざっくり切る？ああ、心臓を刺すのも面白いわね。そうしたら、あの顔が真っ赤になって、病室も真っ赤に染まって面白いわ……そう思わない、さやかちゃん？」
「イヤァァァァァァァ――――――――！！」

魔女（あくま）はさやかの耳元で、次々と非道な事を言った…想像したくないものを想像してしまった。さやかは自分の耳を押さえて、地べたに

座りながら悲鳴を上げた。……さやかの耳元で未だに面白そうに言う魔女は、ある事を言った。

「でもね、そんな彼を救える方法があるのよ」

「救える…方法？」

「そう。貴女が助けるの…貴女が契約すれば、彼は大好きなバイオリンが出来る。聞きたいわよね、彼の演奏ともう一度見えるのよ、あの優しい笑顔を」

私が恭介を助ける…あいつの演奏がもう一度聞ける。そして、昔のようにあいつの――――――

「恭介のあの優しい笑顔が見える……」

「ええ、彼の笑顔が見えるのよ。昔のように、貴女だけ見せてくれるのよ」

「ほ、本当に！？あいつの…恭介の笑顔が見えるの」

「ええ、本当よ（ウフフフ……これで、計画通り。美樹さやか貴女って、本当に馬鹿ね。貴女はこれから契約して、魔法少女となってもらうわ。そして……希望から絶望に、喜びから悲しみに…魔法少女から――――になってもらうわ）」

魔女・ワルプルギスの思惑に、さやかは気付いていなかった。この先、降りかかる魔の手が迫っていた事に…

第17話　「魔女の囁く声、そして魔の手」（後書き）

色々書いてしまった為、長くなってしまいましたが、一応。海鳴市編終わりです。次はまた外伝17・5書きます。

モモタロスは、結界内ではあの砂の状態ですが、結界外では通常の実体のある身体です。その為、結界の外なら単独変身可能です。そして、結界内の場合は電王に変身出来る設定では本当は特異点であることが条件ですが、クロス大戦での条件では、近くにディケイドがいるのなら、誰にでも憑依して変身可。しかし、いなかったら特異点の人物のみ変身。
って、設定です。

ワルプルギスの悪魔の囁く声に、さやかは魔法少女の道に一歩進んでしまう。そして、まどか達は三滝原に戻れるのか！？

『スターライトニング・ストライク・フィナーレ』……って、合体技の命名するな、マミさん！もう、魔法少女が使う名前じゃねぇー！
『でも、フィナーレは外さないわ！』ｂｙマミ

そして、外伝書く前に、スピンオフです。次回のスピンオフは、まさかの大物作品とコラボです。なので、心に白装束着ながら、書きます。（えっー！？

外伝　第17.5話　「3つの道」（前書き）

次の話の前に、久しぶりに外伝です。

外伝　第17．5話　「3つの道」

？？？

一人の男が目を瞑り腕組みをしながら、考えていた。主からの命令であればどんな任務をこなす。男・ジョーカーは以前の任務にある疑問を考えていた。

「（大首領さまは俺に『グリーフシード』の回収するように、海東大樹と共に回収及び、あの魔法少女と呼ばれる者達のデータを取るように行かせた。しかし…）」

ネオ・バダンの大首領からの指示を忠実に実行しようとしていた。しかし、大首領の右腕・ワルプルギスから内密で連絡が入った。

『聞こえるかしら、ジョーカー？』
『はっ！聞こえております、ワルプルギス様。何がご用件ですか？』
『ええ、悪いけどグリーフシードを2つ欲しいのよ。』
『2つですか？』
『ええ、一つは私達用に。もう一つは、魔法少女に』
『――して、どのような相手に渡せばいいのです？』
『巴マミ……いえ、佐倉杏子に渡して欲しいわ。一応、今から彼女のデータを送る……あっ、そうそう。この事は、隣にいる海東大樹に気付かれてはダメよ、良い？』
『しかし、何ゆえこのような事を？』
『ウフフフ……それは内緒よ。それとも、何か不満？』
『……いえ、我が主の命令とあらば、承知』
『では、頼むわ』

その後、魔女を倒しグリーフシードを手に入れた時、運よく佐倉杏子と出会った。そして彼は、ワルプルギスからの命により、杏子にグリーフシードを要らないと言う嘘をついて彼女に渡した。

「ワルプルギス様…貴女は一体何をお考えに」

ジョーカーはそう思いながら、主の元に向かった。次の任務の為に…

～～～～～～

機動六課。

海鳴市の出張任務が終わって、機動六課の部隊長室。

その部屋には部隊長である、はやてと分隊長のなのは・フェイトにその副隊長のヴィータ・シグナム。そして、仮面ライダー達とまどか達も集まっていた。

まどか達は次元漂流者という扱いで、機動六課が保護する形でいた。

「さて、皆集まったところだし。ちょっと、本題いこうか」

隊長と言う事もあって、はやてがその場仕切っていた。今にも難しい話をしそうな空気に、『この際寝ててもバレないよね？』と考えているさやかに、一人だけ呑気に紅茶を飲んでいるマミと『お前ら、少しは空気読めよ！』っと、言いながらクッキー（マミ作）を食べている杏子だった。

「ネオ・バダン帝国と名乗った女性、ワルプルギス…。けど、彼女は自ら魔女と名乗っていた。生憎、私達は魔女と呼ばれる存在はキュゥべえから聞いた程度や。そこで、マミちゃん達に教えてもらいたい。」

魔法少女代表としてマミは、魔女について教えた。魔法少女が希望を振りまく存在なら、魔女はその反対で絶望を撒き散らす存在。魔女は常に己が張った結界内に潜んでいる事をもう一度教えた。そして、魔女はどれも異質な存在ばかりであり、人型の魔女は、存在しない。

「ですから、あの人が魔女だなんて、そんなこと…」
「そんなことある筈が無い。いいえ、あれはワルプルギスじゃないわ（そうよ、あれは違う……）」

マミが言おうとした時、ほむらが言った。しかも、あの人物をワルプルギスじゃないと強く言い切った。そんな中はやては、困ったような顔でタメ息を吐いた。

「完全に私が想像していた以上の事態やな……『レリック』『ガジェット』『ネオ・バダン帝国』『ジェイル・スカリエッティ』『ガイアメモリ』…はぁー最悪の展開や」
「ジェイル・スカリエッティが何処までネオ・バダン帝国と繋がっているか分からない。もしかしたら、スカリエッティの生命操作・生命改造の技術がネオ・バダンに流失しているかもしれない…」

フェイトは訳ありでスカリエッティに関する事件を追っていた。その手掛かりの1つがネオ・バダン帝国に繋がっていると、分かった。そんなの時、幸太郎がフェイトに質問していた。

「さっきから聞いてたんだけどさ、そのジェイル・スカリエッティって何者なんだ?」
「あっ、それ俺も聞きたい」
「僕も聞きたいです」

幸太郎の質問にシンジとワタルも興味あるように、フェイトに聞いたが――――

「ジェイル・スカリエッティ。生命操作や生体改造、精密機械に通じた謎の多い科学者で、ロストロギア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者。違法研究者でなければ間違いなく歴史に残る天才。……って、ところかな？」

「あーフィリップ。これから、フェイトが説明するって時に……何勝手に説明してるんじゃぁぁぁぁ――――！」

フェイトが説明しようとした時、先に地球の本棚で調べ説明するちょっとＫＹな相棒を何故か持っていた『なんでやねん！』と書かれていたスリッパでかるーく（？）叩く翔太郎。かるーく（？）叩かれたフィリップはかなり痛そうにしていた。そのツッコミを見ていたはやてはこんなことを考えていた。

「（本当にええツッコミやなーでも、あのスリッパ、何処から出したん？）」

…っと。実は、誰もそのことには突っ込まなかった

「で、今後どうする？」

「そうですね。早く今後の事決めないと、さやかは半分寝ていますし、マミは一人で紅茶１０杯飲んでいますから。」

「知っているんなら、何で止めないんだよぉー！？」

「あっーすまん。ああいうの見てたら、学生の頃を思い出して和んでた」

「和むな、和むな」

士から今後の事について聞こうとしていたが、ワタルも同じように聞いた。理由はフィリップが説明したスカリエッティの説明に話が分からず、コクリコクリと寝ているさやかに、マイペースで紅茶を

１０杯目を飲むマミ。その横でワタルに怒る杏子を差し置いて、和むソウジに突っ込むショウイチだった。

「――――えっと。私達、機動六課は予定通りレリック捜査を中心で進み、ガジェットドローンを操り暗躍するジェイル・スカリエッティを重要参考人として、捜査を進めて行きます。」

「俺とフィリップは１０８部隊のギンガの所に戻って、ガイアメモリの捜査中心で行くぜ。あの女、ガイアメモリで儲かっているって言っていたからな。もしかしたら、何か手掛かりが見つかるかもしれないしな」

はやてと翔太郎の今後の方針をそれぞれ決め、捜査しようとしていた。

その後から続くように、フェイトが言い出した。

「さて、士達仮面ライダーは3つに別けた方がいいかな？」

「3つ？どういうことですか？」

フェイトのライダーたちを3つに別けるっと、言う意味にまどかは頭を傾けながら聞いてみた。それを返したのは、ユウスケだった。

「さっき言った2つに見滝原の魔女退治の部隊ってところかな」

「だから、レリック捜査班・ガイアメモリ捜査班・魔女退治の3グループに別れて行動ってところかな」

ユウスケとフェイトの二人の説明に『見滝原の魔女退治』って言葉に、まどかと杏子とマミが驚きをあげた。

「ど、どういうことですか！？」

「そうだよ！説明してよ！」

「私たち聞いてません！！」

3人に問い詰められるユウスケとフェイトだったが、その横では興味あるように聞き耳を立てているほむらに、完全に寝ているさやか。その寝ているさやかの後ろに立つシグナムは右手をグーにして、まどか達に説明をしていた。

「私たちの世界とお前たちの世界は全くの別々の世界、そう簡単には探して見つかる筈がない。だが、行ける方法は…（ゴンッ！）」

「いたぁぁぁぁぁぁぁぁい――――――！！」

「お前らも見たと思うがあのオーロラで、お前らを元の世界に返す。…って、うるさいぞ！お前！！」

「だ、だってぇぇぇ～！」

シグナムが説明しながら、寝ているさやかの頭に強力拳骨で叩き起こして、更に士が説明した。その拳骨が痛かった為、泣きべそのさやかは殴られた頭を抑えながら、士に怒られていた。そんな中、マミがはやて達に質問していた。

「あ、あの…私達を元の世界に返してくれるのは嬉しいのですが、どうして魔女退治の方も付き合ってくれるんですか？」

「そうだよ、はやての姉ちゃん。これはあたし達の問題だし、姉ちゃん達には関係ない話の筈だよ！…なのに、なんで」

「フェイト隊長やユウスケさん、カズマさんと同じ、私達は困っている人を見過ごす訳にはいかない。まぁ…私は六課の部隊長だから、みんなと行動できへんけど、サポート位なら出来るよ。だから私達、機動六課もあなた達と一緒に協力させてくれへんかな？」

協力させてくれと言う言葉に、マミと杏子は悩んでいた。はやて達、機動六課もこれから大変な任務があるのに、自分たち魔女退治も付

き合ってくれる……正直言えば、二人は有難い話だ。しかし、これ以上自分達にも付き合わせて良いのかと迷い、そして……

「――悪いけど、姉ちゃん。協力させてくれるのは嬉しいんだけどさ、ここはさ」

「――私達が機動六課に協力したいです！お願いします！」

「こんな私達だけどさ、このまま借りばかり作らせてもらって嫌だもん！だから、協力させてくれよ！」

「いや、けどな……うーん」

逆に二人から協力をお願いされる事になり逆にはやても困っていたが、翔太郎が二人の間に入った。

「協力って言うより、素直に魔法少女は助け合いで良いだろ。無論、俺たちライダーもお前らを助け合っていくつもりだ。」

「俺も変に協力体制より、俺たちは今の関係で良いと思う」

「翔太郎さんに幸太郎さん……はい。ほんなら、2人とも。それでええか？」

「「はい！」」

翔太郎の魔法少女は助け合いの発言により、少しずつ何かが繋がり始めていたことに誰も知らなかった。そして、マミはある事に気付いた。

「でも、そのオーロラはどうやって？」

『あら、忘れたのぉ～？私もあれ使ったの』

「そういえばそうだよな」

「本来なら俺も使えるが、キバーラの方が慣れている。」

マミの質問にキバーラが答え、杏子もそのことを思い出していた。

そして、はやては部隊分けのメンバーを言った。

機動六課在留ライダー／ディケイド・キバーラ・ブレイド・キバ・電王

見滝原・魔女退治ライダー／クウガ・カブト・ファイズ・ＮＥＷ電王

１０８部隊でガイアメモリ捜索ライダー／ダブル・アギト・龍騎

「こんな感じで決めたんだけど、どうかな？」

「俺は別にいいぞ。」

「俺もこの方が良いと思う。」

「以下同文」

士・ユウスケ・翔太郎、他もこのチーム分けに納得した。

まどか達も自分たちの世界に戻れると聞いて嬉しそうにしていた。

そんな中マミは、まどかとさやかにあることを言った。

「鹿目さん、美樹さん。お願いがあるんだけど、良いかしら？」

「何ですか、マミさん？」

「……元の世界に戻ったら、もう私に…ううん。魔法少女に関わらないで」

「「えっ…？」」

マミが頭を下げながら、二人にお願いした。最初は何の事を言っているのか分からない二人にマミは、最初に出会った時キュゥべえから彼女達に魔法少女の素質があると聞いて、一人ぼっちの孤独に負けた事に一緒に戦ってくれる仲間を求めてしまった事を言った。

頭を下げたまま、まどかやさやかの顔を見ないで言い続けた。マミはきっと怒っているに違いないと思っていた。そう思うと何故が身体が震えていた…そして、マミの右肩に手が触れていることに気づ

いた。マミは恐る恐る、顔を上げ…

「――謝りたいのは私の方だよ、マミさん。」

「――えっ？」

「だってさ、私。マミさんの気持ち全然分かってなかった…正義の味方って思って、マミさんに憧れていたよ。なのにさ…マミさんだって、私達と同じ女の子で、中学生なのに……」

「美樹さん…？」

「なのに……辛い気持ち、悲しい気持ち、泣きたい気持ちを分かってあげられなかった……。あの時、病院の件が終わって、フェイトさん達の前で泣いた時分かったんだ。あぁ、マミさんも女の子なんだって…正義の味方以前に、普通の女の子なんだって」

「う、うん。私も同じです…マミさん。」

「それで、まどかと決めたんです！あの時、マミさんやユウスケさんにフェイトさん達と一緒について来たのは、何も出来ないけど、友達としてマミさんの傍に居ようって」

「ですから、一緒に協力させて下さい！」

さやかとまどかの一言一言に、大粒の涙を流しながらマミの顔はグシャグシャになっていた。

「一人でやっていける…って、思ったのに……これじゃ、また弱くなっちゃうよ…」

「いいや、それは違う」

そう言い出したのは、ソウジだった。天（空）を指し示すポーズを取るように、こう言った。

「おばあちゃんが言っていた。人は人を愛すると弱くなる・・けど、恥ずかしがる事は無い。それは本当の弱さじゃないから。」

「本当の弱さじゃない……？」
「成程…いいか、巴。そんな弱い気持ちを認めることこそ強さだ…お前は十分強くなっている証拠だ。」

ソウジとシグナムの二人の話にマミは、言った

「私…もう迷いません！この胸に生まれた勇気を消したくありません！私は私にしかなれない。弱くっても良い、だってそれが私なんです！」
「巴……良い目になったな。」

「さて、話も済んだ所で…ほんなら、みんな！これからもよろしくお願いや！」
「「「はい！」」」

ライダー・魔導師・魔法少女の３つが一致団結し、１つになった。
すべては、人々を守る為に…

～～～～～～
？？？
生体ポットが何個が置いてある部屋に、一人の女性が立っていた。
その女性は、生体ポットの管理を任されているように、４つのポットに入っている者たちを見ていた。
そんな中、ワルプルギスが入ってきた。

「留守の間任せて、悪いわね。――――。で、この子達はどう？」
「はい、予定通りです。主、ワルプルギス様」
「そう。３人は兎に角、そっちは丁寧に扱ってね。大事な実験体…『ＮＥＶＥＲ』の実験道具の死体ですから」
「はい、主。」

ワルプルギスは嬉しそうに死体と言い、それを答える女性。
それを確認してから、ワルプルギスは部屋から出ようとした…

「それじゃ、私は次の準備に入るわ。だから、いつでも貴女と『マテリアル』を使えるようにしといてね。――――よろしく、『闇の書の意思』」

１０代後半相当の銀髪赤眼の女性…リィンフォース？に酷似した女性、『闇の書の意思』と呼ばれる者はこう答えた

「了解です、我が主・ワルプルギス様…」

外伝　第１７．５話　「３つの道」（後書き）

３つに分かれての行動って事で、次回は先に機動六課の回です。

スピンオフ書いてたから、色々遅れちゃったから、雑だなー元からだけど‥

さて、ネオ・バダン帝国も戦力強化中です。ＮＥＶＥＲとして蘇る人物は一体誰か、マテリアルもまさかの復活フラグです。まぁ、マテリアルはギャグ要因で良いかなー（おいっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5702v/

仮面ライダー×魔法少女×魔法少女　ディケイド＆リリカルなのは＆まどか☆

2011年12月13日01時51分発行